
飯 能 市

上 町 東 / 旭 原

一般国道299号（飯能狭山バイパス）建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 6

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念として、誰もが安全・安心・快適に通行できる道路空間を形成するとともに、環境に十分配慮した道づくりを推進しています。

さらに、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策の実施により、「時間が読める道づくり」を推進しています。

一般国道299号飯能狭山バイパス建設事業は、こうした施策のひとつであります。建設予定地のある飯能市内においては、市街地を国道が通過しているため、交通量に比べ道幅が狭く、慢性的な交通渋滞が発生しており、地域間交通の円滑化を図るためには、バイパスの新設が急務となっております。

飯能市は、埼玉県の南西部に位置し、外秩父山地を源とする入間川・高麗川等の河川によって育まれた自然豊かな景勝の地であります。この豊かな自然環境のなかで、人々は古来よりこの地を生活の場とし、多くの足跡を残してきました。

今回の道路建設予定地内には、埋蔵文化財包蔵地（上町東遺跡・旭原遺跡）の所在が知られていました。埋蔵文化財の取り扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず現状保存が困難となる範囲について、記録保存の措置を講ずることとなり、埼玉県生涯学習部生涯学習文化財課の調整により、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて、当事業団が発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、上町東遺跡からは、縄文時代中・後期の竪穴住居跡・深鉢形土器、江戸時代の竪穴状遺構などが発見されました。江戸時代の遺構からは、幕末～明治期のわずかな期間に生産され、いまだ実態が明らかとなっていない、飯能焼の製品が多数発見されました。

また、旭原遺跡からは、旧石器時代末期の石器集中、縄文時代中期の竪穴住居跡・陥し穴、奈良時代の竪穴住居跡などが発見されました。

本書は、この発掘調査の成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また普及・啓発の資料として広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育庁生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県県土整備部道路街路課、飯能県土整備事務所、飯能市教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 福田陽充

例言

1. 本書は、埼玉県飯能市に所在する上町東遺跡・旭原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

上町東遺跡 (略号KTH 遺跡番号21-116)
埼玉県飯能市中山字上町531-1 他
平成13年6月20日付け教文第2-30号

旭原遺跡 (略号ASHHR 遺跡番号21-108)
埼玉県飯能市中山356他
平成15年7月16日付け教文第2-29号
3. 発掘調査は、一般国道299号飯能狭山バイパス建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。
5. 調査期間と調査担当者は以下のとおりである。

上町東遺跡
平成13年5月1日～平成13年8月31日
調査担当者 君島勝秀 上野真由美

旭原遺跡
平成15年6月19日～平成15年9月30日
調査担当者 栗岡 潤 宅間清公
6. 報告書作成事業は、平成17年11月1日から平成18年3月24日まで宮井英一が担当し実施した。
7. 遺跡の基準点測量は、上町東遺跡はアスコエン지니어リング株式会社、旭原遺跡は精進測量設計株式会社が実施した。
8. 遺跡の空中写真は、旭原遺跡で朝日航洋株式会社が実施した。
9. 掲載した遺構写真は、各調査担当者が、遺物写真は、栗岡潤、渡辺清志が行った。
10. 出土遺物の整理および図版の作成は、栗岡潤、渡辺清志が主として行い、亀田直美、成田友紀子、浅見ふみ、山北美穂の協力を得た。
11. 本書の執筆は栗岡・渡辺が主に行い、第1章-1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、上町東遺跡を渡辺が、旭原遺跡を栗岡が行った。
なお、旭原遺跡の旧石器・縄文時代の石器は亀田が執筆した。
12. 本書の編集は、宮井英一が行った。
13. 本書にかかると資料は、平成18年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
14. 発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々にご教示、ご協力を賜った。
飯能市教育委員会 石塚和則 熊沢孝之
曾根原裕明 宮元久美子 村上達哉 (敬称略)

凡例

1. 本書中におけるX・Yの数値は、日本測地系(旧測地系)による平面直角座標第IX系(原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく座標値を示し、各挿図における方位は、すべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、10m×10mを基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北からA・B・C、東西方向は西から1・2・3と付し、A-1グリッド等の名称を付けた。
4. 遺構番号は、原則として調査時に付した遺構番号を掲載しているが、上町東遺跡については整理作業段階で番号を変更したものがあり、新旧対照表を右に示した。
5. 本文中に使用した遺構・遺物(旭原遺跡石器略号)は以下のとおりである。

遺構

- SJ 竪穴住居跡
SB 掘立柱建物跡
SK 土壇
SE 井戸跡
SD 溝跡
SC 集石土壇
SX 竪穴状遺構
SS 石器集中
TP 試掘坑

遺物(旭原遺跡石器)

- Ch チャート
GAn ガラス質黒色安山岩
Ob 黒曜石
Sa 砂岩

SSh 珧質頁岩

R フレーク 二次加工を有する剥片

U フレーク 微細な剥離痕を有する剥片

6. 遺構図及び実測図の縮尺は各挿図中に縮尺率とスケールを示した。同一図中に縮尺の異なる場合は、図中にその都度例示した。

遺構 全体図 1/500

竪穴住居跡・掘立柱建物跡 1/60・1/30

土壇・井戸跡・集石土壇 1/60・1/30

竪穴状遺構 1/60

石器集中 1/60

遺物 石器 2/3・1/3・1/2

縄文土器 1/4・1/3

拓影図 1/3

須恵器・陶磁器 1/4・1/3

7. 遺構断面図に表記した水準値は、海拔標高で、単位はmである。
8. 本文遺構図に示したスクリーンは、各遺構種類ごとに凡例が異なるため、遺構図ごとにその都度凡例を例示した。
9. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50000の地形図を利用した。
10. 本書に使用した引用・参考文献は、巻末にその一覧表を記載した。

上町東遺跡遺構名新旧対照表

旧	新
SK22	第7号竪穴状遺構
SK32	第8号竪穴状遺構

目次

序	4. 溝跡	46
例言	5. 土城	48
凡例	6. ビット列	63
目次	7. 井戸跡	63
I 発掘調査の概要	8. ビット	63
1. 発掘調査に至る経過	9. グリッド出土遺物	67
2. 発掘調査・報告書作成の経過	10. 近世・近代の遺物	70
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	V 旭原遺跡の調査	83
II 遺跡の立地と環境	1. 旧石器時代	84
III 遺跡の概要	2. 住居跡	94
1. 上町東遺跡	3. 土城	97
2. 旭原遺跡	4. 集石土城	108
IV 上町東遺跡の調査	5. その他の遺構と遺物	111
1. 住居跡	VI 結語	118
2. 竪穴状遺構	引用・参考文献	
3. 掘立柱建物跡	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第17図 第2号住居跡出土遺物 (1)	24
第2図 周辺の遺跡	6	第18図 第2号住居跡出土遺物 (2)	25
第3図 遺跡周辺の地形図	9	第19図 第3号住居跡平面図	26
第4図 遺跡付近の地形概念図	10	第20図 第3号住居跡遺物出土状況	27
第5図 上町東遺跡全体図	11	第21図 第4号住居跡平面図 (1)	28
第6図 旭原遺跡全体図	12	第22図 第4号住居跡平面図 (2)	29
第7図 第1号住居跡平面図	14	第23図 第5号住居跡平面図	30
第8図 第1号住居跡炉跡平面図	15	第24図 第3号～5号住居跡出土遺物 (1)	31
第9図 第1号住居跡敷石平面図	16	第25図 第3号～5号住居跡出土遺物 (2)	31
第10図 第1号住居跡遺物出土状況	17	第26図 第6号住居跡平面図	32
第11図 第1号住居跡出土遺物 (1)	18	第27図 第6号住居跡炉跡平面図	33
第12図 第1号住居跡出土遺物 (2)	19	第28図 第6号住居跡出土遺物 (1)	34
第13図 第1号住居跡出土遺物 (3)	20	第29図 第6号住居跡出土遺物 (2)	35
第14図 第2号住居跡平面図	21	第30図 第1号竪穴状遺構平面図	37
第15図 第2号住居跡炉跡平面図	22	第31図 第2号竪穴状遺構平面図	38
第16図 第2号住居跡遺物出土状況	23	第32図 第3号・4号竪穴状遺構平面図	39

第33図	第5号竪穴状遺構平断面図	40	第64図	近世～近代の陶磁器(2)	73
第34図	第6号竪穴状遺構平断面図(1)	41	第65図	近世～近代の陶磁器(3)	74
第35図	第6号竪穴状遺構平断面図(2)	42	第66図	近世～近代の陶磁器(4)	75
第36図	第7号竪穴状遺構平断面図	43	第67図	近世～近代の陶磁器(5)	76
第37図	第8号竪穴状遺構平断面図	44	第68図	近世～近代の陶磁器(6)	77
第38図	第1号掘立柱建物跡平断面図	45	第69図	瓦	81
第39図	溝跡平断面図(1)	46	第70図	その他の遺物	82
第40図	溝跡平断面図(2)	47	第71図	旭原遺跡ローム層基本順序	84
第41図	土壌平断面図(1)	48	第72図	旧石器時代調査区及び深度図	85
第42図	土壌平断面図(2)	49	第73図	第1号石器集中器種別分布図	86
第43図	土壌平断面図(3)	50	第74図	第1号石器集中石材別分布図	87
第44図	土壌平断面図(4)	51	第75図	旧石器時代出土石器(1)	89
第45図	土壌平断面図(5)	52	第76図	旧石器時代出土石器(2)	90
第46図	土壌平断面図(6)	53	第77図	旧石器時代出土石器(3)	91
第47図	土壌平断面図(7)	54	第78図	旧石器時代出土石器(4)	92
第48図	土壌平断面図(8)	55	第79図	第1号住居跡	94
第49図	土壌平断面図(9)	56	第80図	第1号住居跡山土土器	95
第50図	土壌平断面図(10)	57	第81図	第2号住居跡	96
第51図	土壌平断面図(11)	58	第82図	土壌(1)	98
第52図	土壌平断面図(12)	59	第83図	土壌(2)	99
第53図	土壌平断面図(13)	60	第84図	土壌(3)	101
第54図	土壌出土遺物	61	第85図	土壌(4)	103
第55図	ピット列平断面図	62	第86図	土壌(5)	105
第56図	井戸跡平断面図	63	第87図	土壌出土遺物	107
第57図	グリッドピット平面図(1)	64	第88図	第1号集石土壌	109
第58図	グリッドピット平面図(2)	65	第89図	第2号集石土壌	110
第59図	グリッド出土遺物(1)	67	第90図	グリッドピット(1)	113
第60図	グリッド出土遺物(2)	68	第91図	グリッドピット(2)	114
第61図	グリッド出土遺物(3)	69	第92図	グリッドピット(3)	115
第62図	グリッド出土遺物(4)	69	第93図	グリッド出土遺物	117
第63図	近世～近代の陶磁器(1)	72			

表目次

第1表	第1号住居跡ピット計測表	16	第4表	第4号住居跡ピット計測表	29
第2表	第2号住居跡ピット計測表	22	第5表	第5号住居跡ピット計測表	30
第3表	第3号住居跡ピット計測表	27	第6表	第6号住居跡ピット計測表	33

第7表	竪穴状遺構ビット計測表……………38	第22表	第3号竪穴状遺構出土瓦観察表……………81
第8表	第1号掘立柱建物跡ビット計測表……46	第23表	第6号竪穴状遺構出土瓦観察表……………81
第9表	土壌計測表……………60	第24表	第8号竪穴状遺構出土瓦観察表……………81
第10表	ビット列計測表……………62	第25表	グリッド出土瓦観察表……………81
第11表	グリッドビット計測表……………66	第26表	籬羽口観察表……………82
第12表	第2号井戸跡出土陶磁器観察表……………78	第27表	鉄滓観察表……………82
第13表	第22号土壇出土陶磁器観察表……………79	第28表	金属製品観察表……………82
第14表	第30号土壇出土陶磁器観察表……………79	第29表	古銭観察表……………82
第15表	第32号土壇出土陶磁器観察表……………79	第30表	石製品観察表……………82
第16表	第1号竪穴状遺構出土陶磁器観察表…79	第31表	旧石器時代石器計測表……………93
第17表	第2号竪穴状遺構出土陶磁器観察表…79	第32表	第2号住居跡出土遺物観察表……………96
第18表	第3号竪穴状遺構出土陶磁器観察表…79	第33表	第1・2号集石土壇構成礫属性表… 109
第19表	第4号竪穴状遺構出土陶磁器観察表…80	第34表	ビット計測表(1) …………… 111
第20表	第6号竪穴状遺構出土陶磁器観察表…80	第35表	ビット計測表(2) …………… 112
第21表	グリッド出土陶磁器観察表……………80		

図版目次

図版1	上町東・旭原遺跡遠景(東から)		
	上町東・旭原遺跡遠景(西から)		
図版2	上町東遺跡全景(東から)		
	上町東遺跡全景(西から)		
図版3	第1号住居跡全景		
	第1号住居跡敷石出土状況		
	第1号住居跡炉跡		
	第2号住居跡全景		
	第2号住居跡埋壘出土状況		
	第2号住居跡埋壘断面		
図版4	第3号住居跡全景		
	第3号住居跡敷石出土状況		
	第4号住居跡全景		
	第5号住居跡全景		
	第6号住居跡全景		
	第6号住居跡炉跡		
図版5	第1号竪穴状遺構全景		
	第2号竪穴状遺構全景		
	第3号竪穴状遺構全景		
	第4号竪穴状遺構全景		
	第5号竪穴状遺構全景		
	第6号竪穴状遺構全景		
	第7号竪穴状遺構全景		
	第8号竪穴状遺構全景		
	第9号竪穴状遺構全景		
	第10号竪穴状遺構全景		
	第11号竪穴状遺構全景		
	第12号竪穴状遺構全景		
	第13号竪穴状遺構全景		
	第14号竪穴状遺構全景		
	第15号竪穴状遺構全景		
	第16号竪穴状遺構全景		
	第17号竪穴状遺構全景		
	第18号竪穴状遺構全景		
	第19号竪穴状遺構全景		
	第20号竪穴状遺構全景		
	第21号竪穴状遺構全景		
	第22号竪穴状遺構全景		
	第23号竪穴状遺構全景		
	第24号竪穴状遺構全景		
	第25号竪穴状遺構全景		
	第26号竪穴状遺構全景		
	第27号竪穴状遺構全景		
	第28号竪穴状遺構全景		
	第29号竪穴状遺構全景		
	第30号竪穴状遺構全景		
	第31号竪穴状遺構全景		
	第32号竪穴状遺構全景		
	第33号竪穴状遺構全景		
	第34号竪穴状遺構全景		
	第35号竪穴状遺構全景		
図版6	第4号竪穴状遺構全景		
	第5号竪穴状遺構全景		
	第6号竪穴状遺構全景		
	第7号竪穴状遺構全景		
	第8号竪穴状遺構全景		
	第1号掘立柱建物跡全景		
	第1・2号溝跡全景		
	第3号溝跡全景		
	第2号井戸跡全景		
図版7	第1号住居跡出土土器	第11図1	
	第2号住居跡出土土器	第17図1	
	第6号住居跡出土土器	第28図1	
	第6号住居跡出土土器	第28図2	
	近世～近代の陶磁器	第63図1	
	近世～近代の陶磁器	第63図3	
図版8	近世～近代の陶磁器	第63図6	
	近世～近代の陶磁器	第63図7	
	近世～近代の陶磁器	第63図8	
	近世～近代の陶磁器	第63図10	

	近世～近代の陶磁器 第64図14	図版21	薮羽口・鉄洋 第70図
	近世～近代の陶磁器 第64図16		金属製品・古銭・石製品 第70図
図版9	近世～近代の陶磁器 第64図23	図版22	旭原遺跡全景
	近世～近代の陶磁器 第64図24		旭原遺跡全景(東から)
	近世～近代の陶磁器 第64図27	図版23	第1号住居跡全景
	近世～近代の陶磁器 第64図28		第1号住居跡土層断面
	近世～近代の陶磁器 第64図29		第2号住居跡全景
	近世～近代の陶磁器 第65図30		第2号住居跡遺物出土状況
図版10	近世～近代の陶磁器 第65図31		第3号土壇
	近世～近代の陶磁器 第65図32		第3号土壇
	近世～近代の陶磁器 第65図35	図版24	第11号土壇
	近世～近代の陶磁器 第68図68		第16号土壇
	近世～近代の陶磁器 第68図69		第47号土壇
	近世～近代の陶磁器 第68図71		第49号土壇
図版11	第1号住居跡出土土器 第12図2～25		第46号土壇遺物出土状況
	第1号住居跡出土土器 第12図26～47		第46号土壇完掘状況
図版12	第1号住居跡出土土器 第12図48～51	図版25	第1号集石土壇
	第1号住居跡出土土器 第13図52・53		第1号集石土壇完掘状況
図版13	第2号住居跡出土土器 第18図5～18		第2号集石土壇
	第3～5号住居跡出土土器 第24図1～14		第2号集石土壇完掘状況
図版14	第6号住居跡出土土器 第29図3～9		第1号石器集中遺物出土状況
	第6号住居跡出土土器 第29図10～15		ローム層断面(TP3)
図版15	土壇出土土器 第54図1～12	図版26	旧石器時代の石器 第75・76図(表)
	グリッド出土土器 第60図3～24		旧石器時代の石器 第75・76図(裏)
図版16	グリッド出土土器 第60図25～41	図版27	旧石器時代の石器 第76・77図(表)
	グリッド出土土器 第60図42～48		旧石器時代の石器 第76・77図(裏)
図版17	グリッド出土土器 第61図49～57	図版28	旧石器時代の石器 第77・78図
	グリッド出土土器 第62図58～60		第1号住居跡出土土器 第80図
図版18	近世～近代の陶磁器 第64図	図版29	土壇出土土器 第87図
	近世～近代の陶磁器 第65図		グリッド出土土器 第93図
図版19	近世～近代の陶磁器 第66図・第67図	図版30	縄文時代の石器 第87・93図
	近世～近代の陶磁器 第66図～第68図		第46号土壇出土遺物 第87図
図版20	近世～近代の陶磁器 第68図		第2号住居跡出土土器 第81図
	瓦 第69図		

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国5か年計画21』に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業にかかる埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

一般国道299号飯能狭山バイパス建設事業に係る埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについては、まず平成10年7月28日付け道建第221号で埼玉県県土整備部道路整備課長（当時）から、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長（当時）あて照会があった。

これを受けて文化財保護課（当時）では、試掘による確認調査を実施し、上町東遺跡（No21-116）、の所在を確認した。平成13年2月5日付け教文第1062号で道路整備課長あて、埋蔵文化財の所在及び法手続きについて回答するとともに、その取り扱いについて、埋蔵文化財については「現状保存が望ましいが、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施」することを回答した。

その後、前回照会地の東側について平成14年1月21日付け道街第779号で埋蔵文化財の所在及び取扱いに関する照会が道路街路課長から文化財保護課長あてに出された。これを受けて文化財保護課では確認調査を実施し、旭原遺跡（No21-108）の所在を確認した。平成14年11月15日付け教文第1171号及び平成15年2月10日付け教文第1510号で道路街路課長あて埋蔵文化財の所在及び法手続きについて回答するとともに、その取り扱いについて、「工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施」することを回答した。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財

調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、飯能県土整備事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題をを中心に協議が行われた。

その結果、発掘調査は、以下の期間で実施された。

上町東遺跡

平成13年5月1日～平成13年8月31日

旭原遺跡

平成15年6月19日～平成15年9月30日

なお、文化財保護法第57条の3（現第94条）の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から

平成13年5月7日付け道街第117号（上町東遺跡）

平成15年4月1日付け道街第142号（旭原遺跡）

で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は、平成13年5月14日付け教文第3-107号（上町東遺跡）

平成15年6月9日付け教文第3-121号（旭原遺跡）で行った。

また、文化財保護法第57条第1項（現第92条）の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

上町東遺跡

平成13年6月20日付け教文第2-30号

旭原遺跡

平成15年7月16日付け教文第2-29号

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

上町東遺跡

上町東遺跡の発掘調査は、平成13年5月1日から平成13年8月31日まで実施した。調査面積は、2,500㎡であった。

平成13年5月中に事務手続き、事務所設置を行い、6月初旬に重機による表土除去作業を開始した。

表土除去作業終了後、基準点測量を実施し、人力で遺構確認作業を行い、調査を開始した。順次土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。

遺構の調査終了後、7月下旬に埋戻しを開始し、8月初旬に事務所撤去、事務手続き等を行い、調査を終了した。

調査の結果、検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡6軒、陥し穴2基・ピットが検出された。また、中・近世の掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構8基、土壇56、井戸跡2基、溝跡4条が検出された。

出土遺物は、縄文時代の土器・石器、近世の陶磁器などコンテナに11箱出土した。

旭原遺跡

旭原遺跡の発掘調査は、平成15年6月19日から平成15年9月30日まで実施した。調査面積は、3,000㎡であった。

平成15年6月下旬に事務手続き、事務所設置を行い、7月初旬にかけて重機による表土除去作業を開始した。表土除去作業終了後、基準点測量を実施し、人力で遺構確認作業を行い、調査を開始した。順次土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。

また、調査中旧石器時代の遺物が出土したため、数箇所に試掘坑を設け、調査を行った。その結果、立川ロームⅢ層相当層から、石器集中が1箇所検出された。

9月10日に空中写真撮影を実施し、9月下旬に埋戻し・事務所撤去、事務手続き等を行い、調査を終了した。

調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代の石

器集中1箇所、縄文時代の竪穴住居跡1軒、陥し穴5基、土壇49基、築石土壇2基、ピット、奈良時代の竪穴住居跡1軒が検出された。

出土遺物は、旧石器時代の石器、縄文時代の土器・石器、奈良時代の土師器・須恵器などコンテナに8箱出土した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成17年11月1日から平成18年3月24日まで実施した。

11月当初から、遺物の水洗・注記を行い、続いて遺物の接合・復元作業を行った。

全体図・遺構図面に関しては、図面修正を経て第2原図を作成し、スキャナーでコンピューターに取り込んだ後、グラフィックスソフトでデジタルトレースを行い、土層注記等を挿入し編集作業を行った。

遺物は復元が終了したものから、実測作業に入り、12月からトレース・採拓を実施し、版下の作成を行った。陶磁器については、染付け等の文様をデジタルカメラで撮影し、断面実測図と合わせてグラフィックスソフトで加工・編集作業を行った。

実測終了後、1月に遺物の写真撮影を行った。遺構・遺物の整理作業が終了した段階で、報告書の編集と原稿執筆作業を行った。

2月上旬に、印刷会社を決定し、入稿した。3回の校正を経て、平成18年3月に報告書を刊行した。

入稿の前後に本報告書で取り扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成13年度（上町東遺跡）

理事長	中野 健一
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大館 健
管理部	
管理幹事	持山 紀男
主任	江田 和美
主任	長滝 美智子
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
主任	菊池 久

調査部

調査部長	高橋 一夫
調査部副部長	坂野 和信
主席調査員（調査第二担当）	昼間 孝志
主任調査員	君島 勝秀
調査員	上野 真由美

平成15年度（旭原遺跡）

理事長	桐川 卓雄
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	中村 英樹
管理部	
管理部副部長	村田 健二
主席	田中 由夫
主任	江田 和美
主任	長滝 美智子
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
主任	菊池 久

調査部

調査部長	宮崎 朝雄
調査部副部長	坂野 和信
主席調査員（調査第二担当）	劔持 和夫
主任調査員	栗岡 潤
調査員	宅間 清公

(2) 整理・報告書作成事業

平成17年度

理事長	福田 陽充
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	保永 清光

管理部

管理部副部長	村田 健二
主席	高橋 義和
主席	宮井 英一
主任	福田 昭美
主任	菊池 久
主事	海老名 健
主事	岩上 浩子

調査部

調査部長	今泉 泰之
調査部副部長	坂野 和信
主席調査員（資料整理担当）	金子 直行
主任調査員	栗岡 潤
主任調査員	渡辺 清志

II 遺跡の立地と環境

上町東遺跡・旭原遺跡は、埼玉県飯能市中山に所在し、西武池袋線飯能駅の北約1.2kmの入間台地上に位置する。両遺跡間の最短距離は、約300mと近接して立地している。

遺跡が立地する入間台地は、南側は入間川で川越台地と、北側は越辺川によって比企丘陵と区切られている。

この入間台地は、毛呂・坂戸・飯能の3つの台地に区分され、遺跡のある飯能市は、飯能台地に区分される。

飯能市は、埼玉県西部の、外秩父山地の東縁に位置している。市域の約70%はこの外秩父山地で占められ、現在の市街地のある平地は、入間川によって形成された古い扇状地形となり、三つの河岸段丘に分かれている。

外秩父山地からは、幾つかの丘陵が東側に張り出

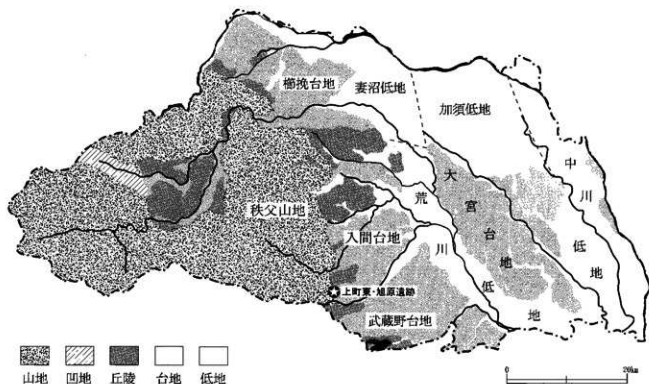
し、飯能市域は、北は高麗丘陵、南は加治丘陵によって画されている。

上町東遺跡は、高麗丘陵の末端部と入間川によって形成された段丘との境界付近に立地し、丘陵が南側にやや舌状に張り出した部分に位置している。遺跡の北側には、丘陵を開析した小支谷が存在し、これを谷戸とする小河川が遺跡の東側を南流する。遺跡付近の標高は120mである。

一方、旭原遺跡は、上町東遺跡の東約300mと近接して立地するが、上町東遺跡とは、立地条件がやや異なっている。

旭原遺跡は、上町東遺跡ある高麗丘陵末端部からは一段低い河岸段丘最上部に立地する。

遺跡の北側は南小群川が東流する谷となっており、南側は一段下の段丘へと続く斜面あるいは崖となっている。調査地点の南側に隣接する聖望学園は、



第1図 埼玉県の地形

一段下の段丘上にある。したがって、旭原遺跡は、南小畔川形成した谷と、段丘斜面に挟まれた細長い馬の背状の地形となっている。遺跡付近の標高は、117mで、上町東遺跡とは3mの比高差がある。

周辺の遺跡は、飯能市及びその周辺部では、旧石器時代から近世までの遺跡が存在するが、ここでは、特に、上町東・旭原両遺跡と関係の深い、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代、中・近世の遺跡について概観したい。

第2図に上町東・旭原遺跡周辺の遺跡を示した。遺跡は、高麗川流域、高麗丘陵、南小畔川流域、入間川流域、加治丘陵、霞川流域に分布している。

旧石器時代の遺跡は、旭原遺跡で今回旧石器時代の最末期の遺物が出土したが、該期の遺跡は現段階では確認されていない。

砂川期の遺跡は、南小畔川流域では屋洲遺跡(27)・狭山市西久保遺跡(32)、加治丘陵に坂東山遺跡(47)が知られている。

また、加治丘陵南側の霞川流域の入間市西武蔵野遺跡(58)では、黒曜石の尖頭器を中心とした石器群が検出された。

縄文時代は、当地域では数多くの遺跡が確認されている。特に中期においては大規模な集落が存在している。

第2図に掲載できなかったが、入間川を遡った山地に、小岩井渡場遺跡で草創期・前期の遺物が検出されている。

高麗丘陵上には中期中葉から後半の大集落である八王子遺跡(9)・大日向遺跡(10)、また、成木川が入間川と合流する地点付近には、落合上之台遺跡(62)があり、早期～後期の遺構・遺物が検出され、特に中期には大集落が営まれていたことが知られている。

また、加治丘陵末端部では、坂東山遺跡(47)、坂東山西遺跡(46)がある。

このように、山地・丘陵上にも大規模な遺跡が確認されているが、台地上に目を転じると、入間川左

岸に草創期～晩期にかけて加能里遺跡(60)があり、小畔川・南小畔川流域では、堂前遺跡(29)、栗屋遺跡(26)、張摩久保遺跡(23)、芦刈場遺跡(19)、向原遺跡(18)、株木遺跡(25)、芋久保遺跡(21)等で中期の集落が確認されている。また、日高市向山遺跡(16)では、早期型文土器を出土する竈穴住居跡が検出されている。

入間川左岸の河岸段丘上には、宮地遺跡(35)がある。隣接する八木上遺跡(36)と、最も入間川に近い低段丘上の八木前遺跡(39)で縄文時代前期の集落が確認されている。

当地域では、縄文時代以降、入間川左岸の段丘上で古墳が確認されている他は、奈良・平安時代に至るまでは、遺跡の密度の極めて薄い地域である。

奈良・平安時代の遺跡は、霊亀二年(716年)の高麗建部に呼応するように、8世紀前半頃に出現する。遺跡は、特に南小畔川流域に分布が集中し、旭原遺跡、屋洲遺跡(27)、張摩久保遺跡(23)、堂ノ根遺跡(22)等が代表される。この中でも張摩久保遺跡は、地域最大級の遺跡で、銅製容器片、円面硯、皇朝十二銭等が出土している。また、堂ノ根遺跡では、常陸産須恵器が出土している。

入間川左岸の段丘上には狭山市宮地遺跡(35)、西久保遺跡(32)を初め、同一段丘状に入間川下流方向へ連綿と奈良・平安時代の遺跡が続いている。

また、当地域では、8世紀後半頃から、須恵器生産が盛んな地域であった。入間川右岸の加治丘陵中に、前内出窯跡(42)、八坂前窯跡(50)、新久窯跡(51)を中心とする東金子窯跡群があり、須恵器・瓦の焼成窯が存在する。東金子窯跡群は、末野、南比企、南多摩窯跡群と並ぶ武蔵国四ヶ窯跡群のひとつを形成していた。加治丘陵を中心に、遺跡の広がりも、入間川左岸の東八木窯跡(40)を北限とし、霞川南岸の谷久保遺跡(53)を南限とする東西約2km、南北約2.5kmの範囲に及んでいる。

窯跡の操業期間は、8世紀後半～10世紀代までとされ、また、平安時代には、他に加治丘陵中に森次



第2図 周辺の遺跡

- | | | |
|---------------------|-----------------------|-------------------|
| 1 上町東遺跡 | 22 堂ノ根遺跡(縄、奈・平) | 43 森坂北遺跡(奈・平) |
| 2 旭原遺跡 | 23 張摩久保遺跡(縄、奈・平) | 44 金堀沢遺跡(縄) |
| 3 高麗石器時代住居跡(縄) | 24 中原遺跡(奈・平) | 45 森坂遺跡(奈・平) |
| 4 平谷遺跡(縄) | 25 株木遺跡(縄、奈・平、中・近) | 46 坂東山西遺跡(縄、奈・平) |
| 5 高麗小学校庭遺跡(縄) | 26 栗屋遺跡(縄) | 47 坂東山遺跡(旧、縄、奈・平) |
| 6 東原遺跡(縄) | 27 屋測遺跡(旧、縄、中・近) | 48 水窪遺跡(縄) |
| 7 小竹遺跡(縄) | 28 中台遺跡(旧、縄、中・近) | 49 八津池窯跡(奈・平) |
| 8 河原毛久保窯跡(奈・平) | 29 堂前遺跡(縄) | 50 八坂前窪跡(奈・平) |
| 9 八王子遺跡(縄) | 30 飯能焼原窯跡(中・近) | 51 新久窯跡(奈・平) |
| 10 大日向遺跡(縄) | 31 大河原森下遺跡(縄、奈・平) | 52 丸山遺跡(旧、縄) |
| 11 稻荷遺跡(縄) | 32 西久保遺跡(旧、縄、奈・平、中・近) | 53 谷久保遺跡(奈・平) |
| 12 宿東遺跡(縄) | 33 上広瀬上ノ原遺跡(縄) | 54 青柳道南遺跡(縄) |
| 13 谷津遺跡(縄、中・近) | 34 金井上遺跡(縄、中・近) | 55 覆川遺跡(縄) |
| 14 二反田遺跡(縄、奈・平、中・近) | 35 宮地遺跡(縄、奈・平) | 56 十文字原遺跡(中・近) |
| 15 下向山遺跡(縄) | 36 八木上遺跡(縄) | 57 東武蔵野遺跡(縄) |
| 16 向山遺跡(縄) | 37 八木北遺跡(奈・平) | 58 西武蔵野遺跡(旧) |
| 17 上原遺跡(縄) | 38 八木遺跡(縄) | 59 池ノ東遺跡(縄) |
| 18 向原遺跡(縄) | 39 八木前遺跡(縄) | 60 加能里遺跡(縄、奈・平) |
| 19 芦荻場遺跡(縄) | 40 東八木窯跡(奈・平) | 61 前原池遺跡(縄) |
| 20 下川崎向原遺跡(縄) | 41 上広瀬北遺跡(中・近) | 62 落合上之台遺跡(縄) |
| 21 辛久保遺跡(縄) | 42 前内出窯跡(奈・平) | 63 矢風窯跡(中・近) |

遺跡名一覧

遺跡(45)で土器焼成遺構と粘土採掘坑が検出され、高麗丘陵中では河原毛久保窯跡(8)が確認されている。

中世になると、飯能市域は、武蔵武士の活躍した地域でもある。遺跡付近の地名となっている中山は、武蔵七党の丹党加治氏の一族である中山氏の本拠地である。中世末期には後北条氏に属し、徳川家康が関東入府後は、旗本・水戸家の家老となった人物も輩出された。

上町東遺跡の北側には、中山家範館跡があり、智観寺には鎌倉時代の板石塔婆が残されている。また、旭原遺跡の北側には、江戸時代初期には陣屋が置かれ、その後現在の飯能市街地に中心が移るまでは、中山地区は、当地域の中心にあったと考えられる。

江戸時代以降、現在の飯能市街地は、「西川材」を運ぶ筏師の宿として賑わい発展し、また、『新編武蔵国風土記稿』によれば、繩市と呼ばれる市が開かれ

たとされている。

江戸時代後半の天保年間以降、飯能焼と呼ばれる、「緑褐色透明釉」と「イチチン模様」を特徴とした陶器生産が行われた。

明治前半には操業が停止したとされ、操業期間が数十年と極めて短期間であるため、これまで、飯能焼は、伝世品や古文書等にその存在が認められる程度で、実態が明らかとなっていなかった。

近年、飯能焼原窯跡(30)の調査によって、ようやくその生産の実態が明らかとなったが、製品の流通に関しては、窯跡以外の遺跡での製品の出土例が極めて少なく、上町東遺跡(本報告)で纏まって出土した以外は、類例が少ない。

また、飯能焼は、原窯以外では、矢風窯(63)が知られている。

III 遺跡の概要

上町東遺跡、旭原遺跡は、埼玉県飯能市中山に所在し、西武池袋線飯能駅の北約1.2kmに位置する。両遺跡の最短距離は、約300mと近接している。

上町東遺跡は、今回の調査が最初の調査であるが、

1. 上町東遺跡

上町東遺跡の発掘調査は、平成13年5月1日～平成13年8月31日の期間で実施した。

遺跡は、高麗丘陵の末端部と入間川によって形成された河岸段丘との境界付近に立地し、丘陵がやや舌状に張り出した部分に位置している。遺跡の北側には、丘陵を開削した小支谷が存在し、これを谷戸とする小河川が遺跡の東側を南流する。遺跡付近の標高は120mで、遺跡の範囲は、東西約150m、南北約230mの、南北に長い楕円形である。

調査地点は、遺跡の中央部からやや南側にあり、東西を横断する形で調査を行った。

調査の結果、検出された遺構は、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡6軒、陥し穴2基、中・近世の竪穴状遺構8基、掘立柱建物跡1棟、土壇56基、井戸跡2基、溝跡4条が検出された。

縄文時代の竪穴住居跡のうち、2軒は柄鏡型住居の可能性があり、張り出し部に敷石が残されていた。

また、第1号竪穴住居跡の炉跡からは、称名寺式

2. 旭原遺跡

旭原遺跡の発掘調査は、平成15年6月19日～平成15年9月30日の期間で実施した。

遺跡は、上町東遺跡の東約300mと近接して立地するが、上町東遺跡とは、立地条件がやや異なっている。

旭原遺跡は、上町東遺跡の立地する高麗丘陵末端部から一段低い段丘上にあり、遺跡の北側には南小畔川が東流する谷となっており、南側は一段下の段丘へと続く斜面あるいは崖となっている。したがっ

旭原遺跡の調査については、過去に飯能市教育委員会によって、3次に亘る調査が実施されている。

以下、各遺跡ごとの概要を述べる。

の最古段階に近い土器が出土した。当期の住居跡からの出土例は、県内では類例が少なく、貴重な検出例となった。

中・近世の遺構は、出土遺物から殆どが近世に属すると考えられる。第1号掘立柱建物跡は、竪穴状遺構に壊されており、中・近世の遺構の中では最も古い時期のものと考えられるが、遺物が出土せず、詳細な時期は明らかにできなかった。

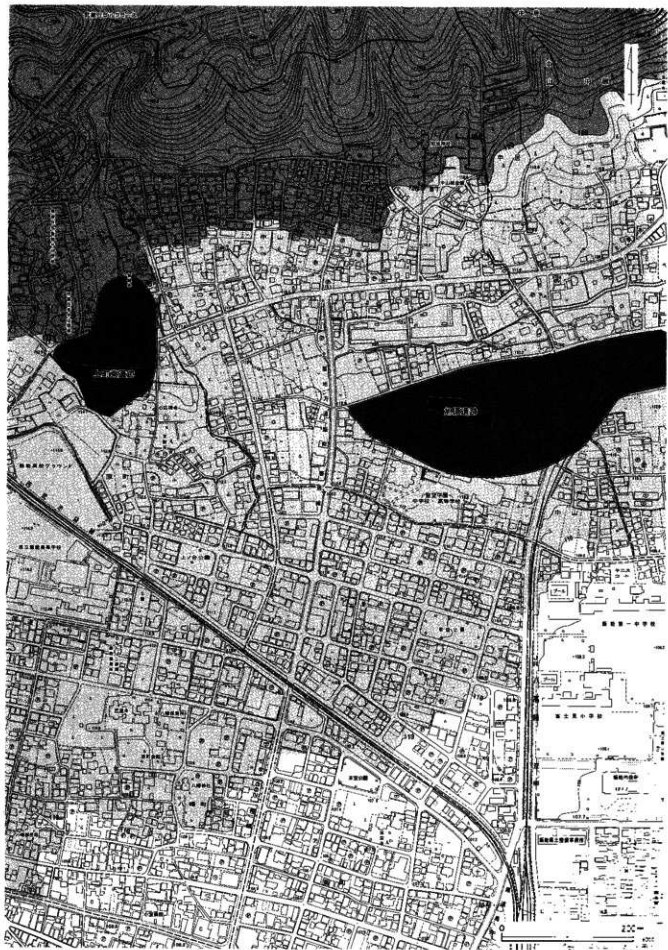
竪穴状遺構は、長方形の平面形を有し、底面は貼床が施され、床面中央部付近に炉が検出された。柱穴が検出された竪穴状遺構もあり、上層構造を有する建物遺構であったと考えられる。床面から寛永通寶(銅銭)が出土した遺構もある。

また、井戸跡からは、井戸廃絶後に廃棄された近世の陶磁器類が多量に出土した。この中に幕末～明治初頭の僅かな期間に生産された飯能焼の製品が含まれていた。飯能焼は窯跡以外からの出土例が少なく、当時の流通を知るうえで貴重な出土例となった。

て、旭原遺跡は、南小畔川の谷と、段丘斜面に挟まれた細長い馬の背状の地形となっている。遺跡付近の標高は、117mで、上町東遺跡とは3mの比高差がある。遺跡の範囲は、東西約500m、南北約160mの東西に長い楕円形である。

調査地点は、遺跡の中央部西寄りの比較的平坦な地点の調査であった。

調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代の石器集中1箇所、縄文時代の竪穴住居跡1軒、陥し穴



第3区 新宿周辺の地形図

5基、土壙44基、集石土壙2基、奈良時代の堅穴住居跡1軒、時期不明のピット274基である。

旧石器時代の調査は、数箇所を試掘坑を設け、調査を行った。その結果、立川ロームⅢ層相当層から、石器集中が1箇所検出された。調査区の南端で検出したため、さらに南側に石器集中が広がっていた可能性も考えられる。石器集中からは、削器・搔器が出土した。石核・碎片が出土したが、碎片は刃部加工時のものと考えられ、石器集中は、石器の製作跡ではなく、再加工場所であった可能性がある。時期的には、旧石器時代最末期に位置づけられる。

縄文時代の堅穴住居跡は、やや小型の円形で、遺物は少ないが、中期の破片が出土した。

陥し穴は、東西に伸びる尾根上の台地に点在するが、概ね主軸方向が一定で、ほぼ等間隔に並ぶとこ

ろもあることから、獣道の存在が想定できる。

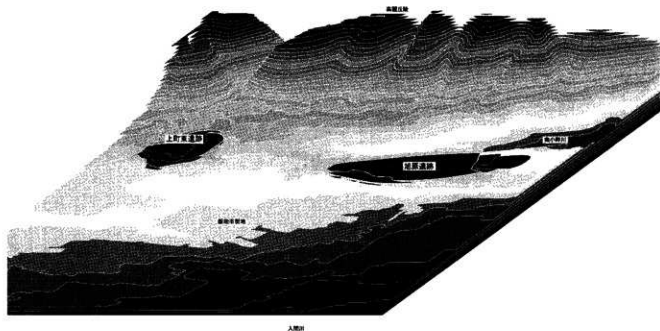
集石土壙は、ほぼ円形の土壙に直径5cm前後の破砕礫が充填され、礫の多くは火を受けていた。

土壙は、殆どが性格不明のものであるが、このうち1基から、縄文時代中期の深鉢が埋設されたものが検出された。上半部分を欠損するが、正位に埋設され、周辺に柱穴等が検出できなかったため、堅穴住居跡ではなく、屋外の埋壙であった可能性がある。

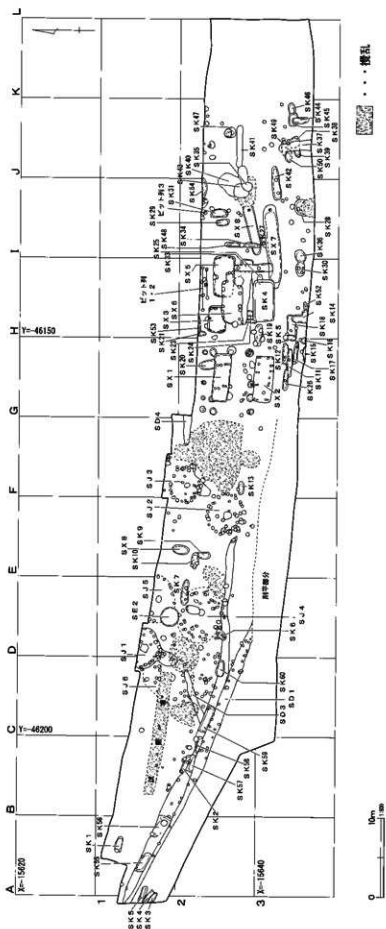
奈良時代の堅穴住居跡は、調査区東側で検出した。

今回の調査では、奈良時代の遺構は住居1軒のみであったが、過去の飯能市教育委員会の調査によって、旭原遺跡は、奈良・平安時代を中心とした集落遺跡であったことが明らかとなっており、今回の調査地点は、分布のやや西寄りに位置している。

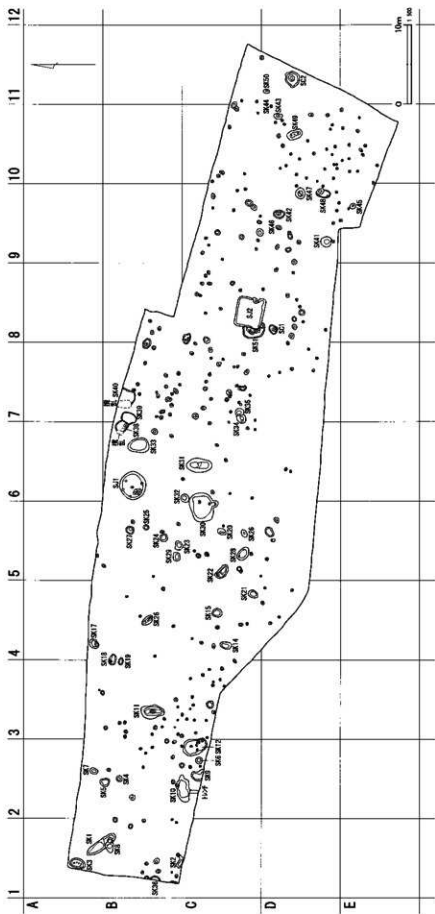
住居からは、東金子産の須恵器環が1点出土した。



第4図 遺跡付近の地形概念図

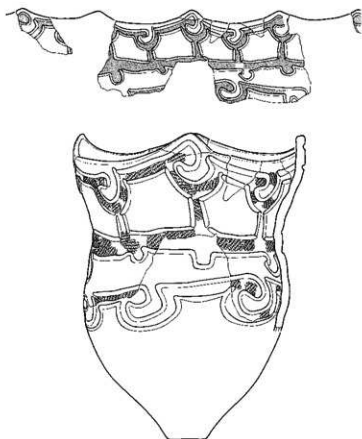


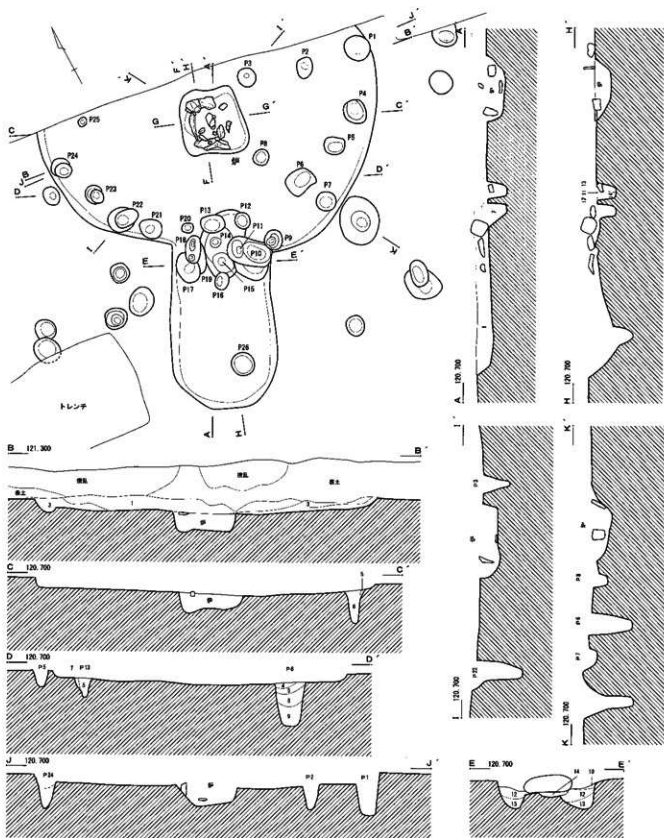
第5図 上可東遺跡全体図



第6図 旭原遺跡全体図

IV 上町東遺跡の調査





- S J 1
- 1 暗褐色土層 ローム粒子多量 焼土粒子微量 炭化物微量
 - 2 暗褐色土層 (1層よりやや暗い) ローム粒子多量 ビットの層上
 - 3 暗褐色土層 ロームブロック多量 ローム粒子多量
 - 4 暗褐色土層 ローム粒子少量
 - 5 暗褐色土層 ロームブロック少量 ローム粒子多量
 - 6 暗褐色土層 ロームブロック少量 ローム粒子多量
 - 7 暗褐色土層 ソフトローム多量に混入
 - 8 暗褐色土層 ソフトロームブロック少量 ローム粒子多量

- 9 暗褐色土層 (8層よりやや明るい) ローム粒子多量
- 10 暗褐色土層 ソフトローム多量
- 11 暗褐色土層 ローム粒子少量
- 12 暗褐色土層 ロームブロック少量 ローム粒子少量
- 13 暗褐色土層 ロームブロック少量 ローム粒子少量
- 14 暗褐色土層 ロームブロック少量 ローム粒子少量

第7図 第1号住居跡平断面図

1. 住居跡

第1号住居跡 (第7図~10図)

C-1・D-1グリッドに所在する。調査区北縁に位置し、全体の北約1/3が調査区外に存在する。

第6号住居跡を切っているものと思われる。南西に長く伸びる張出部を持った柄鏡形の竪穴住居跡である。発掘調査部分の長軸5.18m、短径5.04mを測るが、全体としては長軸約7mの住居跡であったと考えられる。主軸方向はN-27°-Wを指す。

主体部の壁高は最大で20.7cmを測る。床面はほぼ平坦だが炉跡周辺でやや深く、また住居跡前方に向かって緩やかに傾斜している。張出部は全長約2.4m、最大幅1.63mを測り、深さは最大44cmで、前方に進むにつれ主体部よりもかなり深くなっている。

床面から25本のピットが検出された。主体部と張出部の連結部分に集中する他は壁に沿って均等に巡っており、壁柱穴構造をとるものとみられる。

張出部から検出されたピットは、先端部付近からの1本のみであった。連結部付近のピット群の上層で敷石の一部とみられる礫の集積が観察された。礫はいずれも扁平な河原石および河床から採取されたと思しき亜角礫であった。上面のレベルは揃っていない。

また、これと近いレベルで、礫と炉跡をつなぐよ

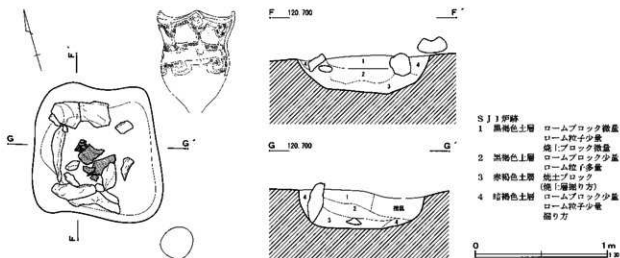
うにしてロームブロックの堆積が観察された。これが本来の生活面と考えられるが、貼床状の硬化面は検出できなかった。

炉跡は主体部の中央よりやや前方に位置しているものとみられる。石囲い炉で、石材は扁平の河原石を使用している。長辺側の東縁を擾乱により失っているが、石囲い部分は外径にして約84cm×70cmほどの長方形であったと推測される。掘り方は不整な台形を呈し、長軸1.06m、短軸1m、深さ29cmを測る。

石囲い内部における焼土の堆積はさほど顕著ではなく、むしろ掘方の底面全体にわたって焼土ブロックの堆積がみられ、炉石はこの焼土層の上に乗った状態であった。このため、当初地床炉として機能していたものが中途から石囲い炉へと作りかえられている可能性も考えられる。

石囲い炉の内部には第11図1に示した深鉢が破片の状態で残されており、炉の廃絶に関わる儀礼の存在が想定しうる。

埋篋は連結部・張出部とも検出されなかったが、前述の張出部先端のピットが抜取り痕である可能性もある。上層の葺き下ろしに対応する垂先のピットは発掘調査段階では把握し得なかったが、壁外に多数のピットが検出されている。



第8図 第1号住居跡炉跡断面図

第1表 第1号住居跡ピット計測表

	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ
P1	40	25	P10	42	36.5	P19	(22)	33.6
P2	32	37	P11	26	32	P20	16	27.3
P3	28	40	P12	26	21.5	P21	34	44.8
P4	36	52	P13	36	32	P22	48	75.5
P5	32	18.5	P14	16	29	P23	30	29.8
P6	44	66	P15	34	63	P24	32	46.8
P7	40	15	P16	26	4	P25	16	25.1
P8	26	24	P17	50	29.9	P26	34	31
P9	(28)	75	P18	(10)	37.8			

主体部の南東半部分にあって、炉跡から壁に向かつて3本のピットが並ぶ配置が二通り確認でき、これらの延長線上の壁外にも1~2本のピットが存在することから、これらが垂先である可能性が高い。

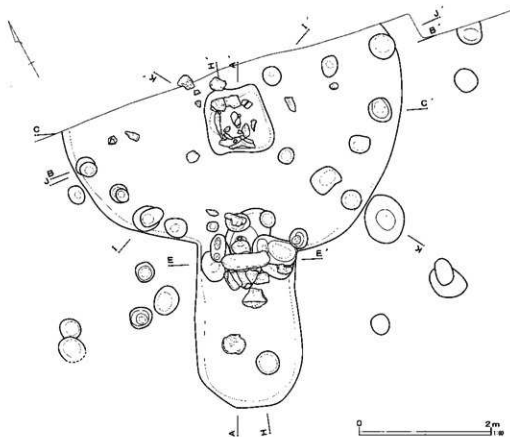
前述の石囲い炉内の土器以外にも覆土中から多数の上器片が出土している。第6号住居跡に関わる中期末の上器を除けば概ね後期初頭前半期のものであり、本住居跡もこの時期の所産と考えられる。

第1号住居跡出土遺物 (第11~13図)

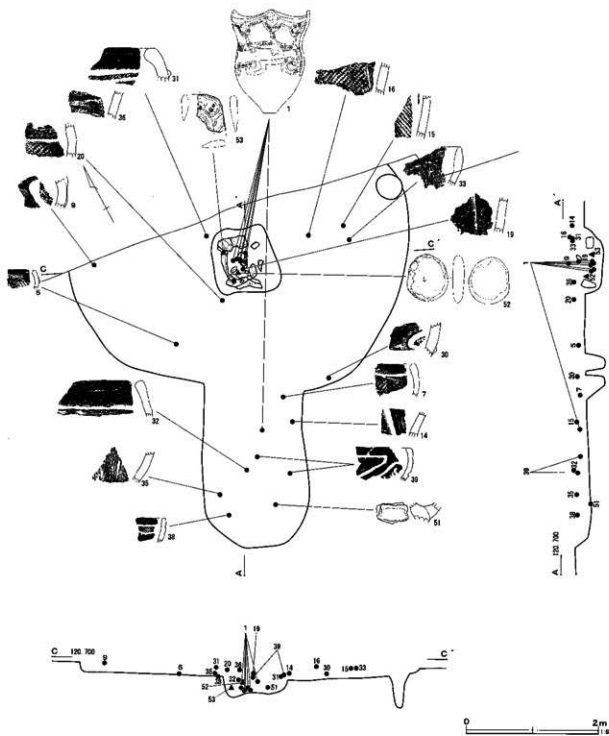
1は炉内を中心に出土した土器である。4単位の山形波状口縁をなし、胴部中斷にくびれを持つキャリパー形の器形である。口唇断面はやや内削ぎ状を呈する。器壁は比較的薄く、深く施された沈線文によって器内面が斜刻願状に隆起している。

基本的に2本一組の平行沈線文によって磨消文様が描かれる。

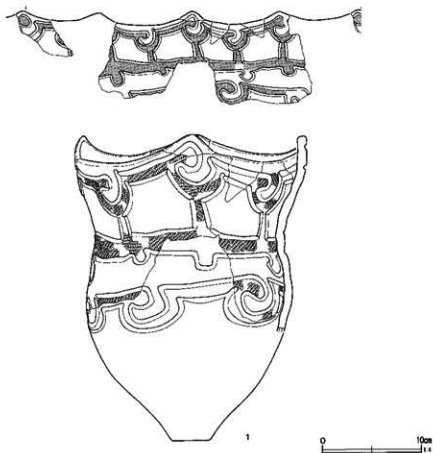
波状口縁の波頂部および波底部に入組み状のJ字文が描かれ、帯縄文によって左右に連繫される。胴



第9図 第1号住居跡敷石平面図



第10图 第1号住居跡遺物出土状況



第11図 第1号住居跡出土遺物(1)

部中段の括れ部分には水平な帯縄文が巡り、縦位の帯縄文によって上段の「J」字と連繋する。胴下半部にも口縁部と同様の入組み「J」モチーフが巡るが、中段の帯縄文とは連繋していない。文様帯下端は閉塞するものと考えたが、さらに何らかの文様帯と連繋している可能性もある。地文はLR単節の縄文が充填施文される。

時期は称名寺1式である。

2は曾利1式の口縁部文様帯で、混入であろう。

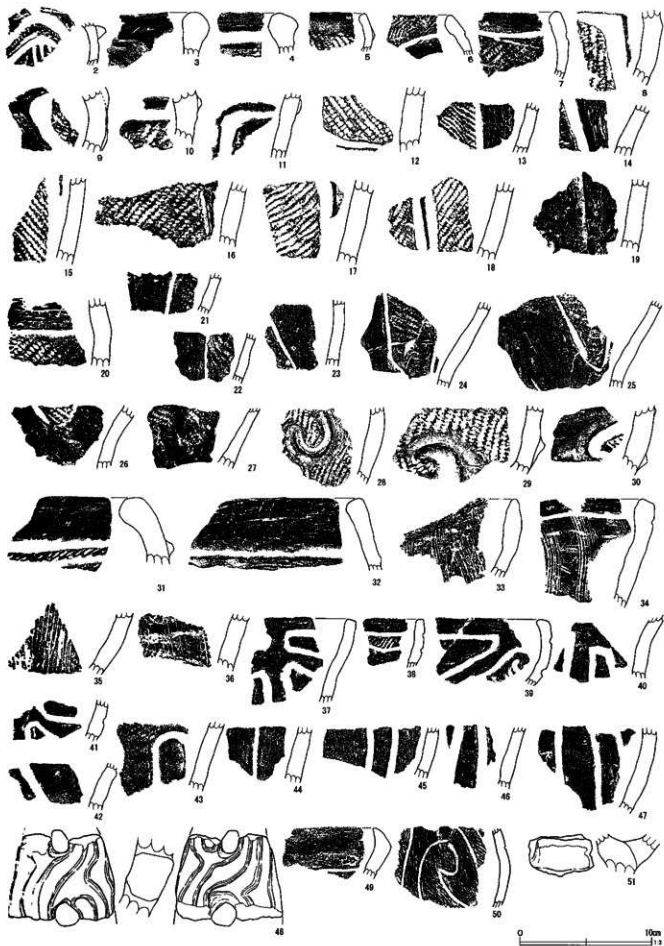
3～36は加曾利E系の土器群で、中期末葉から後期初頭のものが混在する。3・4はキャリパー系深鉢の口縁部である。8～12は同種の口縁部文様帯の一部であろう。5・7は口縁部無文帯を持つ小型の深鉢口縁部で、胴部との境を5は微隆起線で、7は波状の沈線で区画する。6は口端まで縄文が施文され、磨消縄文による逆U字のモチーフが描かれるものと考えられる。

13～16は磨消懸垂文の胴部である。16～19は両側になぞりを伴う微隆起線によって文様が描かれる。21～26は幅広い磨消文様が描かれるもので、25・26は対弧ないし鋸歯状のモチーフを描く。

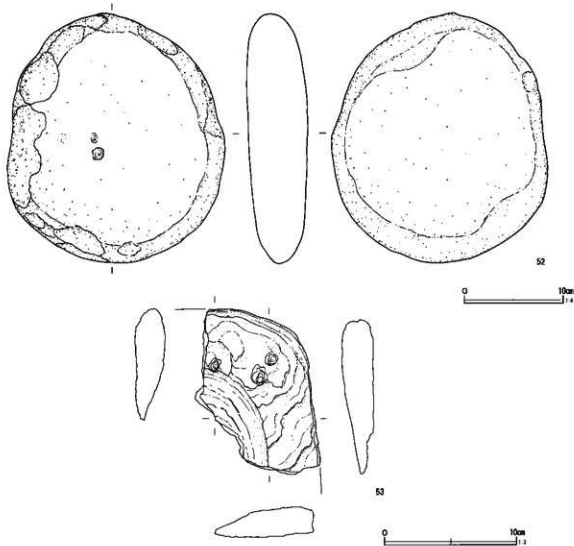
28・29は両側になぞりを加えた微隆起線で大柄の渦巻文を描く土器である。30は同種の文様で、2本の微隆起線の間を擦り消すものである。いずれも第6号住居跡の炉体土器に典型例を見ることができる。

31・32は胴張りの深鉢である。口縁部に無文帯を持ち、胴部文様帯との境を横位の微隆起線で区画する。31では微隆起線の上面にも縄文を施文する。33以下は櫛歯状工具の条線を地文とする半粗製の土器である。33は4単位の小波状口縁をなす深鉢である。34は口縁下に1条の沈線が巡り、胴部に緩やかな波状を描く条線が間隔をおいて垂下するもので、より新しい時期のものである可能性がある。

37～47は称名寺式古段階の土器群である。37・38



第12图 第1号住居跡出土遺物(2)



第13図 第1号住居跡出土遺物 (3)

は口縁部に長方形の区画を持ち、胴部にJ字文や紡錘文が展開する。39は称名寺的な区画文と加曾利E式の系譜を引く渦巻文が共存する口縁部で、ここでは沈線のタッチや胎土・器表面の特徴などから称名寺式に含めた。

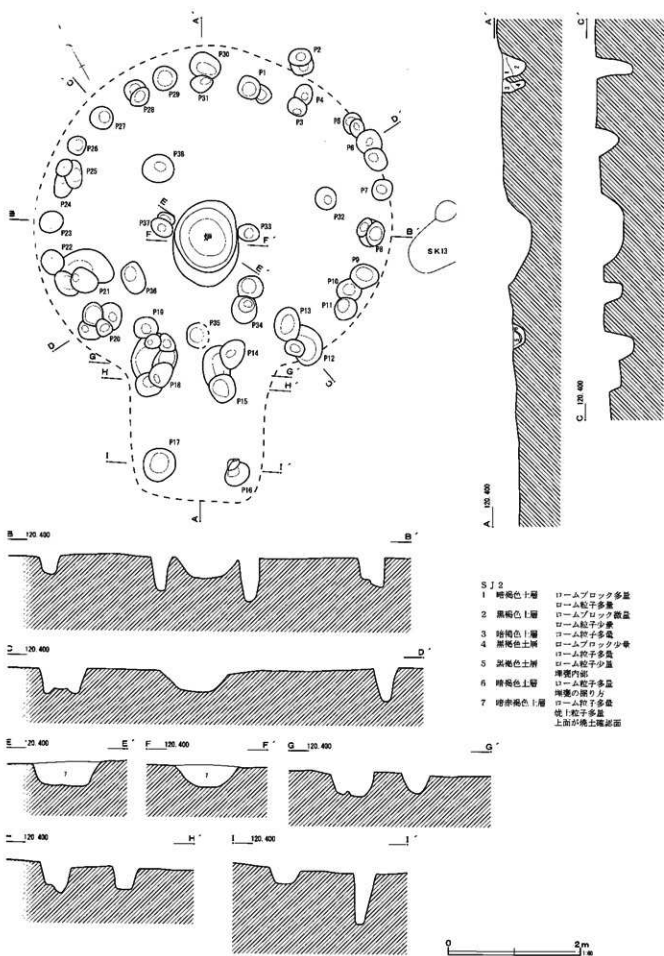
48は土器の突起と思われるものである。上下一対の貫通孔を持ち、表裏に微隆起線によって入組みS字風のモチーフが描かれる。類例に乏しいが、中期末～後期初頭に特徴的な瓢型土器にみられるモチーフであり、同時期のものと考えた。51は両耳壺の把手部分である。やはり中期末～後期初頭に特徴的な器種である。

49・50は称名寺式後半期の土器である。49は口縁

部、50は胴下半部で、磨消縄文により釣鉤状のモチーフが描かれる。

52は石皿である。扁平な自然石をほぼ無加工の状態で使用している。両面使用され、片面のみ凹石としての転用がみられる。長径25.1cm・短径21.9cm・厚さ6.2cmを測る。重量は5212.2gを量る。花崗岩系の石材が使用されている。

53も石皿であるが、板状摂理の自然礫を台径ないし胴張りの長方形に整形して使用しているものとみられる。片面のみ使用され、陸の部分に凹石としての転用がみられる。長径12.5cm・短径9.4cm・厚さ2.4cmを測る。重量は378.4gを量る。石材は緑泥片岩を使用する。



第2表 第2号住居跡ピット計測表

	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ
P1	54	47.3	P11	33	51.3	P21	90	61	P31	34	32.2
P2	40	41.6	P12	58	30.9	P22	36	66.5	P32	35	57.5
P3	50	38.5	P13	52	42.5	P23	36	28.5	P33	35	65.3
P4	(24)	30.5	P14	41	38.3	P24	(32)	25.5	P34	74	39.8
P5	(34)	47.2	P15	80	38.3	P25	42	60.8	P35	(18)	17.8
P6	37	50	P16	41	79.3	P26	30	46.2	P36	46	34.5
P7	32	40	P17	52	27.6	P27	36	53.5	P37	35	51.9
P8	42	43.9	P18	82	54.3	P28	40	26.2	P38	46	48.3
P9	40	39.3	P19	37	4.5	P29	37	34			
P10	34	38.3	P20	74	50.1	P30	47	45.5			

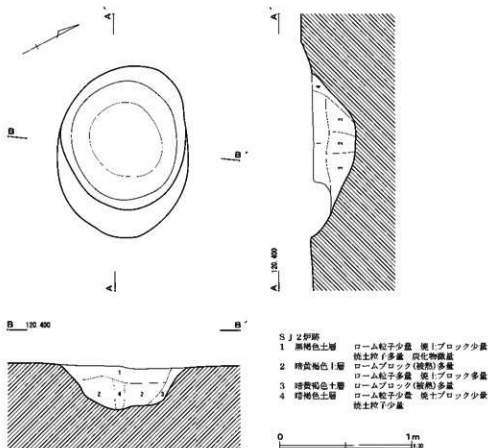
第2号住居跡（第14図～16図）

E-2・F-2グリッドに所在する。遺構検出面において炉跡・埋甕およびこれをとりまくピット群を検出したもので、壁の立ち上がりは失われていた。

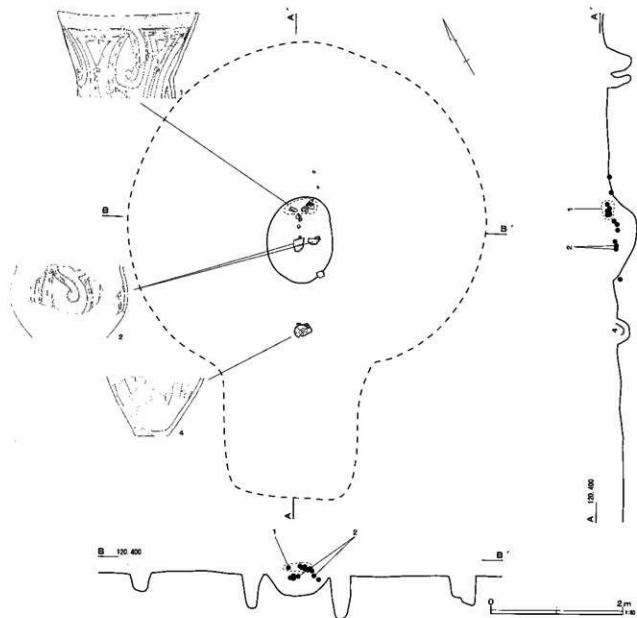
円形の主体部から南西に伸びる張り出しを持った柄鏡形の住居跡であったと考えられ、長軸約6.8m、短軸約5.3mを測る。主軸方向は、N-30°Eを指す。

想定上の住居範囲からは38本のピットが検出されている。張り出先端と推定される地点において左右一対、張り出部と主体部の連結部分にも左右対をなすピット群が集中的に検出され、さらに主体部が外周に沿ってピットが並んでおり、壁柱穴構造をもつものと考えられる。

ピットの深さは最大66.5cm・最小4.5cm、平均して約42.9cmであった。



第15図 第2号住居跡炉跡断面図



第16図 第2号住居跡遺物出土状況

壁柱穴の配置が極めて密であり、また同一地点での重複がひんばんにみられることから、上屋の建て替えがあったことが推測される。

連結部分の対ピットのほぼ中間で埋壘1基が検出された。第17図4に掲載したものがそれで、深鉢胴下半部が正位に埋設されたものである。炉跡の残存状態の良さから考えても当初から同上半部をあるていど欠いていた可能性が高い。

主体部のほぼ中央に炉跡が位置している。地床炉であり、住居跡長軸方向に長い楕円形を呈する。断面観察の結果は上層を中心にローム粒子の堆積が顕

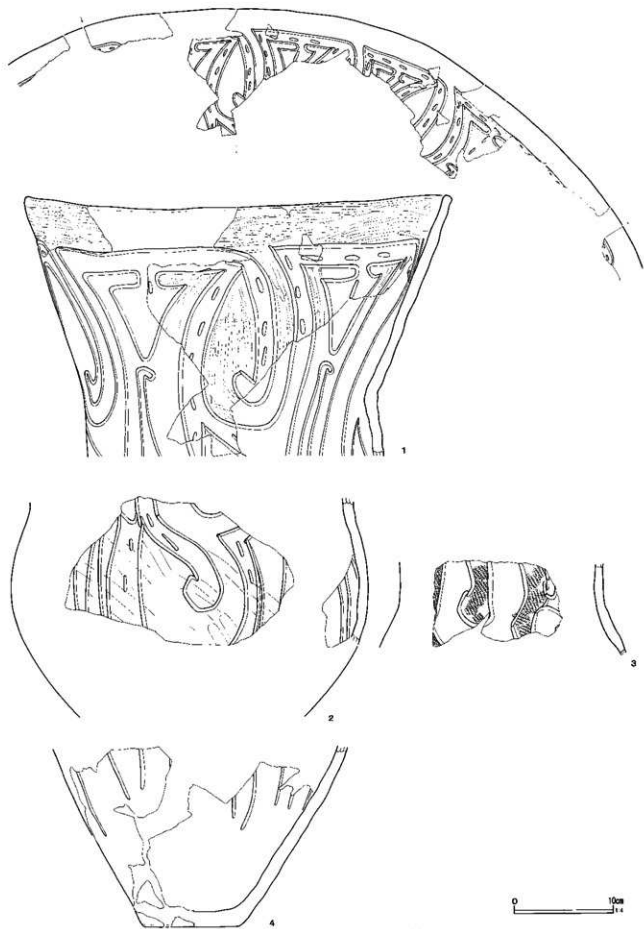
著であり、下層は被熱したロームブロックからなっている。

前述の埋壘の他に、炉の上層を中心とした破片から第17図1・2の大型深鉢が復元された。出土遺物の大半が後期初頭後半期と考えられる土器であり、住居跡も該期のものと考えられる。

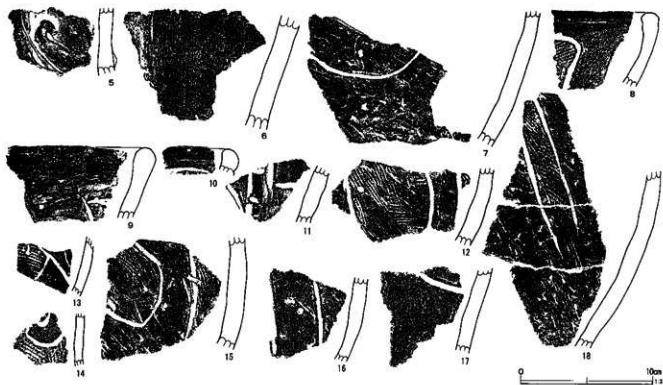
第2号住居跡出土遺物（第17・18図）

1は深鉢口縁～胴上半部である。水平口縁で口端外削ぎ状を呈する。

平行沈線で文様を描き、沈線間には列点文を充填する所謂称名寺Ⅱ式である。列点を伴わないネガ部



第17图 第2号住居跡出土遺物 (1)



第18図 第2号住居跡出土遺物(2)

分では研磨が徹底され、磨消しによる文様描出の意図をかるうじて残している。

大柄のJ字モチーフを4単位に配し、間隙を上からのスペード状モチーフおよび下へと開放するR字状モチーフで埋めている。

2も深鉢で、胴部中段～下段にかけて残存する。ほぼ同部位の2点が別々に発見されたが、同一個体として復元した。

平行沈線間に列点文を充填する称名寺Ⅱ式である。文様的には1の個体とほぼ共通とみられ、2段構成をとるJ字モチーフの下段部分だが、下端の描線が開放して懸垂文化している。器表面に斜位の粗雑な撫で調整がみられる。

3は1・2より若干小振りの深鉢で、胴部中段のみ残存する。崩れた2段J字モチーフを主文様とし、間隙にR字モチーフが介在する。地文縄文を持つ土器で、平行沈線間にLR単節の縄文が充填される。

4は深鉢で、底部から胴下半部にかけて直線的に開く。下端開放する縦位の沈線がみられるのみで、

地文や列点はみられない。

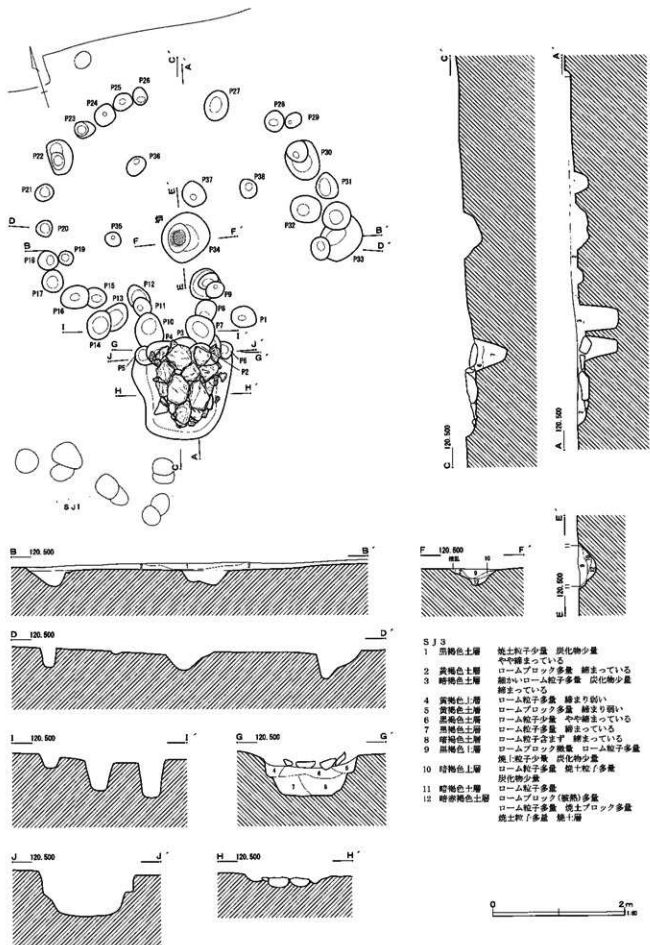
第18図は破片資料を一括した。

5はモチーフ末端に付される鳍状の突起である。

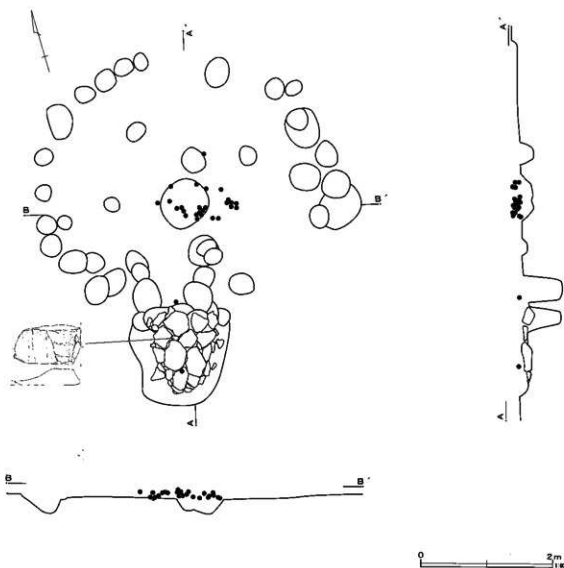
6は微隆起線が垂下する胴部で、加曾利E式の系譜を引く胴張り深鉢形土器である。7は沈線による弧線文がみられる。

8～10は称名寺式の口縁部である。8・9は口縁部無文帯から垂下するJ字文の連結部分と考えられる。11はモチーフの間隙に垂下する断面台形の隆帯で、棒状工具による刺突が観察される。

12～18は磨消縄文のみられる胴部で、地文はすべてLR単節で、比較的粗雑に充填施文される。12・15はJ字モチーフ下方の描線である。胴下半部に位置するものとみられ、15は縦位の粗い撫で調整が観察される。13・14もJ字末端部分であろう。18は底部直上部分で、磨消モチーフ下端が開放して懸垂文化するさまが観察される。削りに近い粗い撫で調整が下部に集中する。



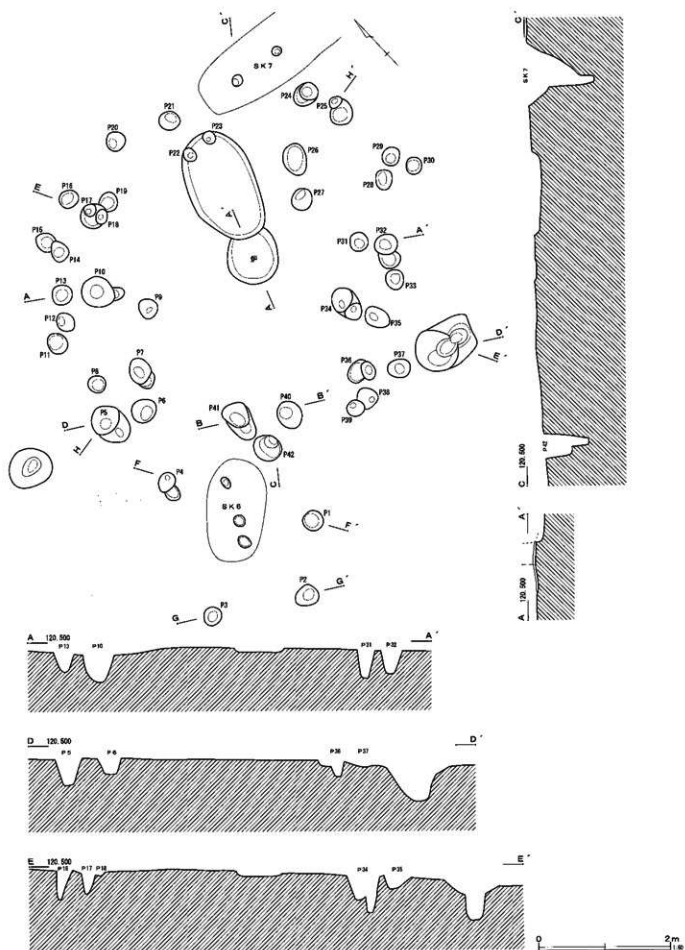
第19図 第3号住居跡平断面図



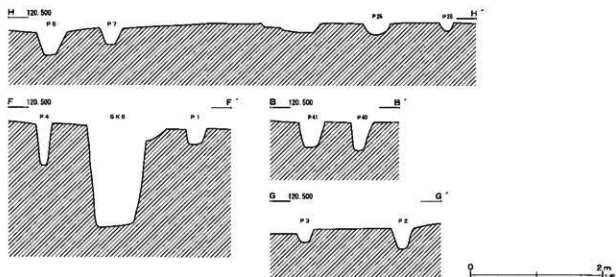
第20図 第3号住居跡遺物出土状況

第3表 第3号住居跡ピット計測表

	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ
P1	40	19.2	P11	(16)	35.1	P21	29	31.9	P31	42	19.7
P2	42	77.8	P12	(20)	9.6	P22	52	51.7	P32	45	28.4
P3	(27)	76.3	P13	(34)	20	P23	30	29.4	P33	88	40.6
P4	(36)	44.5	P14	44	22.7	P24	34	46.6	P34	92	25.4
P5	28	40.6	P15	(26)	17	P25	32	21.9	P35	24	27.2
P6	(18)	25	P16	(44)	45.3	P26	26	28.2	P36	32	38.6
P7	45	62.5	P17	24	19.4	P27	47	36.2	P37	38	12
P8	(27)	41.5	P18	27	25.2	P28	24	56.4	P38	30	22
P9	53	58.4	P19	21	14.8	P29	28	45.5			
P10	(46)	49.5	P20	26	30.1	P30	60	44.8			



第21图 第4号住居跡平断面图(1)



第22図 第4号住居跡平断面図(2)

第4表 第4号住居跡ピット計測表

	最大径	深さ	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ	
P1	30	25.5	P12	28	9.6	P23	24	32.7	P34	54	57
P2	36	37	P13	31	20	P24	40	29.5	P35	40	20.8
P3	26	20	P14	32	22.7	P25	44	20.4	P36	42	26.5
P4	44	63.2	P15	(24)	17	P26	49	17.9	P37	36	47.1
P5	64	40.5	P16	29	45.3	P27	42	27.2	P38	(32)	52.6
P6	38	26.6	P17	24	19.4	P28	38	21.2	P39	(26)	59.8
P7	48	27.4	P18	(20)	25.2	P29	30	22.2	P40	42	42.7
P8	26	20.6	P19	28	14.8	P30	25	28.7	P41	61	39.6
P9	30	28.7	P20	32	30.1	P31	28	42.2	P42	44	70.3
P10	64	43.5	P21	31	39.7	P32	53	38.5			
P11	33	35.1	P22	20	38.9	P33	29	13.6			

第3号住居跡 (第19・20図)

E-2・F-2グリッドに所在する。南で第2号住居跡に接するが、切り合い関係は不明である。

覆土および壁の立ち上がりは土層観察ではある程度把握し得たが、面的な検出には至らなかった。このため遺構の外形については、床面上のピットの配置によって確認することとなった。

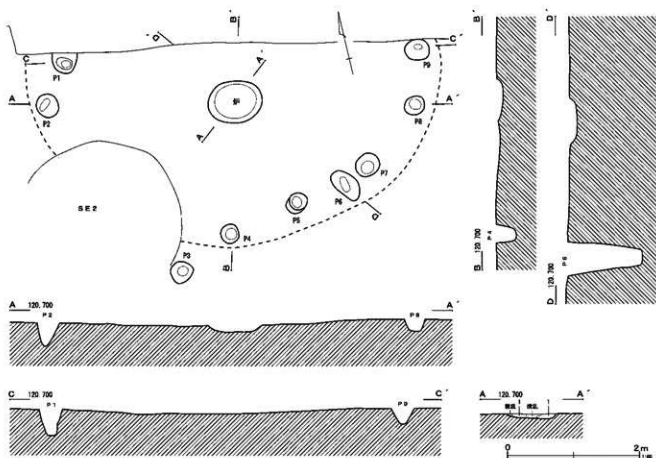
短軸方向につぶれた楕円形の主体部から南西方向に伸びる張出部を伴う柄鏡形の竪穴住居跡で、長軸6.8m、短軸5.3mを測る。張出部は長さ1.4m、幅1.5m、深さ58cmを測る。主軸方向はN-17.5°-Wを指す。

床面上からは38本のピットを検出した。主体部と張出部の連結部分で左右対をなすピット列が存在す

るほかは、ほぼ壁に沿って巡る壁柱穴構造を持つ。上屋葺き下ろしに伴う垂先のピットは検出できなかった。

主体部の主軸上前方約1/3のところに炉跡が位置している。炉は地床炉で、上下2段の掘り方を持っているが、最大部分で長軸77cm、短軸67cm、深さ26cmを測る。覆土は全体に焼土粒子の散布がみられ、壁および底面もよく被熱している。

張出部にのみ敷石を伴っている。敷石は主として扁平な河原石を使用している。敷石は張出部の掘方底面から40cmほど上に位置しており、主体部床面のレベルとの比較のうえからも、これが本来の生活面であったと考えられる。



第23図 第5号住居跡平面断面図

第5表 第5号住居跡ピット計測表

	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ
P1	34	49	P4	28	29.5	P7	38	21.5
P2	35	37.5	P5	34	100	P8	32	20
P3	36	58	P6	53	119.5	P9	37	26

第3号住居跡出土遺物 (第24・25図)

1は称名寺式の精製深鉢に伴う朝顔状の突起である。上面に盲孔と短沈線によるC字状のモチーフがみられ、外側面にも同様の盲孔・短沈線による対弧状モチーフが配される。口唇断面は肥厚し、内面に鋭角な稜を形成する。

2は加曾利E系の胴張り深鉢である。軽微に外反する口縁で、幅広い口縁部文様帯を持ち、胴部との境を断面三角形の微隆起線で区画する。

3・4は微隆起線による磨消懸垂文が垂下する胴部破片で、2と同種の深鉢であろう。5・6は幅の狭い帯縄文が密に垂下するもので、称名寺式の小型精製深鉢と考えられる。

7～9は条線地文の胴部で、7は加曾利EⅢ式の

可能性が高い。10は曾利系の土器で、棒状工具による雨垂れ状の列点を地文とし、磨消懸垂文を持つ。

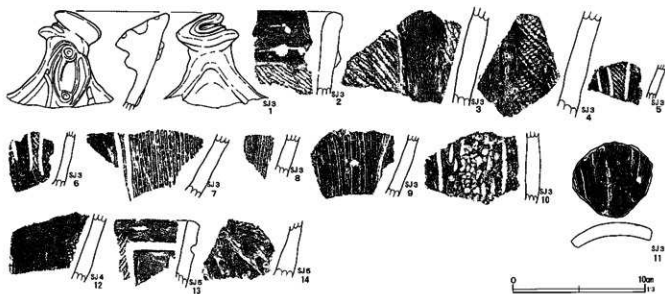
11は土製円盤である。条線地文の深鉢胴下半部の破片を円形に打ち欠いて使用している。周縁部の擦りはあまり顕著ではない。

15は石皿片である。板状摂理の石材を自然に近い状態で使用している。使用面および右側縁の一部のみ残存しており、全体の1/8程度が残存しているものとみられる。破砕後の二次使用は観察できない。使用面の磨耗は著しく、部分的に鏡面のような光沢を生じている。

石材は緑泥片岩を使用している。

第4号住居跡 (第21・22図)

D-2グリッドに所在する。第6号と近接するが、



第24図 第3号～5号住居跡出土遺物 (1)

両者の新旧関係は不明である。

壁を検出できなかったが、南西に長く伸びる張出部を持った柄鏡形の竪穴住居跡であったと考えられる。ピットの分布範囲は長径8.3m、短径6.9mを測る。主軸方向はN-15°-Wを指す。

全体で42本のピットが検出された。主体部の壁に沿って巡っていたものと考えられるが、粗密にばらつきがあり、重複を示す部分も多く、すべてが住居跡に伴うものとは考えがたい。

炉跡を中心として円形に巡るピット列に対して、やや西にずれてやはり円形に巡るピット列が存在しており、2軒の重複と考えるのが妥当であるかもしれない。SK6付近に並ぶ張出部ピットも西側の一群

に伴う可能性が高い。

推定されるプランの中央に炉跡が存在する。不整形の円形の地床炉である。一端を土壌に切られるが、長軸約90cm、短軸76cm、深さ6.8cmを測る。覆土の大半を削平されているものとみられ、焼土の堆積は貧弱である。

第4号住居跡出土遺物 (第24図)

12は深鉢胴部破片で、平行沈線間にLR単節の縄文が充填施文される。無文部には縦位の研磨が徹底される。称名寺式と考えられる。

第5号住居跡 (第23図)

D-1・E-1グリッドに所在する。第2号井戸跡に切られる。

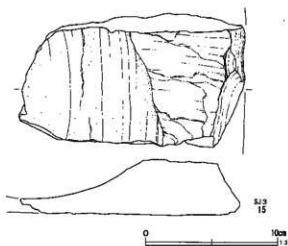
調査区北縁に位置し、全体の北半分が調査区外に存在する。

覆土および床面を削平されているため壁の立ち上がりを検出することはできなかったが、東西に長い楕円形の竪穴住居跡であったと考えられる。

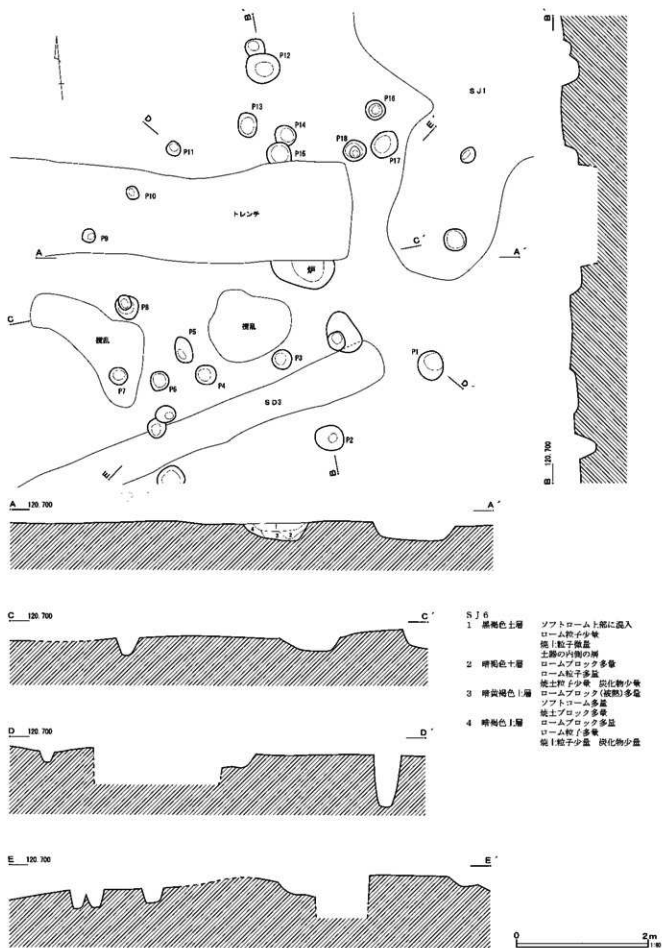
ピットの分布範囲は長軸6.2mを測る。主軸方向はN-78°-Wを指す。

出土遺物の時期からみて柄鏡形の竪穴住居跡であった可能性が高いが、張出部を確認することはできなかった。

全体で9本のピットが検出された。主体部の壁に



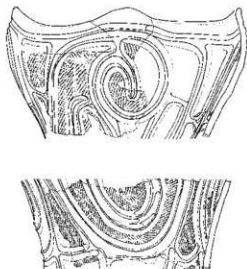
第25図 第3号～5号住居跡出土遺物 (2)



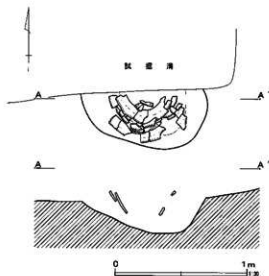
第26図 第6号住居跡平面断面図

第6表 第6号住居跡ピット計測表

	最大径	深さ	最大径	深さ		最大径	深さ	最大径	深さ		
P1	43	54	P6	29	44.3	P11	24	16.1	P16	28	23
P2	45	30	P7	26	23	P12	68	23.4	P17	44	16.5
P3	30	33.4	P8	36	34.2	P13	38	8.7	P18	32	42
P4	30	32.6	P9	18	29	P14	26	11.5			
P5	41	53.2	P10	21	17.3	P15	30	26.6			



第27図 第6号住居跡炉跡断面図



沿って巡っていたものと考えられ重複はみられない。

推定されるプランの中央に炉跡が存在する。楕円形の地床炉で、長軸約82cm、短軸64cm、深さ8.5cmを測る。覆土の大半を削平されているものとみられ、焼土の堆積は希薄である。

第5号住居跡出土遺物 (第24図)

13は称名寺式の口縁部である。口唇断面角頭状を呈し、口端は平坦に整形される。深く施文された沈線により、裏面に蚯蚓脛れ状の隆起を生じている。口縁部から垂下するモチーフの連結部分で、RL単節の縄文が充填施文される。14は底部直上の破片で、篋状工具による縦位の撫で調整が観察される。

第6号住居跡 (第26・27図)

C-1・2グリッドに所在する。第2号井戸跡に切られる。第1号住居跡に切られる。また、中央部分を試掘トレンチで破壊される。

壁を検出できなかったが、円形の堅穴住居跡であったと考えられる。ピットの分布範囲は長軸6.6

m、短軸5.8mを測る。主軸方向はN-14°-Eを指す。

全体18本のピットが検出された。主体部の壁に沿って巡っていたものと考えられるが、すべてが住居跡に伴うものとは考えがたい。

推定されるプランの中央に炉跡が存在する。北半分を試掘トレンチで破壊されているが、楕円形の土器片囲い炉で、2個体分の土器の大破片を使用している。残存部分の長軸約94cm、深さ22.8cmを測る。覆土の大半を削平されているものとみられ、焼土の堆積は希薄である。

第6号住居跡出土遺物 (第28・29図)

すべて炉体土器およびその周辺から出土した土器である。

1・2は炉体土器として組み合わせて使用されていた土器である。

1は波状口縁深鉢で、口縁から胴部中段までが残存する。両側になぞりを加えた隆帯によって渦巻文が描かれ、余白部分も同様の隆帯によってパネル状

に分割される。モチーフの下端は開放しており、胴部中段に区画帯を持たない可能性が高い。

隆帯は渦巻文では2本一組で使用されるが、それ以外では単独で用いられている。地文はRL単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。

2は胴部中段のみ残存する。2本の隆帯による渦巻モチーフは1と共通だが、描線間を広くとった磨消帯的な使い方をしていいる。余白部分の分割も1よりシンプルである。

胴部中段の括れが弱く、ここに横位の区画帯が存在するが、上下のモチーフと半ば融合している。胴下半部の文様は懸垂文化しているものとみられる。地文はRL単節で、充填施文される。

第29図は破片資料を一括した。大半が胴部大型渦巻文の土器であり、前出の2個体の炉体土器のいず

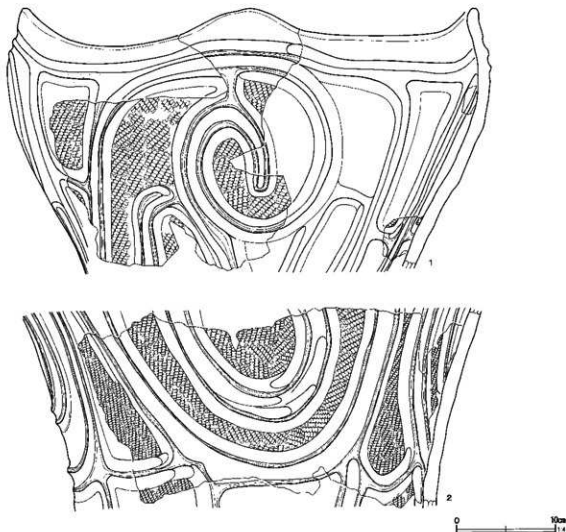
れかと同一個体の可能性もある。

3・4は口縁部である。いずれも水平口縁と考えられる。口縁直下に隆帯を巡らせ、胴部文様帯は同様の隆帯によってパネル状に分割される。4は区画内部に小J字状のモチーフが取り込まれるもので、J字末端の描線を確認できる。

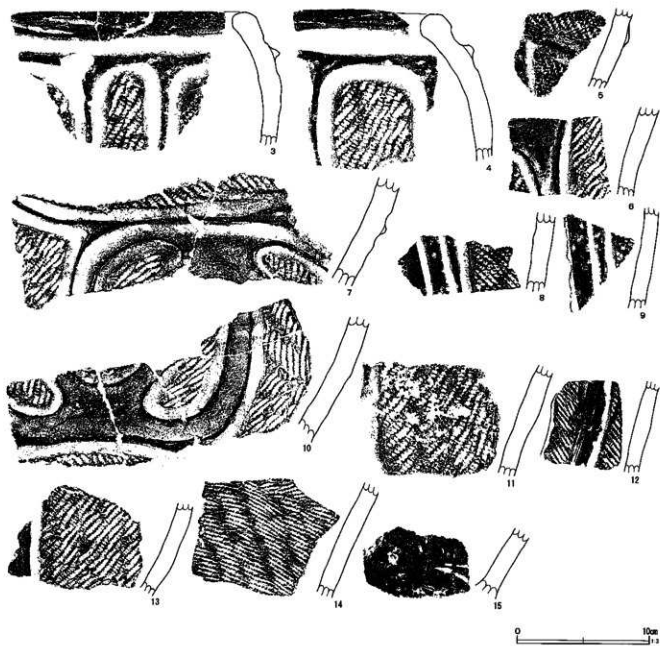
7・10は同一個体であろう。2本の隆帯間を広くとった磨消帯によって文様を描くことで、縄文部が独立して単位文化する。

5は口縁部区画文と、これを起点に垂下する磨消懸垂文が確認できる。キャリパー系深鉢胴上半部と考えたが、両耳壺胴部中段の可能性もある。

6は微隆起線によってH字モチーフが描かれる。8～13は磨消懸垂文の胴部である。14は縄文のみ施文される胴部である。15は底部直上の無文部である。



第28図 第6号住居跡出土遺物 (1)



第29圖 第6号住居跡出土遺物 (2)

2. 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (第30図)

G-2グリッドに位置する。第2号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、両者の新旧は不明である。

細長い隅丸長方形を呈し、長軸6.2m、短軸2.4m、壁高1.1mを測る。主軸はほぼ東西を指す。

床面はほぼ平坦だが、中央部付近でやや下がっている。床面の中央約4.05m×1.3mの範囲に炭化物の散布が観察された。

主軸上北寄り約1/5の場所に炉跡が位置している。不整形円形の地床炉で、長軸58cm、短軸48cm、深さ3cmを測る。西壁付近に握り拳大の礫4点が検出された。いずれも被熱しているが、いわゆる炉石ではない。

床面上から8本のピットを検出した。東西の壁から1.6mと1.8m離れた地点で、南北の壁際に2本ずつ、計4本が桁方向に一直線に並んだ状態で配置されている。

壁は鋭角に立ち上がるが、壁溝・壁柱穴はみられない。また、壁外に本遺構に伴うと考えられる施設は発見できなかった。

覆土中には大量のロームブロックが混入している。床面直上には炭化物を含む暗褐色の層があり、部分的に焼土も観察された。

遺物は第66図掲載の陶磁器類が出土している。

第2号竪穴状遺構 (第31図)

G-2・3グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、両者の新旧は不明である。

細長い隅丸長方形を呈し、長軸5.8m、短軸2.4m、壁高80cmを測る。主軸はほぼ東西を指す。

床面はほぼ平坦である。床面の中央約4.4m×1.7mの範囲に炭化物の散布が観察された。

主軸上北寄り約1/5の場所に炉跡が位置している。不整形円形の地床炉で、長軸52cm、短軸47cm、深さ4cmを測る。

床面上から20本のピットを検出した。南北の壁際に1~2本ずつ、計3ないし4本が桁方向に一直線

に並んだ状態で5列にわたって配置されている。東寄りの床面上では比較的密な配置である一方、炉の周辺ではまばらな配置となっている。一部のピットには根石風の礫の敷設がみられる。

壁は鋭角に立ち上がるが、壁溝・壁柱穴はみられない。また、壁外に本遺構に伴うと考えられる施設は発見できなかった。

覆土中には大量のロームブロックが混入している。

覆土中から第66図の陶磁器が出土したほか、炉跡から寛永通宝の破片が出土している。

第3号竪穴状遺構 (第32図)

H-2グリッドに位置する。第6号竪穴状遺構に切られている。

隅丸長方形を呈し、長軸3.7m、短軸2.2m、壁高1mを測る。主軸はほぼ東西を指す。

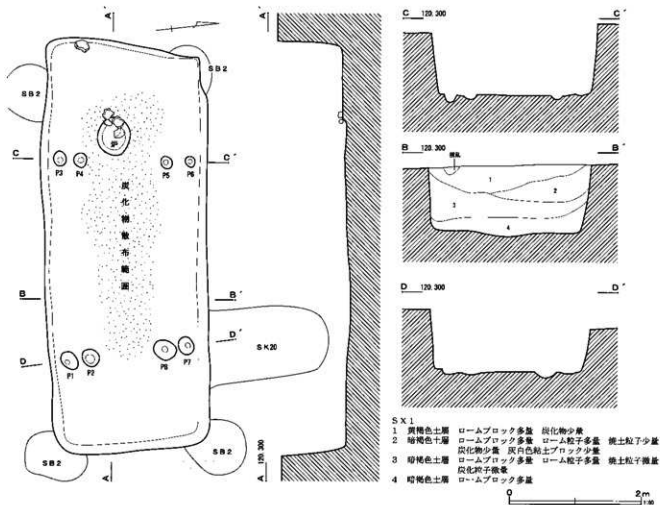
床面はほぼ平坦だが、中央部付近でやや下がっている。主軸上北寄り約1/4の場所に炉跡が位置している。不整形円形の地床炉で、長軸58cm、短軸43cm、深さ2cmを測る。

床面上から9本のピットを検出した。西壁下に5本、東壁下に3本が南北に分かれて分布し、桁方向に一直線に並んだ状態で配置されている。深さは30~50cmのものが最も多く、主柱穴的なものと考えられる。残る1本は北壁際のほぼ中央に位置している。2本が桁方向に接して穿たれているようにみえ、深さは15cm強と、他のピットとは格差が存在する。壁外に本遺構に伴うと考えられる施設は発見できなかった。

覆土上層には大量のロームブロックが混入する一方、下層ではロームブロックの混入が少なく、焼土・炭化物が観察される。遺物は第66図掲載の陶磁器類のほか瓦片が出土している。

第4号竪穴状遺構 (第32図)

H-2・3グリッドに位置する。第7号掘立柱建物跡、第23号土壌、第24号土壌、第25号土壌と重複関



第30図 第1号竪穴状遺構平面断面図

係にあるが、両者の新旧は不明である。

隅丸長方形を呈し、長軸4.7m、短軸2.7m、壁高1.2mを測る。主軸はほぼ東西を指す。

床面はほぼ平坦である。炉跡やピット、炭化物の散布はみられない。壁は鋭角に立ち上がるが、壁溝・壁柱穴はみられない。また、壁外に本遺構に伴うと考えられる施設は発見できなかった。

覆土全体に大量のロームブロックが混入している。特筆すべきは多量の礫を含む黒色土層が介在している点で、同様の礫の一括廃棄は他の竪穴状遺構でも観察されている。遺物は第66・67図掲載の陶磁器類が出土している。

第5号竪穴状遺構（第33図）

H・1-2グリッドに位置する。第6号竪穴状遺構に切られるほか、第33号土壌とも重複関係にある

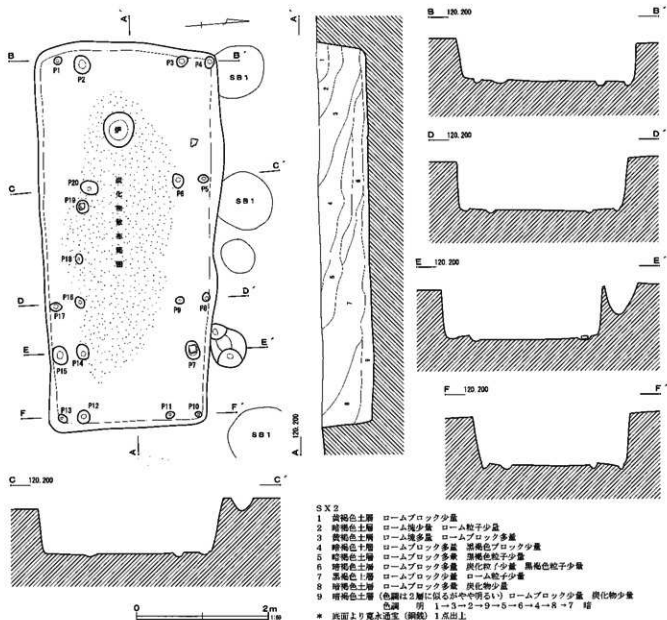
が、両者の新旧関係は不明である。

隅丸長方形を呈し、長軸3.2m、短軸2.6m、壁高1.2mを測る。主軸方向はほぼ東西を指す。

床面は概ね平坦である。床面の中央約3.4m×1.4mの範囲に炭化物の散布が観察された。

床面に炉跡は検出されなかった。ピットは8本検出された。東西の壁際に、南北に分かれて2本ずつ、計4本が桁方向に一直線に並んだ状態で配置されていたものであろう。深さは40～60cmと深く、主柱穴的なものと考えられる。このほか、北壁際のほぼ中間点に1本のピットが検出され、南壁際にも対をなして存在した可能性が高い。

壁は鋭角に立ち上がるが、壁溝・壁柱穴はみられない。また、壁外に本遺構に伴うと考えられる施設は発見できなかった。



第31図 第2号竪穴状遺構平面断面図

第7表 竪穴状遺構ビット計測表

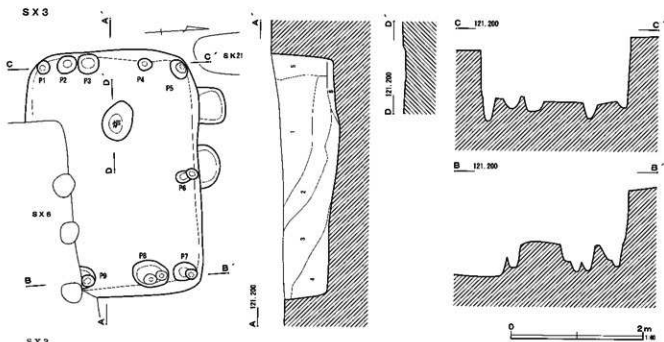
	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ
P1	30	8.1	P1	12	6.5	P1	21	35	P1	24	67.3
P2	28	4.1	P2	27	5.8	P2	30	36.5	P2	24	43.5
P3	24	12	P3	16	6.2	P3	33	15.2	P3	10	1.5
P4	24	6	P4	17	7.5	P4	21	23.5	P4	36	55.6
P5	20	6	P5	15	6.5	P5	(20)	49.5	P5	24	44.6
P6	16	2	P6	22	5.5	P6	34	27.7	P6	28	47.2
P7	28	3	P7	28	8.3	P7	(34)	34.1	P7	28	55.7
P8	34	8	P8	14	5	P8	54	40.5	P8	32	45.2
			P9	12	4.5	P9	(20)	35.5			
			P10	10	8.5						

第1号竪穴状遺構

第2号竪穴状遺構

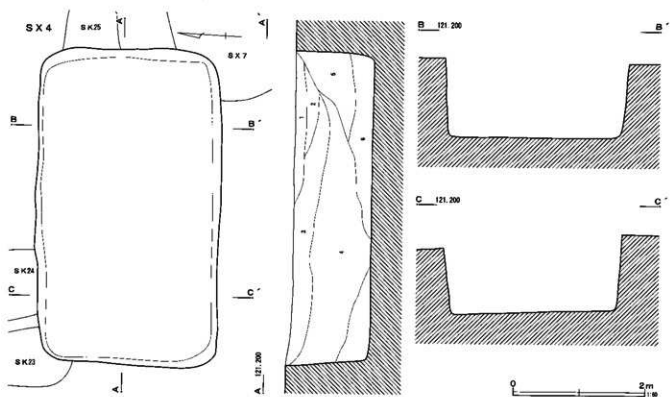
第3号竪穴状遺構

第5号竪穴状遺構



SX3

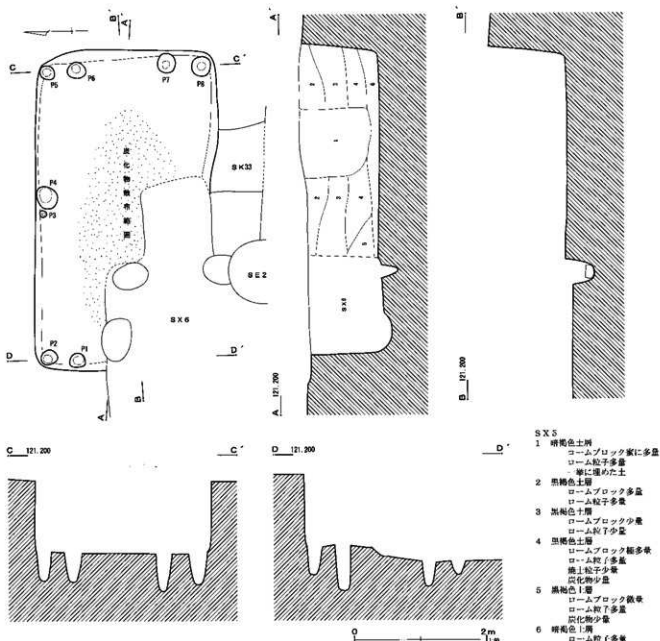
- 1 黒褐色土層 ロームブロック多量 ローム粒子多量
 - 2 暗褐色土層 ロームブロック多量 ローム粒子多量 炭化物少量
 - 3 暗褐色土層 ロームブロック多量 ローム粒子多量
 - 4 暗褐色土層 ローム粒子多量 炭化物少量 縞まっている
 - 5 暗褐色土層 ロームブロック微量 ローム粒子多量 逆シブロック微量 炭化物少量
 - 6 暗褐色土層 ロームブロック少量 ローム粒子多量 焼土ブロック微量 炭化物少量
 - 7 暗褐色土層 焼土ブロック多量 炭化物微量に多量
- * 5・6層埋設後4層増築 1・2層は時間差無く埋め土 1層は新しい遺構の埋め直し



SX4

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色土層 ソフトロームブロック質に多量 ローム粒子多量 2 暗褐色土層 ソフトロームブロック少量 ローム粒子多量 炭化物少量 3 灰褐色土層 ローム粒子少量 炭化物少量 4 黒色土層 礫石が質に多量に含まれる | <ol style="list-style-type: none"> 5 暗褐色土層 ロームブロック多量 ローム粒子多量 炭化物少量 6 暗褐色土層 ロームブロック少量 ローム粒子多量 焼土粒子少量 炭化物少量 7 暗褐色土層 ロームブロック多量 ローム粒子多量 |
|--|--|

第32図 第3号・4号竪穴状遺構平面図



第33図 第5号竪穴状遺構平断面図

覆土中には大量のロームブロックが混入しており、人為的な埋戻しが行われたものと考えられる。

遺物は瓦片・古銭（寛永通寶）等が出土している。

第6号竪穴状遺構（第34・35図）

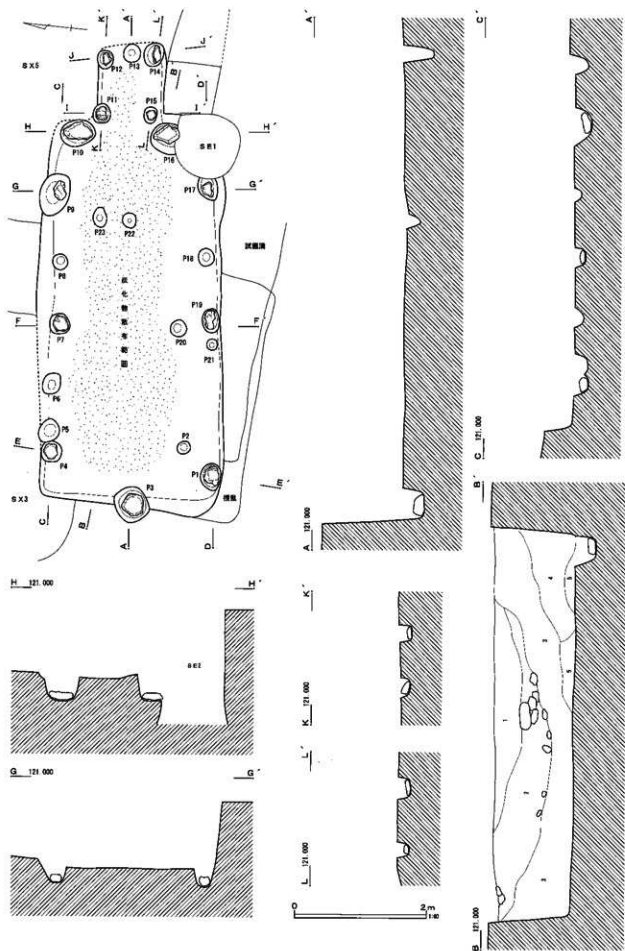
11-2グリッドに位置する。第3号・5号竪穴状遺構を切っており、SE1に切られる。

細長い隅丸長方形を呈し、東壁部分に長方形の張出部を持つ。長軸7.2m、短軸2.6m、壁高1.2mを測る。張出部は長軸1.07m、短軸1.05mを測る。主軸方向はN-84.5°-Wで、ほぼ東西を指す。

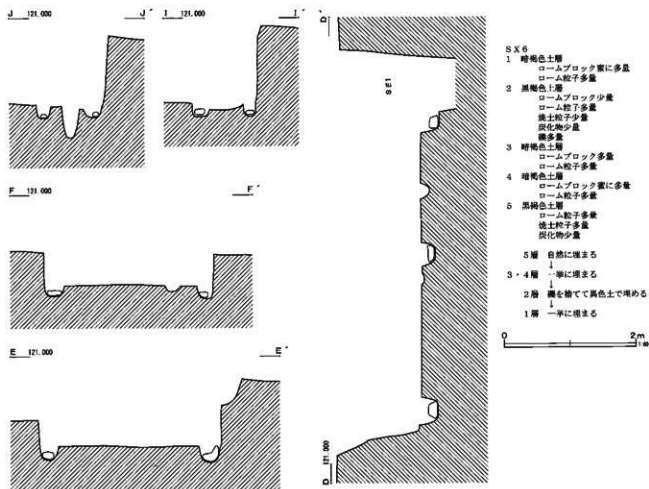
床面はほぼ平坦である。床面の中央から張出部にかけて約4.05m×1.3mの範囲に炭化物の散布が観察された。床面から炉跡は検出されなかった。

床面上から23本のビットを検出した。これらのうち13本からは根石風の礫が敷設されているのが確認された。根石を伴う柱穴の配置は、長辺である南北壁に沿って3本づつ、妻側の西壁中央に1本、東壁の張出部の付け根部分に1対、さらに張出部の四隅に1本づつであった。

さらに、張出部東壁中央に根石を持たないビット



第34图 第6号竖穴状遗構平面断面图 (1)



第35図 第6号竪穴状遺構平断面図(2)

1本が検出され、これと西壁中央の根石持ちピットを結んだ線上やや東寄りにも根石なしのピットが1本位置している。

壁は鋭角に立ち上がるが、壁溝はみられない。また、前述の張出部以外に本遺構に伴うと考えられる施設は発見できなかった。

覆土全体に大量のロームブロックが混入しており、やや上層に多量の礫を含む黒褐色土層が介在している。床面直上には焼土・炭化物を含む黒褐色の層が観察された。遺物は第67図の陶磁器類および瓦片が出土している。

第7号竪穴状遺構(第36図)

H-2・3、I-2・3グリッドに位置する。第

27号土壌を切っているほか、第4号竪穴状遺構とも切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。

長軸10.7m、短軸2.2m、深さ1.2mを測る。主軸方向はほぼ東西を指す。床面は西に向かって緩やかに下がっている。床面上にピットその他の施設は伴っていない。

第8号竪穴状遺構(第37図)

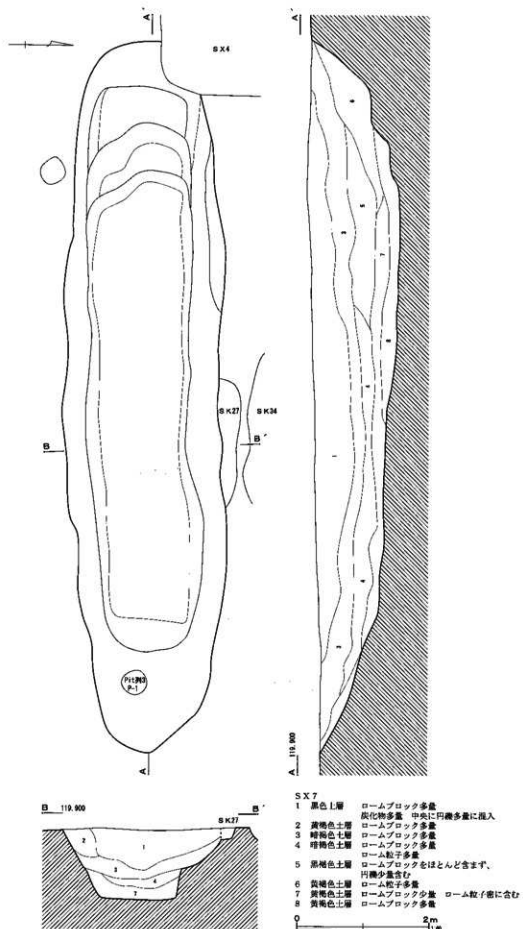
I-2、J-2グリッドに位置する。第34号・35号・43号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。

長軸11.0m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。主軸方向はN-82°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはゆるやかである。床面上にピットその他の施設は伴っていない。

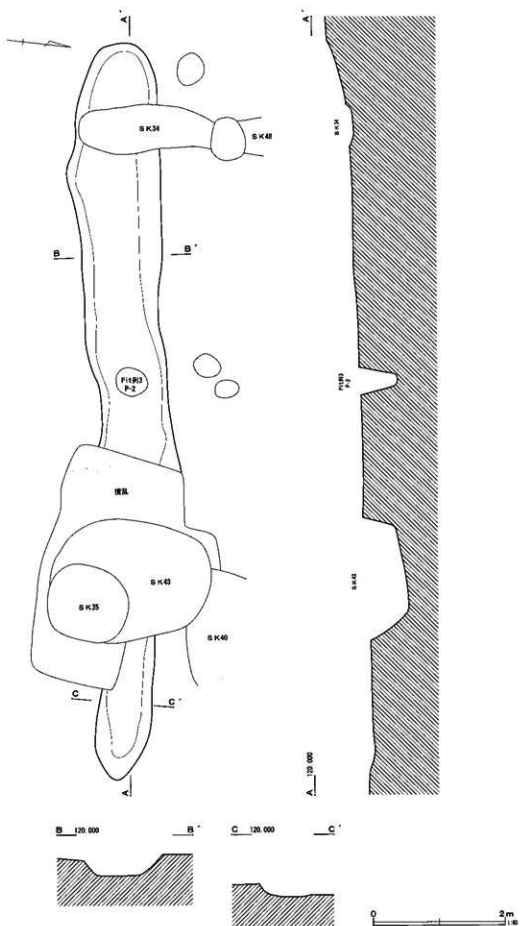
3. 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡(第38図)

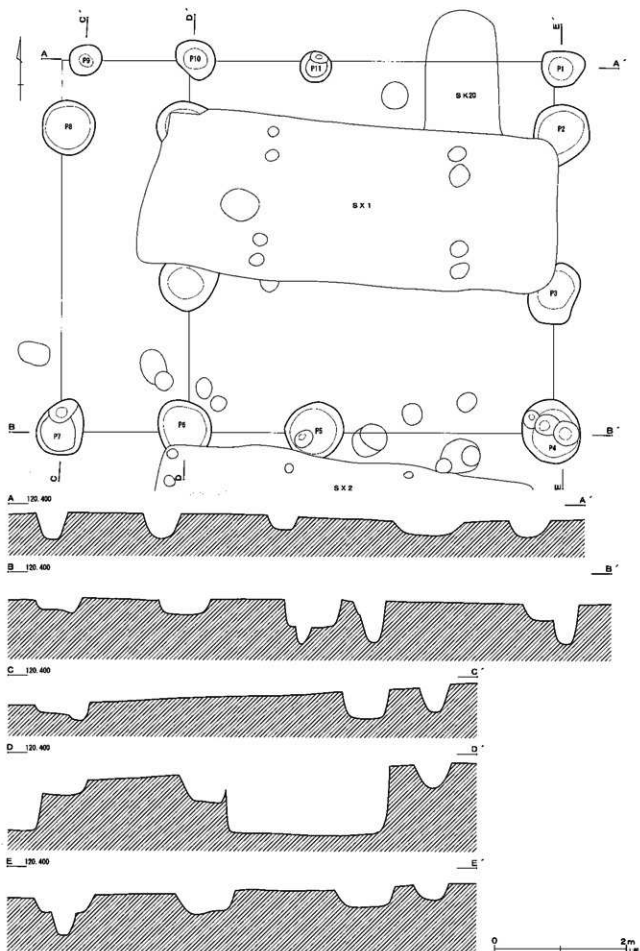
G-2グリッドに所在する。第1号・第2号竪穴



第36図 第7号竪穴状遺構平面断面図



第37图 第8号整穴状遺構平面断面图



第38图 第1号掘立柱建物跡平断面图

第8表 第1号掘立柱建物跡ピット計測表

	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ
P1	68	26	P6	84	24	P11	47	27
P2	(94)	32.3	P7	86	25.7			
P3	94	32.1	P8	82	44.9			
P4	98	62	P9	52	41.9			
P5	82	69.5	P10	82	51.3			

状遺構に切られる。

13本のピットからなり、長軸8.35m・短軸6.3mを測る。主軸はほぼ東西を指す。

ピットは空白となる部分もあるが、3間×3間で

回っており、東辺のみ若干距離をとっている。また、西寄りの2列目のみ東柱を伴っているようだ。

ピット覆土中から少量ながら近世後半の陶磁器類が出土している。

4. 溝跡

第1号溝 (第40図)

A-1・2、B-1・2、C-2、D-2グリッドに位置する。総延長38.04m、最大幅1.36mを測る。

第2号溝に切られている。断面平底で、深さは最大22cmを測る。主軸方向はN-60°-Wを指す。

覆土中から近世後半の陶磁器類が出土している。

第2号溝 (第40図)

E-2グリッドからC-2グリッドへとN-80°-E方向に走った後、N-60°-Wに向きを変えてA-1グリッドに至っている。

第1号溝に平行して走り、これを切っている。また、プランを一部共有するかたちで第55~60号の各土壌が掘り込まれている。

総延長4.73m、最大幅1.24mを測る。断面平底で、深さは最大14cmを測る。

覆土中から近世後半の陶磁器類が出土している。

第3号溝 (第40図)

C-2グリッドに位置する。

第2号溝から分岐するが、接点が第58号土壌に破壊されているため新旧関係は不明である。

総延長6.66m、最大幅80cmを測る。断面平底で、深さは最大26cmを測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。

覆土中から近世後半の陶磁器類が出土している。

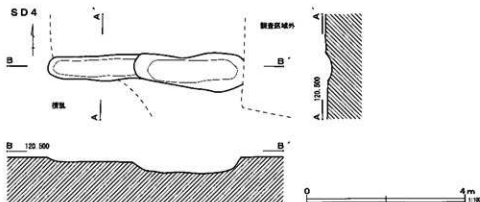
第4号溝 (第39図)

F-2、G-2グリッドに位置する。

東端の一部が調査区域外に存在する。

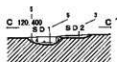
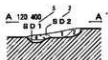
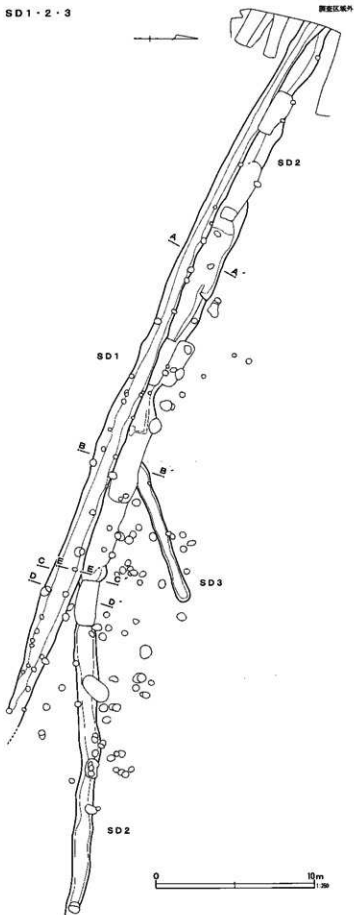
総延長3.86m、最大幅50cmを測る。断面平底で、深さは最大14cmを測る。主軸はほぼ東西を指す。

覆土中から近世後半の陶磁器類が出土している。



第39図 溝跡断面図 (1)

SD1・2・3



SD1・2・3

- 1 黄褐色土層 ローム粒少量
- 2 灰褐色土層 ロームブロック少量
- 3 黒褐色土層 ソフトロームブロック多量
- 4 暗褐色土層 ローム粒子多量
- 5 暗褐色土層 ローム粒子少量
- 6 暗褐色土層 ロームブロック多量
- 7 暗褐色土層 ローム粒子少量

第40図 溝跡断面図 (2)

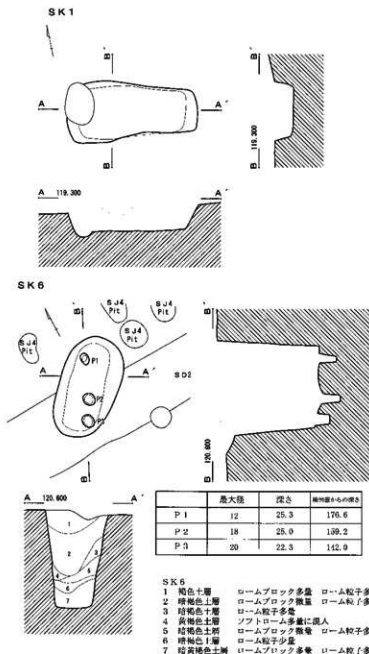
5. 土壌

調査区全体で58基の土壌が検出された。縄文時代のものと同近世以降のものが存在する。個別の計測値は第9表～10表に一括することとし、ここでは特徴的なものについて触れる。

第6号土壌 (第41図)

縄文時代の落とし穴とみられる。底面平坦で、長軸方向に3基のピットが並んでおり、しがらみ状の施設を伴っていたものとみられる。

第6号土壌出土遺物 (第54図)

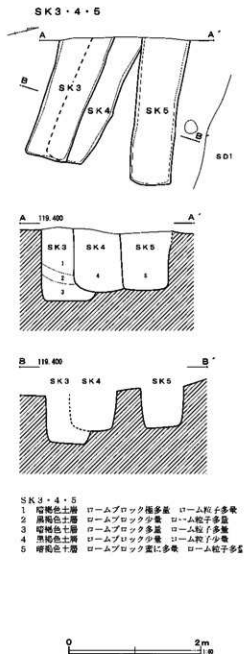


1～3は加曾利E系の土器である。1は無文の口縁で胴張りの深鉢。2は口縁直下に屈曲を持つ深鉢で、胴部に縄文が施文される。3は櫛歯状工具による条線を地文とする。

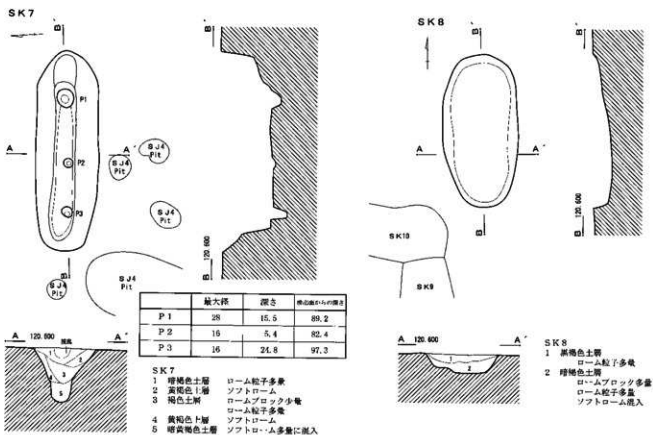
4～7は無文地に沈線文が垂下する胴部破片で、称名寺系の土器の可能性はある。いずれも後期初頭の土器であり、土壌自体も同時期と考えられる。

第7号土壌 (第42図)

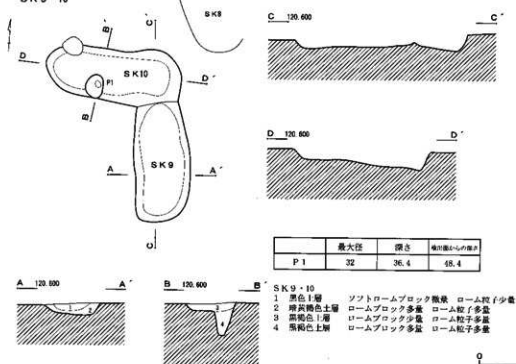
縄文時代の落とし穴と考えられる。薬研状の掘り



第41図 土壌断面図 (1)

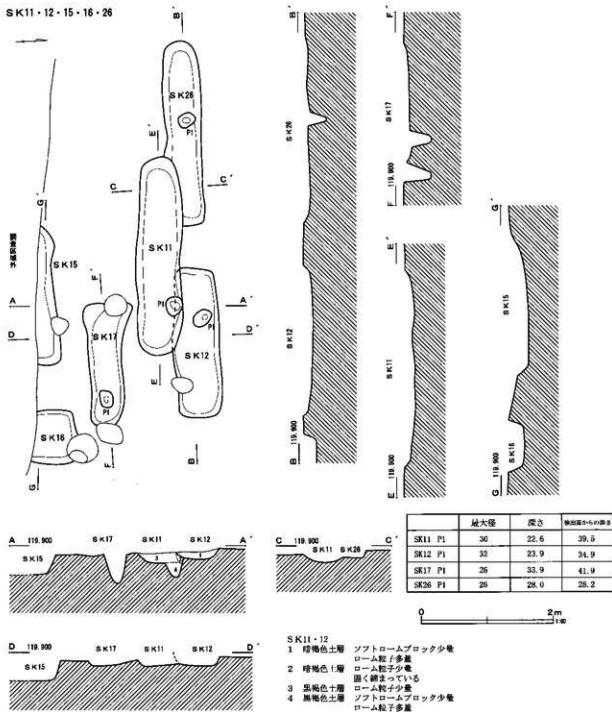


SK 9・10



第42図 土壌断面図 (2)

SK11・12・15・16・26



第43図 土壌断面図 (3)

込みを持ち、長軸両端に一对のビットを持つ。両者の間にもごく浅いビットを検出しており、しがらみ状の施設を伴っていたものとみられる。

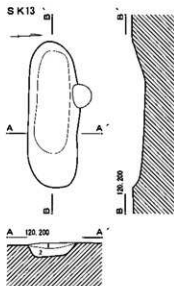
遺物は出土していない。

第8号土壌 (第42図)

底面に段差を持ち、2基の土壌の切り合いである可能性が考えられる。遺物は中期末葉～後期初頭の土器が出土している。

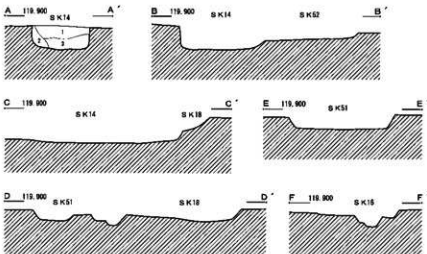
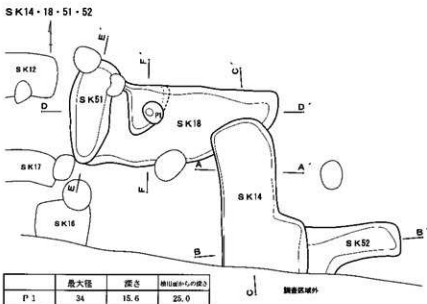
第8号土壌出土遺物 (第54図)

8は称名寺系の土器、他はすべて加曾利E系の土器と考えられる。8は無文地に浅い平行沈線文で曲線文を描く。9は磨消文様の無文部分と考えられ、縦位の研磨が徹底される。10は断面三角形の微隆起線で磨消文様が描かれる。11は沈線による磨消懸垂文下端部である。12は縄文のみ施文される胴部である。



SK13

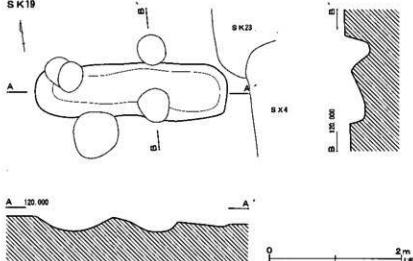
- 1 黒褐色土層 ローム粒子少量
炭化物微量
締まりなし
- 2 黒褐色土層 ロームブロック少量
ローム粒子少量
締まりなし



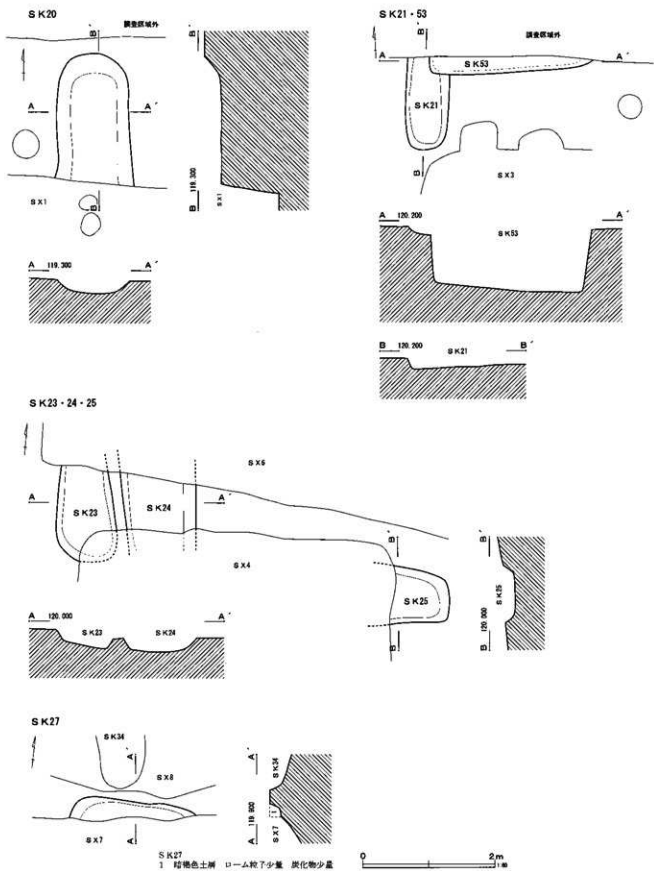
SK14

- 1 黒褐色土層 ロームブロック少量
ローム粒子多量
炭化物少量
- 2 黒褐色土層 ローム粒子少量
炭化物少量
炭化物少量
- 3 黒褐色土層 ツフトロームブロック少量
ローム粒子多量
粘土粒子微量

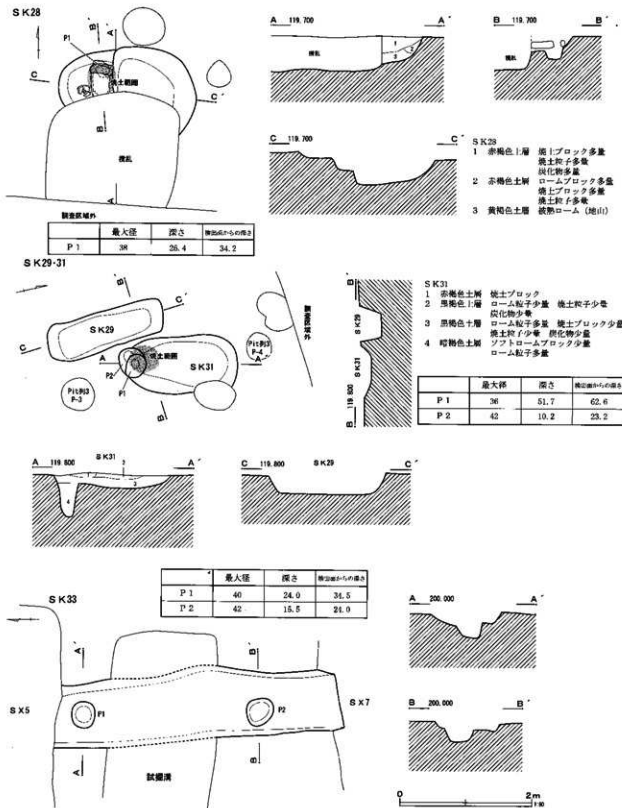
SK19



第44図 土壌断面図(4)

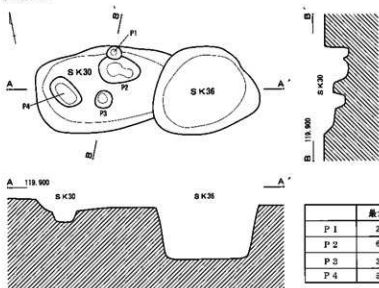


第45図 土壌断面図(5)



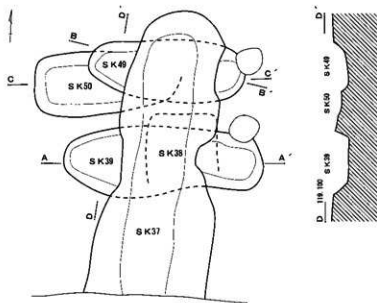
第46図 土壌断面図 (6)

S K 30・36

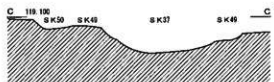
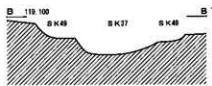
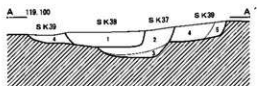


	最大径	深さ	検出中心の深さ
P 1	22	25.9	34.8
P 2	62	22.4	35.5
P 3	35	9.6	31.3
P 4	52	18.1	24.6

S K 37・38・39・49・50



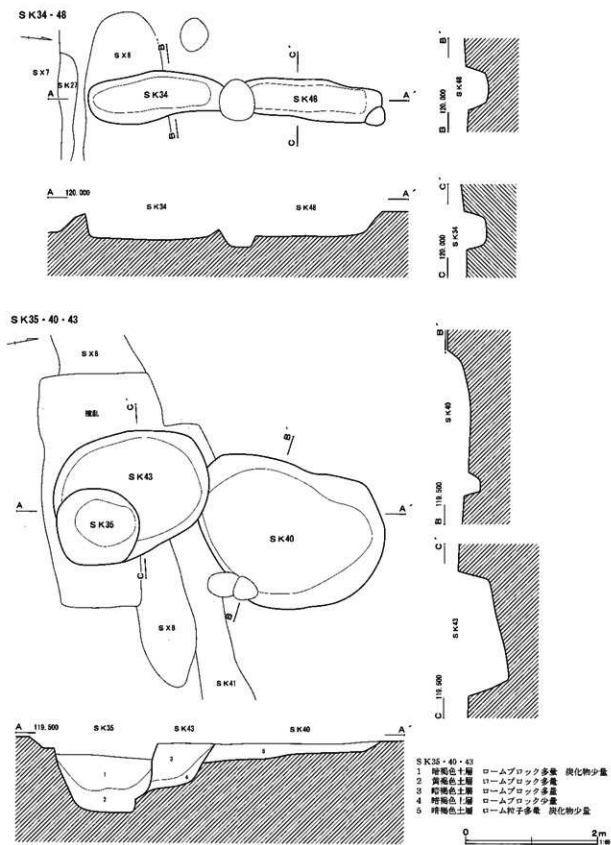
調査区域外



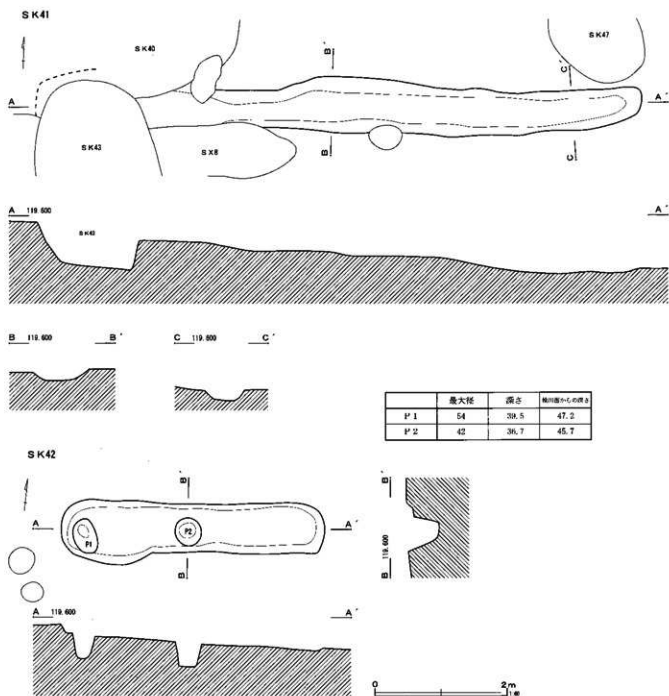
- S K 37・38・39
- 1 黒褐色土層 ローム粒子少量 1層底部の一部に焼土ブロックあり
焼土粒子少量
 - 2 黒褐色土層 ローム粒子少量 焼土粒子少量 炭化物少量
 - 3 黒褐色土層 ローム粒子多量 炭化物少量
 - 4 暗褐色土層 ロームブロック微量 ローム粒子多量
 - 5 暗褐色土層 ローム粒子多量 ソフトローム混入

0 2m

第47図 土壌断面図 (7)



第48図 土坑平面図 (8)



第49図 土壌断面図(9)

第28号土壌 (第46図)

2基の土壌の切り合いと考えられる。底面に焼土の散布がみられる。

焼土の直上に扁平な礫が置かれており、建物柱穴に伴う根石的なものの可能性がある。遺物は出土していない。

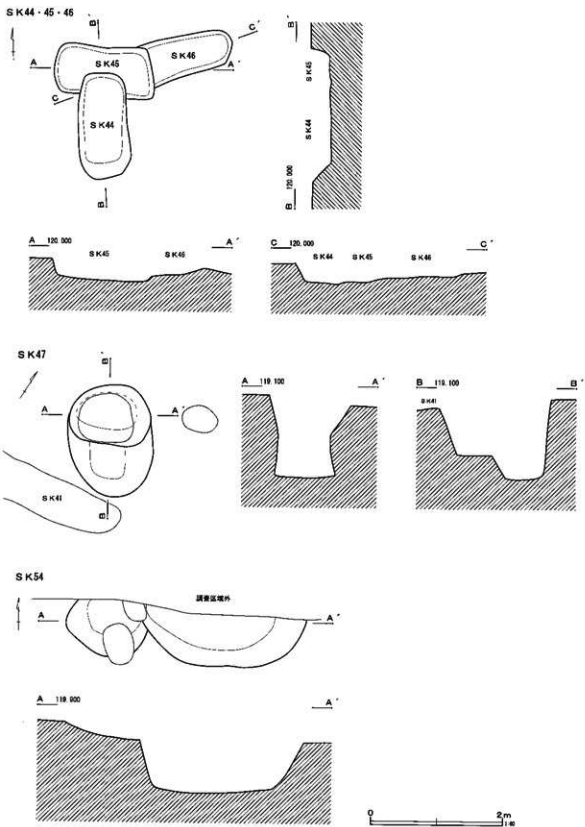
第31号土壌 (第46図)

長楕円形の土壌で、長軸側一端の底面に焼土の散

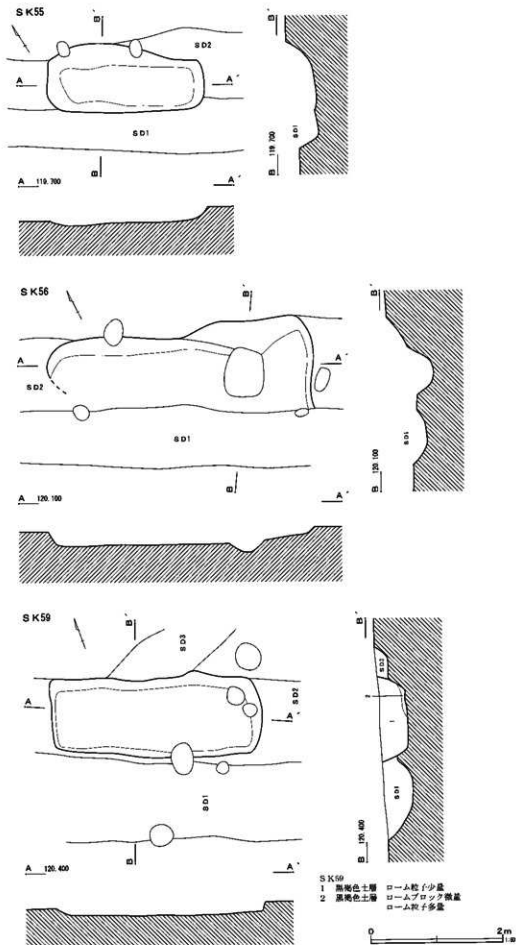
布がみられる。焼土下面からピットが検出されたが、断面観察の結果、より古い時期のものの重複と考えられる。遺物は出土していない。

第47号土壌 (第50図)

中段から軽微にオーバーハングするフラスコ状の土壌で、南東にテラスを伴う。規模・形状などから掘立柱建物に伴う柱穴の可能性がある。遺物は出土していない。

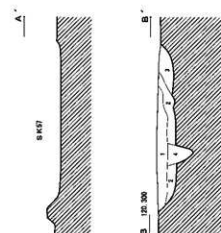
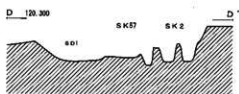
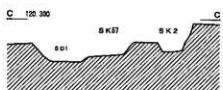
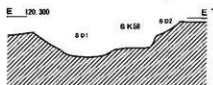
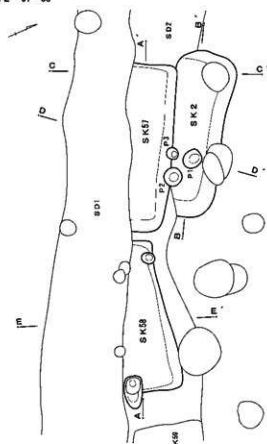


第50图 土壤平面断面图 (10)



第51図 土壌断面図 (11)

SK2・57・58

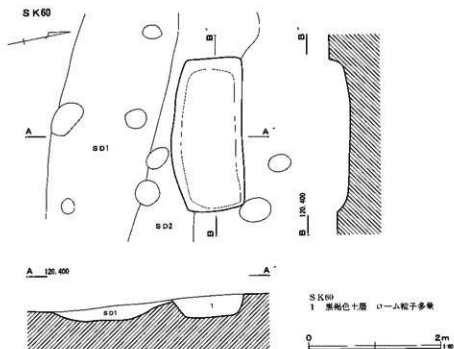


- SK2
- 1 暗褐色土層
ローム粒子少量
炭化植物遺体
 - 2 暗褐色土層
(1層よりやや明るい)
ロームブロック多量
ローム粒子多量
 - 3 暗褐色土層
ツブローム多量
 - 4 暗褐色土層
ロームブロック散在
ローム粒子少量

	最大径	深さ	検出回数(個数)
P 1	30	24.5	53.9
P 2	25	44.1	7.05
P 3	18	28.7	54.5



第52図 土壌断面図 (12)



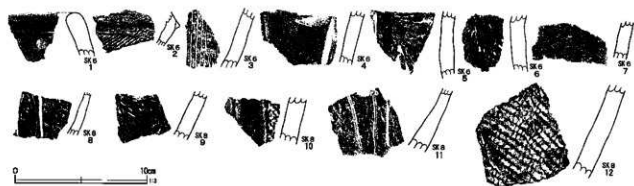
第53図 土壌平断面図 (13)

第9表 土壌計測表

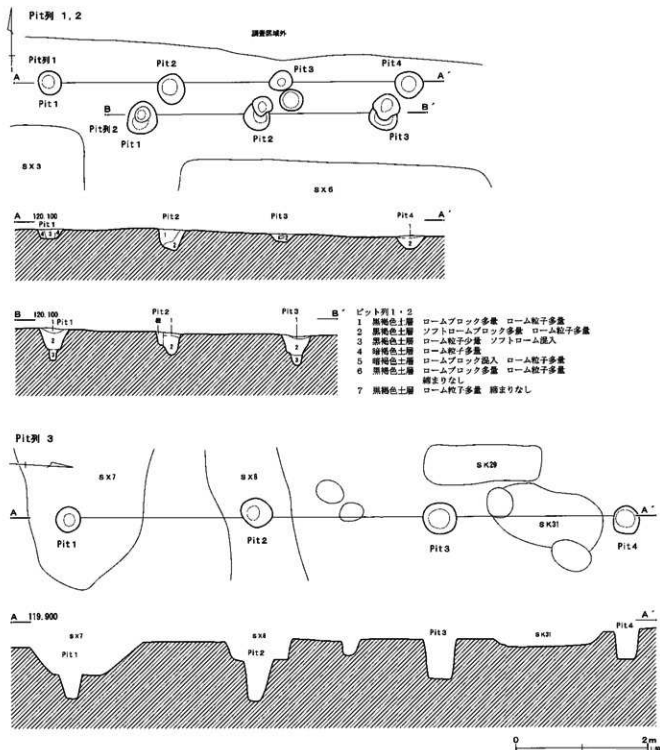
遺構名	所在 (グリッド)	最大径 (cm)	主軸方向	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
SK1	A-1	196	N-78°-W	196	90	43.3	
SK2	B-2	246	N-63°-W	246	(76)	27.5	
SK3	A-1	190	N-13°-E	(188)	64	104.3	
SK4	A-1	206	N-55°-W	(206)	(70)	90.0	
SK5	A-1	222	N-70°-W	(220)	60	82.0	
SK6	D-2	186	N-24°-E	144	92	151.2	
SK7	D-2	302	N-87°-W	300	94	81.4	
SK8	E-1・2	230	N-5°-W	230	100	26.5	
SK9	E-2	(178)	N-5°-W	(174)	82	15.5	
SK10	E-2	204	N-8°-E	202	76	28.7	
SK11	G-3	296	N-86°-W	294	58	12.5	
SK12	G-3	226	N-87°-W	224	64	14.4	
SK13	F-3	220	N-88°-W	220	72	24.5	
SK14	II-3	(230)	N-5°-W	(222)	80	38.3	
SK15	G-3	208	N-83°-E	208	(30)	27.4	
SK16	G-3	(80)	N-0°	80	60	22.2	
SK17	G-3	190	N-90°-W	(180)	50	6.0	
SK18	H-3	(250)	N-90°-W	(250)	122	17.2	
SK19	G-2・3、H-2・3	288	N-83°-W	286	74	18.0	
SK20	G-2	(206)	N-0°	(206)	106	24.5	
SK21	H-2	(142)	N-4°-E	(140)	64	16.6	
SK22	H-2・3、I-2・3	SX7に変更					
SK23	H-2	(166)	N-15°-W	(146)	84	21.5	
SK24	H-2	(108)	N-8°-W	(80)	110	21.8	
SK25	H-2・3	(90)	N-7°-W	90	(82)	17.0	
SK26	G-3	278	N-7°-W	276	52	5.2	
SK27	I-3	(188)	N-8°-W	(188)	(20)	14.8	

遺構名	所在 (グリッド)	最大径 (cm)	主軸方向	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
SK28	I-3	(240)	N-80°-W	(170)	(68)	44.6
SK29	I-2	176	N-7°-W	176	52	34.8
SK30	H-3	(178)	N-82°-W	(178)	130	8.8
SK31	I-2	180	N-13°-E	176	80	23.8
SK32	I-2, J-2		SX8に変更			
SK33	H-2	(420)	N-87°-E	(460)	54	8.7
SK34	I-2	(196)	N-4°-W	(192)	64	34.0
SK35	I-2	122	N-10°-E	140	112	95.8
SK36	H-3, I-3	154	N-82°-W	154	132	80.3
SK37	J-3	(434)	N-6°-W	(430)	124	57.8
SK38	J-3	(113)	N-8°-W	(113)	(102)	46.4
SK39	J-3	296	N-86°-E	288	94	26.6
SK40	I-2, J-2	(282)	N-10°-E	(278)	116	31.4
SK41	J-2	(902)	N-80°-E	(902)	82	29.8
SK42	I-3, J-3	400	N-85°-E	390	72	10.2
SK43	I-2	(254)	N-25°-W	252	180	55.7
SK44	J-3	164	N-2°-W	164	72	31.2
SK45	J-3	150	N-87°-W	146	(70)	34.3
SK46	J-3	(140)	N-69°-E	(126)	60	12.6
SK47	J-2	168	N-60°-E	166	122	122.5
SK48	I-2	(206)	N-5°-W	(190)	58	43.9
SK49	J-3	226	N-80°-W	226	72	21.0
SK50	J-3	(100)	N-82°-E	(100)	96	8.2
SK51	G-3	174	N-10°-E	158	60	20.9
SK52	H-3	(132)	N-82°-E	(132)	96	8.2
SK53	H-2	244	N-85°-W	244	(26)	92.4
SK54	I-2	356	N-90°-W	356	(74)	91.4
SK55	A-1	234	N-58°-W	234	102	43.6
SK56	B-1	396	N-70°-W	396	(102)	40.4
SK57	B-2	248	N-68°-W	248	(60)	7.4
SK58	B-2	226	N-72°-W	226	(64)	23.5
SK59	C-2	316	N-69°-W	316	110	20.0
SK60	C-2	232	N-79°-W	230	106	35.0

* () 内は推定値



第54図 土壌出土遺物



第55図 ビット列平面図

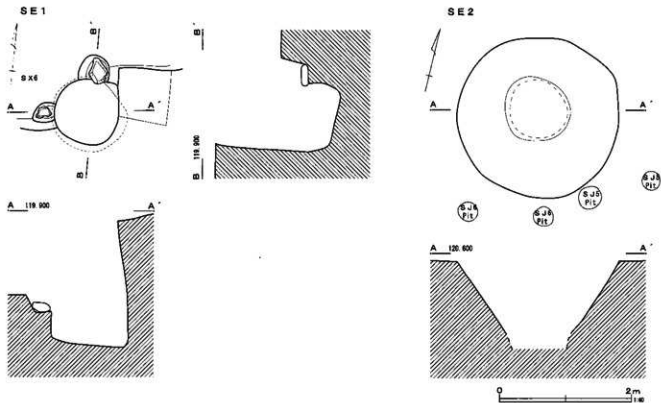
第10表 ビット列計列表

	最大径	深さ		最大径	深さ		最大径	深さ
P1	38	14	P1	49	47	P1	36	29
P2	46	30	P2	52	35	P2	46	55
P3	36	12	P3	54	46	P3	49	63.8
P4	42	16				P4	42	49.5

第1号ビット列

第2号ビット列

第3号ビット列



第56図 井戸跡平面断面図

6. ピット列

第1号ピット列 (第55図)

H-2グリッドに位置する。第2号ピット列と近接する。4本のピットからなり、重複はみられない。総延長は5.74mを測る。主軸はほぼ東西を指す。

第2号ピット列 (第55図)

H-2グリッドに位置する。第1号ピット列と近接する。3本のピットからなり、いずれも同一地点

での重複がみられる。総延長は4.6mを測る。主軸はほぼ東西を指す。

第3号ピット列 (第55図)

I-2・3グリッドに位置する。SX7・8、SK31と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

4本のピットからなり、重複はみられない。総延長は8.64mを測る。主軸はほぼ南北を指す。

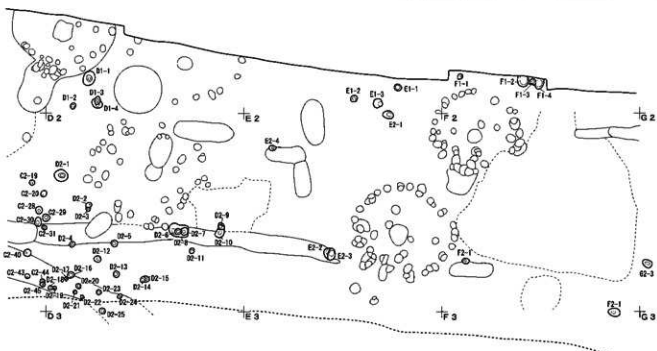
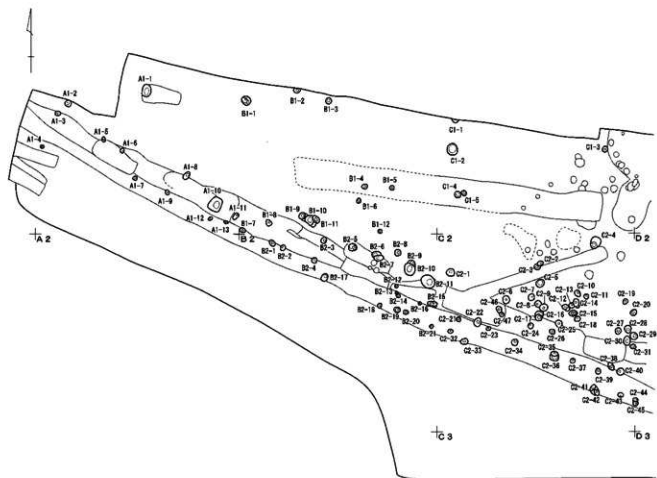
7. 井戸跡

第1号井戸跡 (第56図)

H-2グリッドに位置する。第6号竪穴状遺構を切っている。直径1.2mの円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、若干オーバーハングしている。底面は検出できなかった。

第2号井戸跡 (第56図)

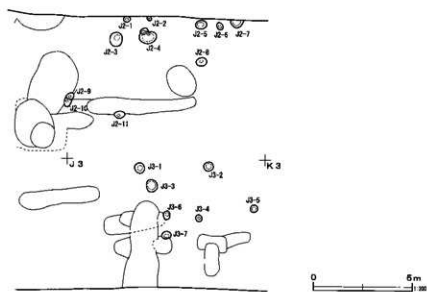
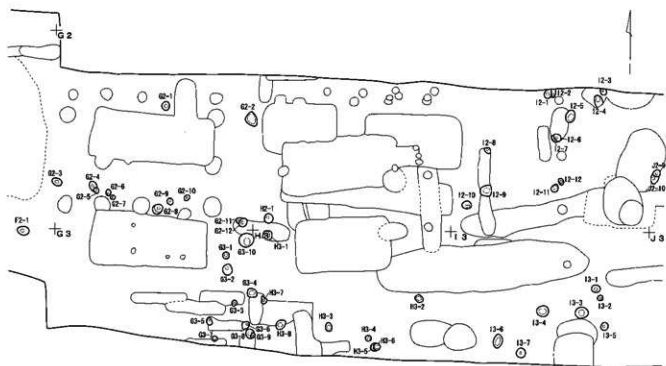
D-1グリッドに位置する。口径2.4mで、検出面下約1.2mから摺鉢状に開口する。底面は検出できなかった。覆土中から飯能焼を含む陶磁器類が出土した。遺物は第63～65図に掲載した。



南平部分



第57図 グリッドピット平面図 (1)



第58図 グリッドピット平面図 (2)

8. ピット

調査区全体から検出された性格不明のピットのうち、遺構外にあって配列等の不明なものを第57・58図に一括掲載した。

いずれも建物や欄列等の構造物の一部で、縄文時

代のものと近世以降のものが混在しているものとみられるが、出土遺物や覆土から両者を区別することはできなかった。規模・形態等の特徴は第12表にまとめられている。

第11表 グリッドビット計測表

グリッド	ビット番号	最大径 (mm)	深さ (mm)	グリッド	ビット番号	最大径 (mm)	深さ (mm)	グリッド	ビット番号	最大径 (mm)	深さ (mm)
A-1	P1	61	30.0	C-2	P20	30	46.7	G-2	P1	44	24.8
	P2	34	15.0		P21	24	8.4		P2	78	35.7
	P3	26	6.4		P22	46	25.0		P3	48	47.8
	P4	22			P23	18	25.5		P4	54	44.0
	P5	24	38.2		P24	28	15.3		P5	28	45.5
	P6	26	55.2		P25	34	54.0		P6	34	38.2
	P7	22	13.5		P26	30	27.5		P7	26	20.0
	P8	42	51.1		P27	36	58.0		P8	54	63.2
	P9	26	35.7		P28	34	27.3		P9	32	48.7
	P10	54	39.5		P29	26	29.6		P10	32	37.5
	P11	34	26.6		P30	50	27.0		P11	38	46.0
	P12	16	22.5		P31	30	32.5		P12	46	74.6
	P13	20	18.7		P32	28	48.0	G-3	P1	34	26.2
B-1	P1	48	45.0		P33	34	67.8		P2	52	45.5
	P2	38	30.5		P34	30	41.6		P3	34	50.2
	P3	30	25.5		P35	34	38.5		P4	42	44.7
	P4	28	16.8		P36	48	21.0		P5	34	54.7
	P5	26	13.9		P37	28	16.0		P6	36	41.5
	P6	24	15.3		P38	40	31.7		P7	24	27.2
	P7	28	35.5		P39	32	19.5		P8	58	39.3
	P8	36	17.0		P40	36	23.5		P9	32	43.5
	P9	36	31.8		P41	34	18.5		P10	68	24.9
	P10	50	35.5		P42	36	32.6	H-2	P1	26	34.6
	P11	42	45.7		P43	22	27.5	H-3	P1	48	21.7
	P12	24	16.8		P44	26	23.3		P2	42	38.6
B-2	P1	34	35.2		P45	38	34.4		P3	44	38.2
	P2	30	58.6		P46	28	32.8		P4	32	16.5
	P3	34	24.3		P47	20	22.0		P5	38	13.8
	P4	28	39.6	D-1	P1	72	64.0		P6	34	40.0
	P5	44	26.8		P2	30	22.5		P7	34	51.9
	P6	50	25.1		P3	40	6.0		P8	52	38.8
	P7	48	47.9		P4	62	26.5	I-2	P1	46	20.1
	P8	36	53.8		P1	68	59.8		P2	44	16.7
	P9	44	45.1	D-2	P2	30	63.1		P3	32	21.1
	P10	60	46.0		P3	22	13.8		P4	61	30.0
	P11	72	20.8		P4	28	19.6		P5	62	36.9
	P12	20	26.2		P5	34	24.7		P6	36	62.6
	P13	18	18.0		P6	30	35.6		P7	42	23.2
	P14	20	19.7		P7	28	34.3		P8	34	29.3
	P15	46	40.7		P8	92	49.1		P9	62	52.0
	P16	16	28.8		P9	46	89.2		P10	90	27.3
	P17	26	38.0		P10	46	54.6		P11	40	46.1
	P18	26	38.0		P11	28	27.7		P12	40	26.5
	P19	34	32.5		P12	36	37.0	I-3	P1	48	59.3
	P20	26	19.3		P13	34	41.0		P2	34	34.7
C-1	P1	34	27.9		P14	34	18.5		P3	62	21.8
	P2	60	30.4		P15	34	13.1		P4	64	20.5
	P3	30	26.5		P16	36	17.2		P5	40	27.0
	P4	36	40.2		P17	22	19.2		P6	68	37.8
	P5	28	12.6		P18	22	15.8		P7	50	20.2
C-2	P1	42	47.6		P19	20	21.2	J-2	P1	36	21.8
	P2	30	26.0		P20	28	19.3		P2	26	18.0
	P3	30	26.7		P21	16	12.2		P3	72	40.0
	P4	66	65.5		P22	20	7.9		P4	86	75.6
	P5	46	22.8		P23	30	30.6		P5	56	25.0
	P6	44	63.6		P24	24	28.0		P6	40	42.7
	P7	34	13.8		P25	28	51.4		P7	62	15.8
	P8	36	47.5	E-1	P1	38	20.5		P8	54	23.0
	P9	42	46.5		P2	16	26.6		P9	34	28.3
	P10	36	23.5		P3	22	46.7		P10	50	20.9
	P11	26	29.8		P1	56	24.0		P11	52	34.8
	P12	34	34.1	E-2	P2	48	18.5	J-3	P1	52	38.2
	P13	26	27.9		P3	56	56.5		P2	50	31.5
	P14	40	39.2		P4	30	54.0		P3	62	20.4
	P15	40	35.8	F-1	P1	28	34.9		P4	36	51.5
	P16	50	29.1		P2	52	13.4		P5	36	27.9
	P17	32	16.7		P3	34	30.2		P6	40	26.4
	P18	26	36.6		P4	56	35.3		P7	48	47.1
	P19	28	40.5	F-2	P1	34	39.4				
				F-3	P1	62	21.5				

9. グリッド出土遺物

土器 (第59図～61図)

1は深鉢胴部中段のくびれ部分である。二段構成のJ字文であるが、下段のモチーフは崩れて懸垂文化している可能性が高い。地文は持たず、全面に縦位の研磨が施される。

2は底部から胴下半部にかけて残存する。下端開放する縦位の平行沈線のみ施文され、地文を持たない。斜位の粗雑な撫で調整が観察され、底部直上部分のみ縦位の研磨が施される。

3は口縁部で、中期中葉の新道式である。口唇断面肥厚して内削ぎ状を呈し、ペン先状工具による三角押文が多段に巡っている。

4～37は加曾利B系の土器群で、中期末から後期初頭にかけてのものが混在している。4・5はキャリパー系深鉢の口縁部である。口唇肥厚し、隆帯＋沈線による区画文が描かれる。

6～13は口縁部文様帯を持たない一群の深鉢で、7～12は口縁部無文帯下端を微隆起線によって区画する。

11は胴部に隆帯による渦巻文を描く。13は口縁部無文帯に複列の列点文が巡る。波状口縁で、波頂部の突起が剥落した形跡がみられる。

14～16は沈線による磨消モチーフ、17～25は隆帯ないし微隆起線による磨消モチーフである。21はキャリパー系深鉢における口縁部文様帯下端の区画

線であろう。

26～31は両耳壺である。26～28は口縁部とその直下の破片で、幅狭の無文帯と起伏に乏しい器形から後期段階のものと考えられる。29以下は把手部分で、小環状の31は深鉢口縁部の把手である可能性もある。

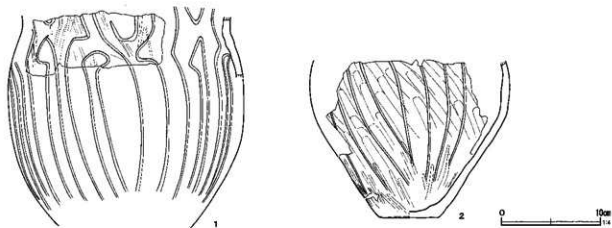
32～37は条線地文の土器である。32は浅鉢口縁部であるが、口縁部無文帯と地文部の間に区画を設けない。33は胴部中段のくびれ部分である。35は波状ないしコンパス状の条線である。36・37は磨消懸垂文がみられる。

38～41はいずれも曾利系の土器である。38は棒状工具による矢羽根状の沈線、39は縦長雨垂れ状の列点文、40は櫛歯状工具による列点文を地文とする。41はL無節の縄文の回転方向を変えることで羽状縄文を形成するもので、38～40の矢羽根モチーフを意識したものであり、縄文地文でありながら曾利的な要素を持つ土器といえよう。

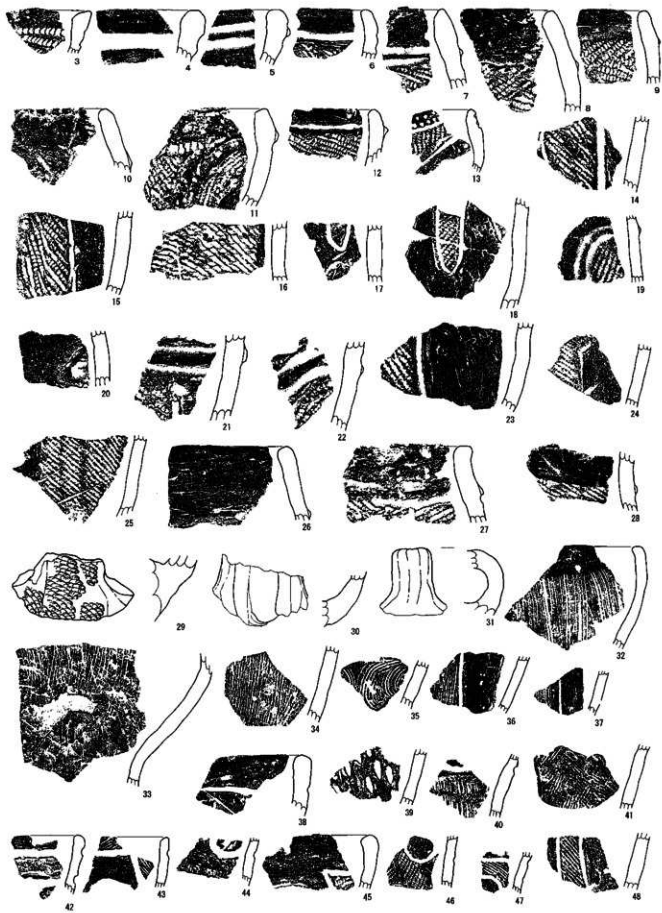
42～48は称名寺I式である。いずれも地文縄文で、口縁下の区画線からJ字文等のモチーフが垂下する。42～44は深い沈線で文様が描かれ、内面に蚯蚓腫れ状の隆起が生じている。

49は深鉢口縁部の突起である。盤状の突起が縦位に付されるもので、側面に透かし状の貫通孔を持つ。

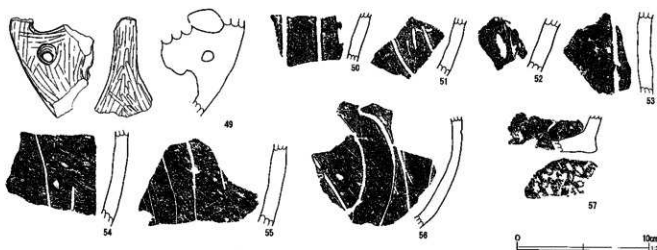
50～56は称名寺II式である。地文は列点文化する



第59図 グリッド出土遺物 (1)



第60図 グリッド出土遺物 (2)



第61図 グリッド出土遺物 (3)

か、まったく地文を持たない。56は胴下半部で、下端開放するJ字文の一部がみられる。

57は底部の破片で、底面に刺代圧痕が観察される。

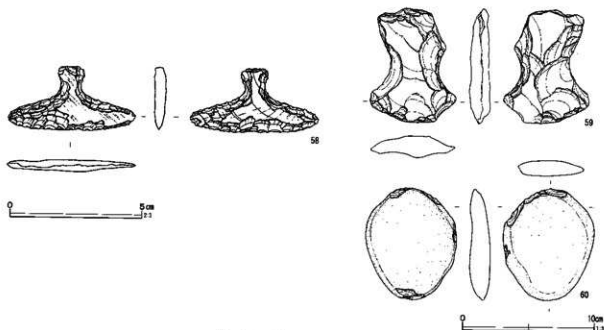
石器 (第62図)

58は石匙である。幅広かつ左右に先端を持つ横型の石匙で、腹面に主要剥離面を残す。また、つまみ部付け根の袂れ部分に顕著な磨耗がみられるほか、刃部背面にも磨耗がみられる。縦3.6cm・横7.3cm・厚さ0.65cmを測り、重量12.6gを量る。石材は表面灰白色の頁岩を使用する。

59は打製石斧である。中段に袂れを持つ分銅形を

呈する。側面観は紡錘形で反りを持たない。基部の右端部を欠損するが、これは製作時からのものとみられる。縦8.6cm・横6.5cm・厚さ1.6cmを測り、重量88.2gを量る。石材はホルンフェルスを使用し、全体に風化が著しい。

60は叩石である。扁平かつ不整楕円形の礫の一端を使用しているほか、側縁部にも細かな剥離がみられる。縦8.4cm・横6.8cm・厚さ1.5cmを測り、重量131.5gを量る。石材は暗紫褐色のチャートを使用している。



第62図 グリッド出土遺物 (4)

10. 近世・近代の遺物

遺構内外から近世以降の遺物が多数出土している。以下にその概要を述べ、個別の記載は観察表の形で章末に一括する。

陶磁器類 (第63図～68図)

17世紀以降のものを中心に出土している。産地は瀬戸美濃系、肥前系、益子系などであり、これに在地のものが混じる。

肥前系の磁器は碗・湯飲み・猪口・蕎麦猪口が大半であり、皿・鉢類がこれに次ぐ。59の花瓶、68の仏花瓶、39の紅猪口なども存在している。

陶器類には19・22・48・51といった瀬戸系の小皿が目立ち、15・16の徳利、17～21の灯明皿・油受け皿、43・50・54の摺鉢、36・37の焙烙がみられる。

35は三足の小型火鉢、53は唐津の大皿である。

玩具とみられるミニチュアの陶器類も出土しており、46の徳利、72の羽釜が存在する。

在地産陶磁器として特徴的なのがいわゆる「飯能焼」で、生産遺跡である原窯跡を除くと市内の遺跡からの出土は稀である。

第2号井戸跡からまとめて出土したほか、グリッド出土遺物中にも散見される。器種のうへでは行平鍋・徳利が多く見られ、他に蓋・片口鉢・傾猪口・菜味入れがみられる。

原窯出土資料中ではある程度の比率を占めている皿や鉢といった供献容器が(破片レベルでも)貧弱であるのがセットとしての特徴であり、同時に出土した他産地系の陶磁器類がこれを補っていたものと考えられる。

・行平鍋

第2号井戸跡30～32、グリッド出土の71などの復元個体のほか、破片レベルでも多く出土している。

注ぎ口と握り手を有し、口唇に受けを持って土製の蓋とセットを構成する。

飯能焼の主力を占める器種であり、原窯の発掘調査でもっとも多く出土している。本遺跡出土の個体はすべて腰部の屈曲を持たない丸型の行平鍋であ

る。体部は内面のみ施釉され、外面に飛び鉋がみられる。ほとんどの場合、体部下端に1条の沈線刻みが巡る。

握り手部分は半身づつ型押し成型された六角中空で施釉されず、背面に「寿」字や鶴・亀などの画像文が型押しされるのが通例であるが、グリッド出土の71はクロク引きによる鱗壺状の握り手が採用されており、この部分も施釉されている。また、外面鍋上半部にも帯状の施釉がみられる等やや特異な例である。

第2号井戸跡出土の30は注ぎ口と握り手を欠失するが、口縁の造りや火に掛けられた痕跡があることから行平鍋と考えた。

内面および外面の胴中段まで施釉され、飛び鉋はみられない。底部から胴下半部にかけてススが付着する。口縁の受けの造りが大きく、底部直上の裾部分でややすばまる腰高な器形であり、この器種の特徴である胴部下端の沈線刻みがみられない。全体にややイレギュラーな印象を受ける個体である。

・徳利

出土量は少なくないが、壁厚2mm前後のきわめて薄手の造りであるために大半が細片の状態となってしまう。

唯一グリッド出土の69では全容を知ることができ、円錐形の胴部に緩やかな勾配でくびれる頸部が接続し、肩が「く」の字に張り出す特徴的な器形である。イチチン描による文様の一部がみられるが、これは定型的な瓢箪文である。

第2号井戸跡出土の26は底部で、裾部が斜めに面取りされ、ここからは施釉されない。底面はわずかに上げ底状となっている。

・蓋

行平などの土鍋とセットになる蓋である。第2号井戸跡出土の29とグリッド出土の70の2例が出土した。内面のみ施釉し、外面には鍋の体部と共通の飛び鉋を施す。

いずれもイッチン描の文様は一般的な秋草文ではなく竜文である。また、つまみ部には三角形の切り込みが施される。グリッド出土の70ではつまみ部の頂部のみ釉薬が掛かっている。

・餌猪口（えちよく）

第2号井戸跡出土の24が唯一の例である。小鳥の飼育の際に使用された餌入れ・水入れである。

背の低い円筒形で、化粧品容器である合子と共通の造りであるが、蓋を伴わないため口端は丸みを持ち、この部分まで施釉されている。裾部が斜めに面取りされ、これより下は施釉されない。

鳥籠への取り付けのため、口端外縁に小環状の把手が付されていたものとみられるが、折損している。

・葉味入れ

合子形の円形容器3つを接ぎし、アーチ状の把手を付したものである。茶褐色の鉄釉が掛けられているが、胎土の特徴から飯能焼の製品と判断した。

口端は丸みを持ち、この部分まで施釉される。裾部はロクロ整形によって緩やかに立ち上がり、底面はわずかに上げ底状となっている。

・土瓶

肩と腰に張りを持つ胴部箱形の土瓶である。注ぎ口は直線的な「鉄砲口」であり、体部の穿孔部分は欠失している。かけ手はU字状の粘土紐を接着した「より土」タイプである。

口端は直立して内面に受けを持っており、「落とし蓋」タイプの蓋とセットになっていた可能性が高い。飯能市教育委員会による原窯跡の発掘調査では、落とし蓋は専ら急須に用いられており、土瓶に採用される例はまれである。

・片口鉢

第2号井戸跡から1点のみ出土している。片口部分が欠失しており、こね鉢に似るが、内面施釉され小型である点から片口鉢と考えた。

口縁は折り返し玉縁、底部は輪高台で下端が斜めに面取りされている。砂質できめの粗い胎土が用いられている。見込みに三足のビン痕が観察される。

瓦（第69図）

近世の遺構内および包含層中から近世の今戸焼の瓦が多量に出土しているほか、堅穴状遺構の覆土から古代の布日瓦が複数出土している。同時期の遺物が他にまったく出土していないことから、おそらくは近世段階に瓦だけが何らかの用途で持ち込まれた可能性も考えられる。

出土した古代瓦はいずれも平瓦で、細片の状態であった。

鍛冶関連遺物（第70図）

近世の遺構内外から鞆の羽口と鉄滓類が多量に出土した。

羽口は第2号井戸跡出土の1を除けばいずれも小破片である。3～5は炉体への取り付け部分であり、先端が溶融して炉壁と癒着している。

6は鍛冶炉の底面に溜まった椀形滓で、直径10cmと比較的大型のものである。

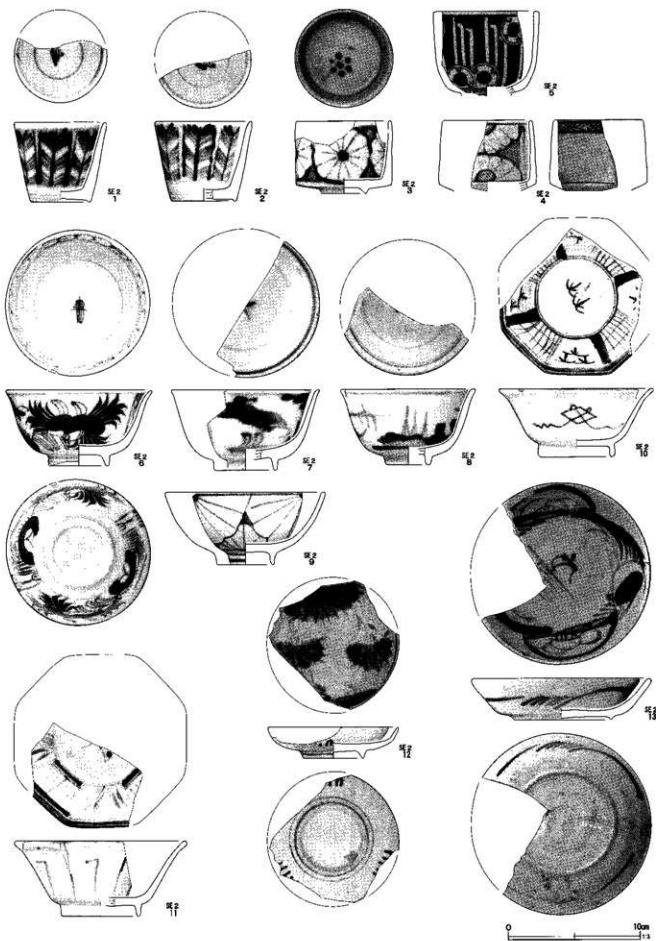
金属製品（第70図）

銅合金製の小柄と燭台が出土した。小柄は内部に茎が残存している。

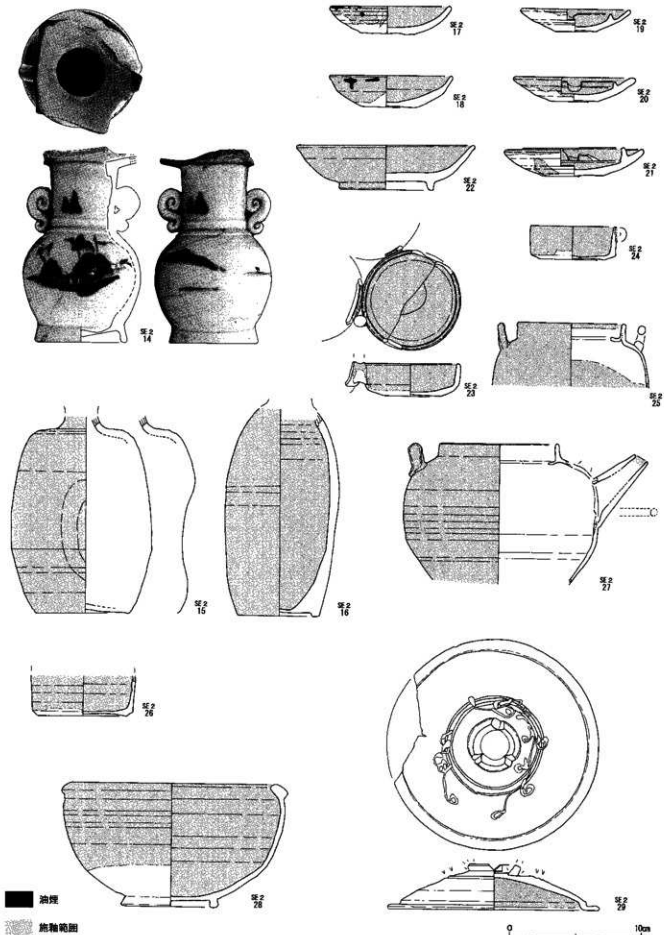
古銭は堅穴状遺構等から寛永通寶が出土したが、8は渡米銭である乾隆通寶である。

石製品（第70図）

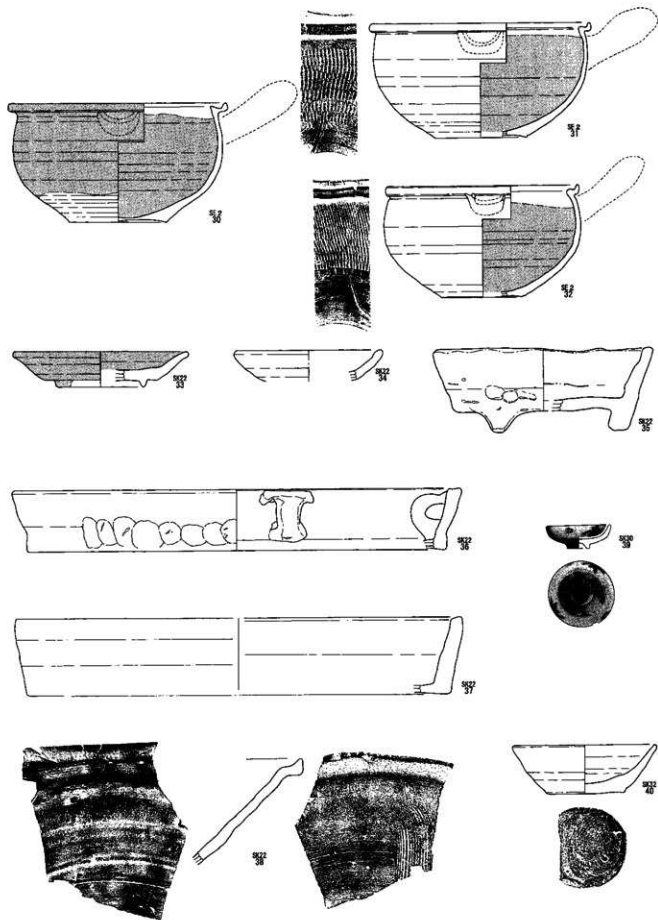
砥石と小型の硯が出土している。



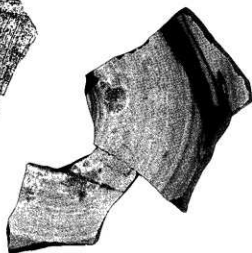
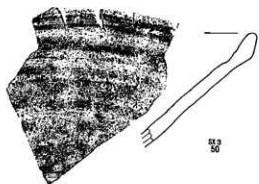
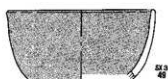
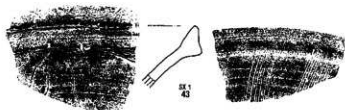
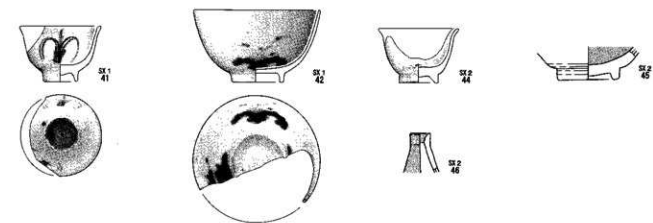
第63図 近世～近代の陶磁器 (1)



第64図 近世～近代の陶磁器 (2)



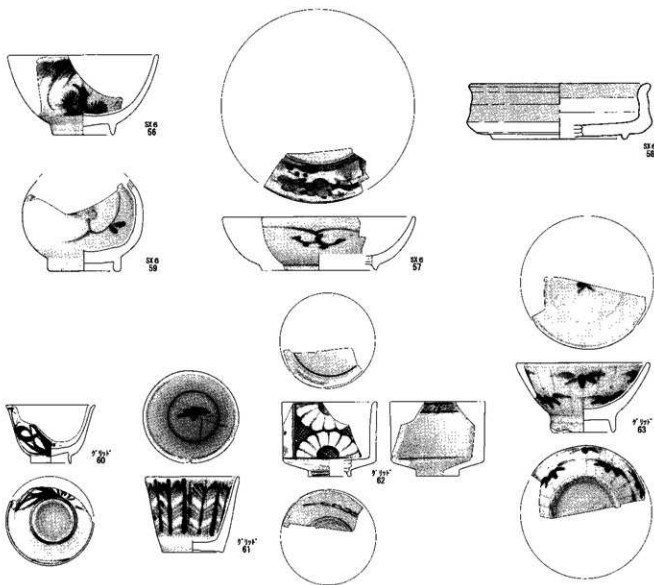
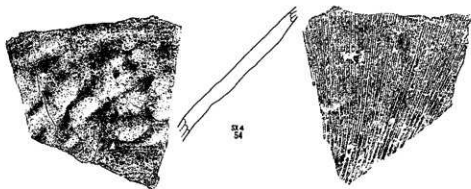
第65図 近世～近代の陶磁器 (3)



施釉範囲

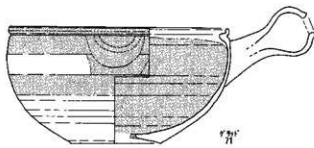
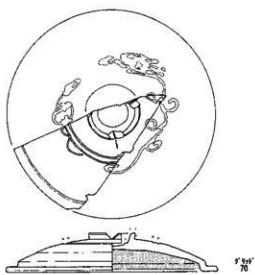
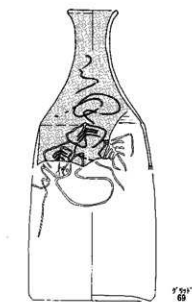
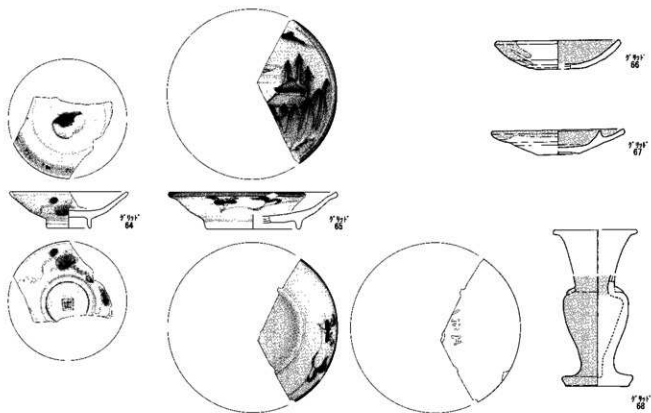
第66図 近世～近代の陶磁器 (4)

0 10cm



施繪範圍

第67図 近世～近代の陶磁器 (5)



陶器断片

第68図 近世～近代の陶磁器 (6)



第12表 第2号井戸跡出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
63	1	磁器	猪口	7.0	6.0	4.6	—	桶形、蛇の目凹形高台	矢羽 見込船	
	2	磁器	猪口	(7.4)	6.1	(5.0)	—	桶形、蛇の目凹形高台	矢羽 見込船	
	3	陶器	小碗	(7.4)	5.5	3.2	—	半筒形	菊花繫ぎ 見込五弁花	肥前系
	4	磁器	小碗	(6.8)	(5.3)		—	半筒形	菊花散し・市松、見込菊花文・四方摩文	肥前系
	5	磁器	小碗	(8.0)	(6.4)		—	筒丸形		
	6	磁器	中碗	11.0	5.7	4.6	—	端反形	草花 見込寿	
	7	磁器	中碗	(11.2)	6.0	(4.8)	—	端反形	山水 見込花?	
	8	磁器	中碗	(10.2)	5.7	(3.4)	—	端反形	山水	
	9	磁器	中碗	(12.1)	5.4	(4.4)	—	丸形	菊花散し	
	10	磁器	小鉢	(11.6)	5.1	5.8	—	甸干形八角形	草花格子 武田菱紐	肥前系
	11	磁器	小鉢	(13.0)	7.6	(5.8)	—	甸干形八角形	菖蒲 蝶?	
	12	磁器	小皿	(9.9)	2.3	4.5	—	丸形、底中	花、笹	
	13	陶器	五寸皿	13.6	3.1	7.4	—	端反形 蛇の目高台	草花 見込舟	瀬戸・美濃焼
64	14	磁器	仏花瓶		(14.3)	7.1	(9.0)		山水	
	15	陶器	德利		(14.8)	7.1	10.6	ペコかん形 肩袋		瀬戸・美濃系 胴部押圧 鉄軸
	16	陶器	德利		(15.6)	6.1	8.7	高田德利形		瀬戸・美濃系 灰釉
	17	陶器	灯明皿	9.2	2.1	4.0	—	平形 無高台		見込環状痕 鉄軸
	18	陶器	灯明皿	(9.3)	2.4	3.8	—	平形 無高台		見込環状痕 鉄軸
	19	陶器	灯明受皿	(5.4)	1.6	(3.1)	(8.3)	油溝半月状		瀬戸・美濃系 灰釉
	20	陶器	灯明受皿	6.2	1.9	3.6	9.2	油溝切立状		外面環状痕 鉄軸
	21	陶器	灯明受皿	(7.6)	2.0	(4.2)	(10.5)	油溝切立状		外面環状痕 鉄軸
	22	陶器	五寸皿	13.5	3.4	7.1	—	底中		瀬戸・美濃系 灰釉
	23	陶器	煎猪口	(8.1)	(2.6)	(4.3)	(8.7)	三瓣接統		鉄軸 把手欠損
	24	陶器	煎猪口	6.4	2.5	4.9	(6.6)	環繞み		飯能焼
	25	陶器	土瓶	8.1	(4.8)		(11.8)	丸形	白色釉 自然釉	注口欠損
	26	陶器	德利		(3.0)	6.7	(7.9)			飯能焼
	27	陶器	土瓶	9.0	(10.6)		18.4	胴部箱形		飯能焼 穿孔1個残存
	28	陶器	控鉢	(15.5)	9.3	7.3	17.0	把手無し		飯能焼
	29	陶器	鍋蓋	15.9	3.4	3.9	—	山笠形	龍文	飯能焼 緑褐色釉 擠みV字切り込み3ヶ所 上面飛焼
65	30	陶器	行平鍋	16.3	8.9	7.2	(16.5)	丸形無足		飯能焼 外面上半飛焼 注口・把手欠損
	31	陶器	行平鍋	16.5	8.55	(6.8)	(16.7)	丸形無足		飯能焼 外面上半飛焼 注口・把手欠損
	32	陶器	行平鍋	(14.4)	8.3	(5.9)	(14.8)	丸形無足		飯能焼 外面上半飛焼 注口・把手欠損

第13表 第22号土壌出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
66	33	陶器	皿	(13.2)	2.7	(6.7)	—	端反形		見込環状痕
	34	土器	かわらけ	(11.2)	(2.3)	—	—			
	35	土器	火鉢	(16.5)	6.3	(10.3)		三足		内面底部被熱 手捏
	36	土器	焙烙	(33.8)	4.7	(31.6)	—	有耳 底浅め		
	37	土器	焙烙	(33.5)	5.8	(32.0)	—	有耳 底浅め		耳欠損
	38	炆器	播鉢	—	—	—	—	口縁無裝飾		瀬戸・美濃系

第14表 第30号土壌出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
66	39	磁器	紅猪口	5.0	1.8	1.8	—	平形	鳥?	

第15表 第32号土壌出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
66	40	土器	かわらけ	(10.9)	3.6	5.9	—			

第16表 第1号竪穴状遺構出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
66	41	磁器	小坏	6.2	4.2	2.5	—	端反形	草花	高台内面施釉なし
	42	磁器	中碗	9.7	5.5	4.0	—	丸形	草花	肥前系
	43	炆器	播鉢	—	—	—	—	口縁無裝飾		

第17表 第2号竪穴状遺構出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
66	44	陶器	小坏	(6.2)	4.2	3.0	—	端反形		高台内面施釉なし
	45	陶器	天目碗		(2.4)	4.6	—			鉄釉
	46	ミニチュア	徳利	1.5	(2.9)		(2.7)			飯事道具 緑釉

第18表 第3号竪穴状遺構出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
66	47	磁器	五寸皿	13.6	4.1	5.0	—	底狭		肥前系 青緑釉 見込環状に施釉無し
	48	陶器	小皿	(12.0)	2.6	6.6	—	底広		瀬戸・美濃系 灰釉
	49	磁器	中碗	(11.2)	(5.3)		—	丸形		瀬戸系
	50	炆器	播鉢	—	—	—	—	口縁無裝飾		何來焼

第19表 第4号竪穴状遺構出土陶磁器観察表

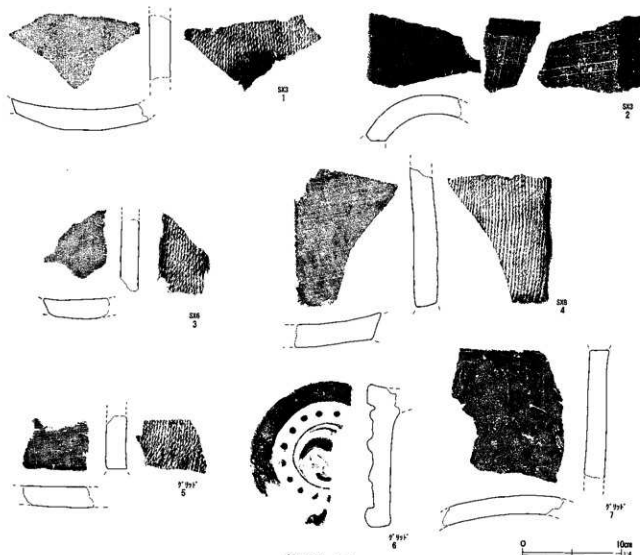
図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
66	51	陶器	五寸皿	(14.0)	3.3	(7.4)	—	底中		瀬戸・美濃系? 灰釉 見込環状痕
	52	磁器	小皿	(13.0)	3.2	4.6	—	底狭		肥前系 青緑釉 見込 環状に施釉無し 高台 砂付着
	53	陶器	大皿		<7.4>	(12.1)				唐津焼
67	54	炷器	播鉢	—	—	—	—	口縁無装飾		信楽焼
	55	土器	焔烙	(35.0)	5.4	(31.0)		有耳 底浅 め		

第20表 第6号竪穴状遺構出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
67	56	陶器	中碗	(11.5)	6.1	4.6	—	丸形	山水?	
	57	磁器	五寸皿	(14.8)	4.1	(8.7)	—	底中	唐草 梅 (寫真印)	
	58	陶器	香炉	(13.7)	4.2	(10.0)	(14.0)	無三足 玉縁腰板形		瀬戸・美濃系? 鉄釉
	59	磁器	花瓶	<7.0>	5.6	9.3			花	

第21表 グリッド出土陶磁器観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				形状	文様	備考
				a	b	c	d			
67	60	磁器	小杯	(6.8)	4.4	(3.1)	—	端反形	芦筒	
	61	磁器	猪口	(7.2)	5.8	(4.7)	—	桶形 蛇の目凹形 高台	矢羽 見込舟	肥前系 底部施釉無し
	62	磁器	小碗	(7.3)	5.7	(3.3)	—	半筒形	菊花散し・市松 四方様文	肥前系
	63	磁器	中碗	(10.2)	5.3	(4.8)	—	広束形	花 見込蝶?	
68	64	磁器	小皿	(9.1)	2.8	(3.3)	—	底狭	雷文 見込虫? 銘変形文字	肥前系?
	65	磁器	小皿	(13.0)	2.9	(7.2)	—	平形	草花 板間山水	欠け口に接ぎ跡 外面 底部に文字?
	66	陶器	灯明皿	(9.5)	2.1	(3.5)	—			瀬戸・美濃系 内外山環状痕
	67	陶器	灯明受皿	(6.4)	1.8	(3.2)	(10.0)			瀬戸・美濃系 灰釉 見込環状痕
	68	陶器	仏花瓶		<8.3>	4.7	4.9	瓶子丸耳形		耳貼付 鉄釉
	69	陶器	徳利	3.8	<12.0>		(9.1)	長形 胴張	瓢箪	飯能焼
	70	陶器	鍋蓋	(16.0)	2.9	(3.5)	—	山笠形	龍文	縮みV字切り込み3ヶ 所 上面飛越
	71	陶器	行平鍋	16.4	8.7	6.8	23.3	丸形無足		飯能焼 把手外面も施 釉 外面上半環状
	72	ミニチュア	羽釜	(5.7)	3.65	3.5	7.0			煤付着



第69図 瓦

第22表 第3号竪穴状遺構出土瓦観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				胎土色	備考
				a	b	c	d		
65	1	瓦	平瓦	残存長7.5	残存幅13.9	残存厚2.1		褐色	小礫含 / 凸面編目痕 凹面布目痕 / 古代
	2	瓦	丸瓦	残存長10.0	残存幅7.5	残存厚2.1		灰色	小礫少量含 / 凸面長軸方向にへう雨り調整 凹面へうラナデ調整 / 近世

第23表 第6号竪穴状遺構出土瓦観察表

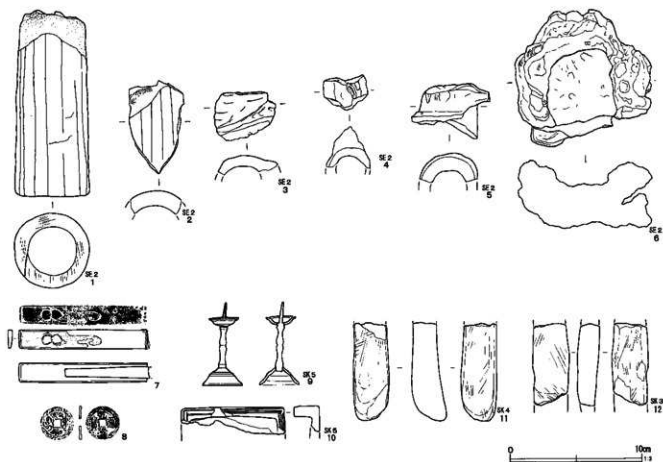
図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				胎土色	備考
				a	b	c	d		
65	3	瓦	平瓦	残存長7.7	残存幅6.5	残存厚2.0		褐色	小礫含 / 凸面編目痕 凹面布目痕 / 古代

第24表 第8号竪穴状遺構出土瓦観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				胎土色	備考
				a	b	c	d		
65	4	瓦	平瓦	残存長13.7	残存幅11.2	残存厚2.6		灰白色	やや砂質 / 凸面編目痕 凹面布目痕 / 古代

第25表 グリッド出土瓦観察表

図版	番号	材質	器種	法量 (cm)				胎土色	備考
				a	b	c	d		
65	5	瓦	平瓦	残存長5.3	残存幅7.3	残存厚2.1		赤褐色	小礫含 / 凸面編目痕 凹面布目痕 / 古代
	6	瓦	軒丸瓦	瓦当面径: 14.3		瓦当厚: 2.7		灰色	瓦当面現存1/2 連珠: 巴右巻き 推定16珠 周縁有り / 接合部剥き目 / 近世
	7	瓦	平瓦	残存長13.2	残存幅11.8	残存厚1.9		灰褐色	凹面にへうラナデ調整が施されている / 近世



第70図 その他の遺物

第26表 編羽口観察表

図版	番号	出土地点	残存長さ	幅	口径	重量	備考
70	1	第2号井戸跡	14.1	5.6	3.7	298.2	
	2	第2号井戸跡	7.1	3.9	3.7	32.9	
	3	第2号井戸跡	2.3	3.6	2.4	16.7	先端部
	4	第2号井戸跡	3.3	4.3	2.5	19.8	先端部
	5	第2号井戸跡	4.2	5.1	2.5	30.1	先端部

第27表 鉄洋観察表

図版	番号	出土地点	長径	短径	厚さ	重量	備考
70	6	第2号井戸跡	10.3	10.3	5.2	395.9	輪形洋

第28表 金属製品観察表

図版	番号	出土地点	器種	法量 (cm)	重量 (g)	材質	備考
70	7	I-2グリッド	小柄	残存長9.9・幅1.4・厚0.3	27.1	鋼(合金)	魚子地に瓢箪文
	9	SK5	燭台	高6.2・口径2.3・台径3.0	17.8	鋼(合金)	

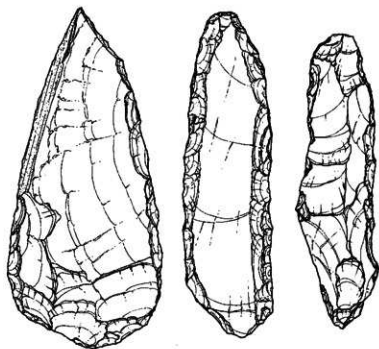
第29表 古銭観察表

図版	番号	出土地点	種別	法量 (cm)	量目 (g)	備考
70	8	F-2グリッド		銭径2.5・内径0.5・銭厚0.15	3.5	乾隆通寶 清 初鑄1736年

第30表 石製品観察表

図版	番号	出土地点	器種	残存長	幅	厚	重量	備考
70	11	SX3	礪石	6.2	2.8	1.5	39.1	両端欠損
	12	SX4	礪石	7.4	2.8	2.6	70.4	一端欠損
	10	SX5	硯	2.2	7.9	1.9	37.2	海部分のみ残存

V 旭原遺跡の調査



1. 旧石器時代

(1) 概要

旭原遺跡では、縄文時代の遺構調査中、覆土中から旧石器時代の遺物が出土したため、調査区に7箇所の試掘坑を設け、ローム層中の調査を実施した。

試掘坑には、西から順に試掘坑1～7(TP1～TP7)の番号を付して調査を行った。その結果、試掘坑5・6から石器が出土した。特に試掘坑5は、立川ロームⅢ層相当層から石器がまとめて出土した。このため、第1号石器集中と呼称し、報告する。

(2) 基本土層

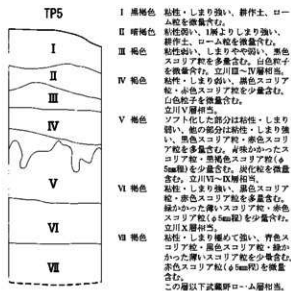
各試掘坑の土層断面観察の結果、ローム層は、概ね西から東へ緩やかに傾斜していた。調査区最西端と、最東端との比高差は、約80cmであった。層序は、基本的には立川ローム層に対比できる層位であった。

基本土層及び土層説明は、試掘坑5南壁の観察結果を代表させ、第71図に示した。

なお、各試掘坑の位置図、及び土層図は第72図に示した。

(3) 出土状況 (第72～74図)

旧石器時代に帰属すると考えられる遺物は、主と



第71図 旭原遺跡ローム層基本層序

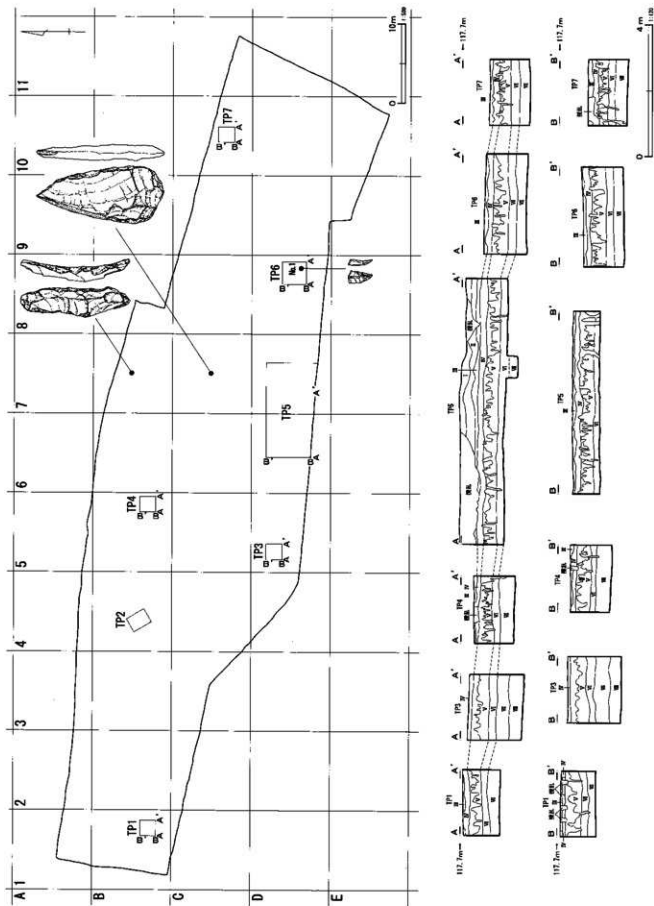
して試掘坑5でまとめて検出されたが、数点が他の地点からも出土している(第72図)。試掘坑以外から出土しているものはローム層からは遊離しているが形態などから旧石器時代の遺物と認定した。発掘区は、全体が細い尾根上の平坦面にあたり、前述のようにわずかながら、西から東へ傾斜が認められるものの、発掘区内において大きな地形的な変化は認められない。したがって、石器はB・C・D-7・8グリッドに集中しているが、そこに地形的な要因を見いだすことはできない。

試掘坑ではほとんどの部分をVI層からVII、一部VII層まで調査しており、VII層以下が武蔵野ローム層に相当すると考えられる。石器は試掘坑5、6で検出されているのみである。そのうち試掘坑6では、黒曜石の剥片が1点検出されたにとどまり、石器がまとめて分布したのは試掘坑5のみである。出土層位はいずれもⅢ層中である。試掘坑5から出土した石器に、同地点のローム層より上層から出土した石器を加え、第1号石器集中とし、以下に報告する。

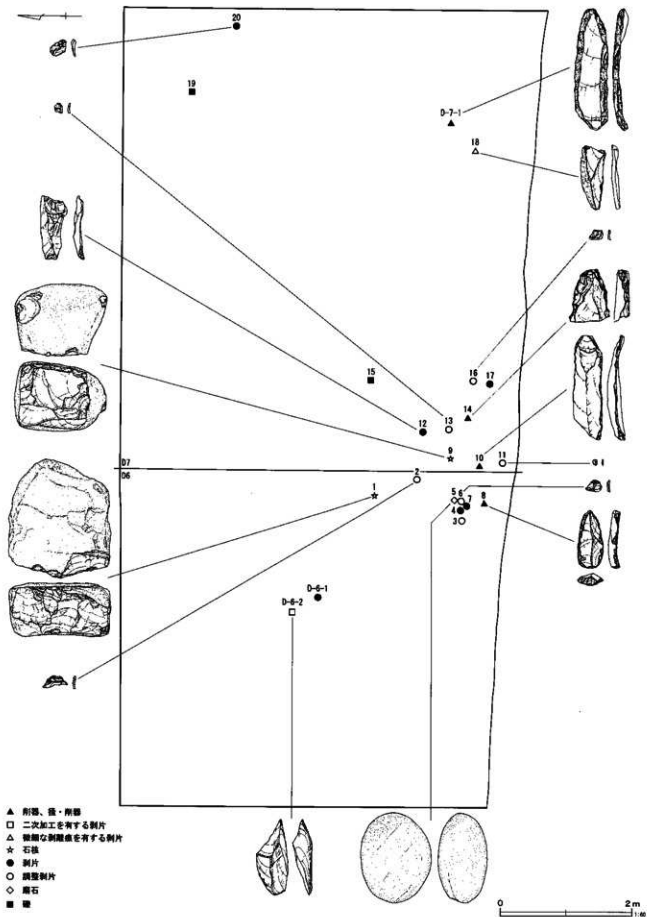
(4) 第1号石器集中 (第73・74図)

D-6、D-7グリッドに設定された試掘坑5からは18点の石器と2点の礫がⅢ層中から検出された。また、同地点のローム層よりも上位の層からも形態などから試掘坑出土の石器と同時期に帰属する可能性が高い石器3点が出土しており、これらをあわせ、第1号石器集中と呼称する。これら23点の遺物は、南北9.0m×東西5.0mほどの範囲で出土しているが、中心はD-6グリッドとD-7グリッドの境界付近の試掘坑の中央東壁寄りで、2.2m×1.2mほどにまとまる。

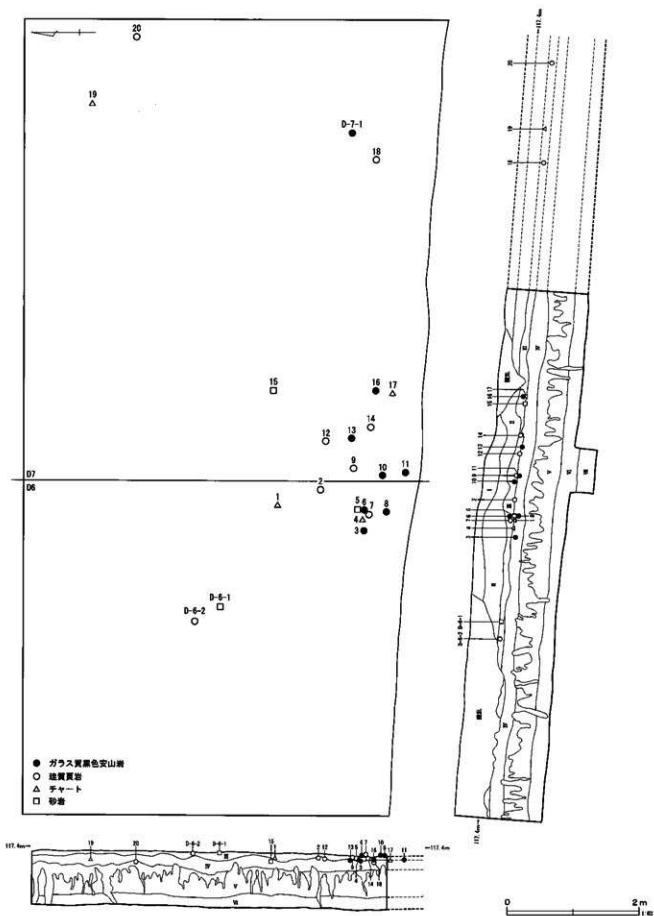
器種別に見ると、削器5点、掻・削器1点のほかは定型的な石器はない。縦長剥片を素材とした、厚手の削器や掻器が特徴的である。また、接合はしないものの、同一母岩と判断され、その形態から、削器や掻器の調整剥片と考えられる小剥片が出土している。自然礫を素材とした石核も2点出土している。



第72図 旧石器時代調査区及び深度図



第73図 第1号石器集中器種別分布図



第74図 第1号石器集中石材別分布図

が、これに対応するような剥片類は出土していない。ほかに磨石が1点出土している。

石材別には、ガラス質黒色安山岩9点、珩質頁岩8点、チャート2点、砂岩2点である。ガラス質黒色安山岩と、珩質頁岩はいずれも風化が激しく、表面が剥落しているものも見うけられる。

器種、石材ともに際立った分布上の偏りは見受けられない。

(4) 出土遺物 (第75～78図、第31表)

ここでは旧石器時代に帰属すると考えられる石器を一括して報告する。

第75図1は、大型の削器である。ガラス質黒色安山岩の縦長剥片の打面部を右側面に配し、横位に用いている。外形は尖頭状の木葉形を呈すが、機能刃部は左右両側縁、特に右側縁と考えられる。両側縁とも、上半部に節理による平坦面を残している。二次加工は一部にやや面的なものも見られるが不統一である。C-7グリッドから出土している。

2は、ガラス質黒色安山岩製の削器である。単打面を残した、厚手のやや湾曲した縦長剥片の右側縁に急角度の加工を施しており、左側縁には不連続な剥離が観察できる。剥片の末端部は、両側縁の加工により尖らせている。B-7グリッドの表土から出土している。

3も、ガラス質黒色安山岩製の削器である。やはりやや湾曲する縦長剥片の板状の剥片を使用している。二次加工は角度の高い大きめの剥離が、末端の一部を除くほぼ全周に及んでいる。D-7グリッドのローム層よりも上位の層から出土しているが出土位置は第1号石器集中に近く、第1号石器集中に含めた。

第76図4は、ガラス質黒色安山岩製の削器である。2、3と同様に両側縁のほぼ平行する縦長剥片を用い、右側縁および、左側縁の上半部に二次加工を施している。やや薄手の素材を用いているためか、二次加工は細かく浅い。表面の風化が著しく、これは第75図2・3も同様である。

5は、珩質頁岩製の二次加工を有する剥片である。右半部が大きく折れた厚手の剥片を使用しており、それにより生じた尖頭状の先端部の右側縁とその裏面の右側縁、および、下半部の左側縁に簡単な二次加工が施されている。D-6グリッドのローム層よりも上位の層から出土しているが出土位置は第1号石器集中に近く、第1号石器集中に含めた。

6は、ガラス質黒色安山岩製の掻・削器である。縦長剥片の末端部に急角度の縞状剥離を連続して施し、弧状の搔器刃部を作出している。側縁部は左側縁に急角度の連続する剥離が施され、削器の刃部を作出しており、右側縁部にも不連続ながら全体にやや浅めの剥離が観察できる。第1号石器集中から出土している。

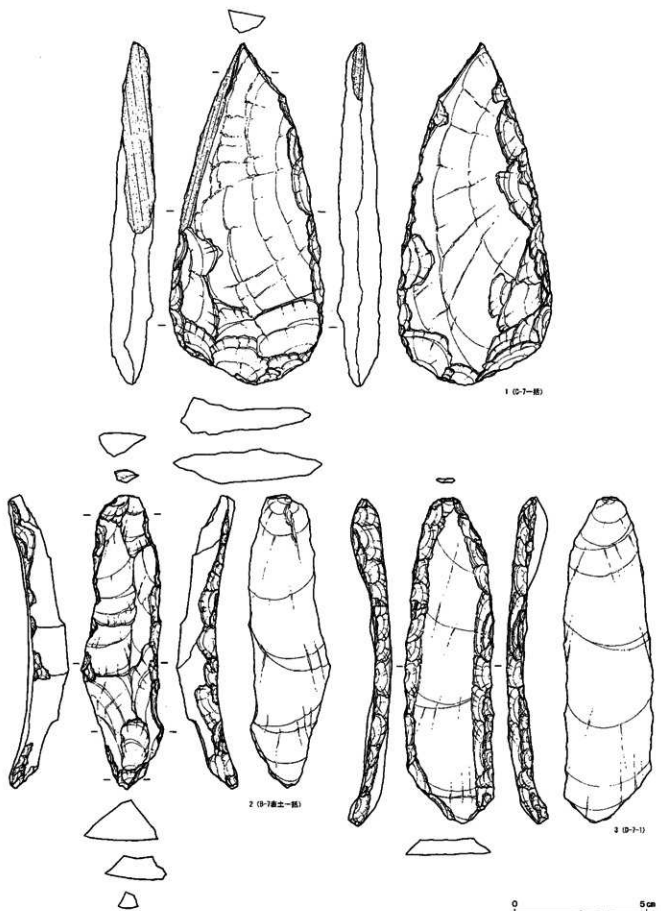
7は、珩質頁岩製の削器で下半部を欠損している。単打面を残す厚手の縦長剥片の両側縁に二次加工が施されている。二次加工の角度が高く粗いため、刃部は鋸歯状を呈している。第1号石器集中から出土している。

8は、珩質頁岩製の微細な剥離痕を有する剥片である。左半部に自然面を残した剥片の右側縁下半部に微細な剥離痕が観察できる。第1号石器集中から出土している。

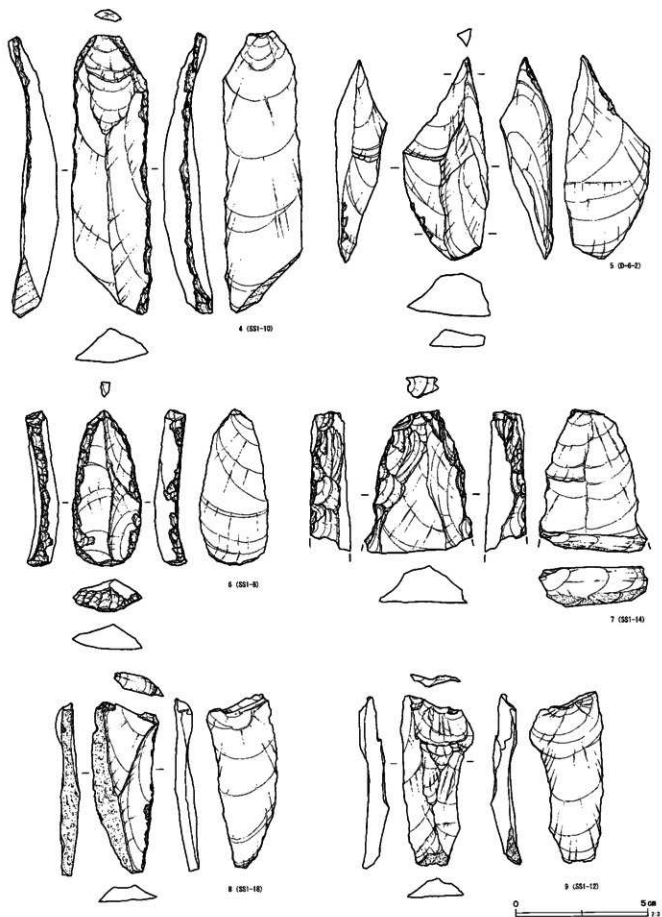
9は、珩質頁岩製の縦長剥片で、大きさを含め、単打面を有し両側縁がほぼ平行しながら末端に収束するなど、形態的な属性は8に類似している。母岩は異なる。第1号石器集中から出土している。

第77図10は珩質頁岩製の石核である。立方体の表面が非常に滑らかな転石を素材としている。平坦な自然面を打面とし、礫の一端を割り取るように作業面を作出している。打面は上面から右側面を用いており、打点を横に移動し、やや幅広い剥片を剥離している。この石核に対応する剥片は本遺跡では検出されていない。第1号石器集中から出土している。

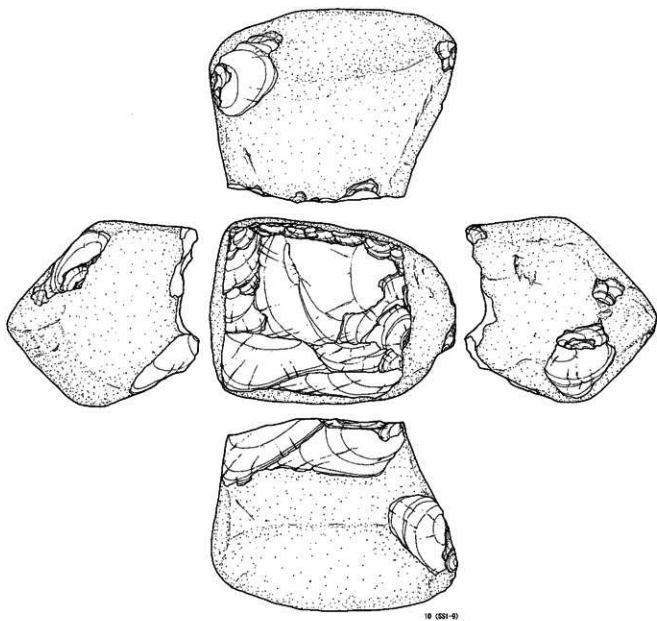
11～16はいずれも第1号石器集中から出土した小型の剥片である。そのうち11～14は出土している搔器や削器に同一母岩とみられるものがあり、刃部の



第75图 旧石器时代出土石器 (1)



第76图 旧石器时代出土石器(2)



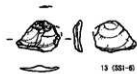
10 (SS1-9)



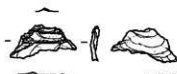
11 (SS1-13)



12 (SS1-11)



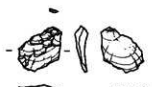
13 (SS1-6)



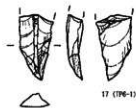
14 (SS1-2)



15 (SS1-16)



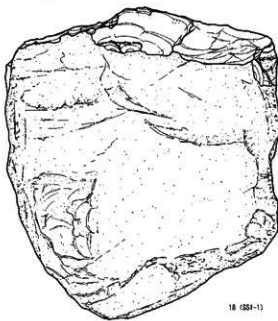
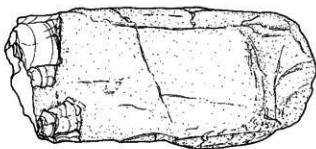
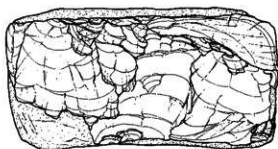
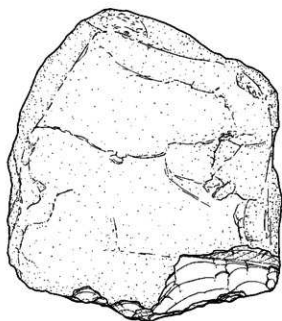
16 (SS1-20)



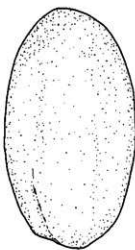
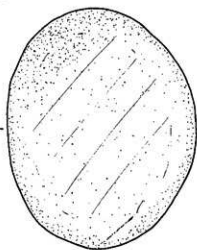
17 (TP6-1)



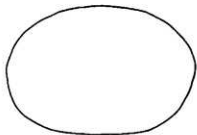
第77图 旧石器时代出土石器 (3)



18 (SS1-1)



19 (SS1-5)



第78图 旧石器时代出土石器(4)

調整剥片と考えられる。

11は第76図4に類似するガラス質黒色安山岩製で、削器の刃部調整剥片と考えられる。

12・13は第76図6に類似する、ガラス質黒色安山岩製で、掻器の刃部調整剥片と考えられる。

14は第76図7に類似する珧質頁岩製で削器の刃部調整剥片と考えられる。

15・16は類似する母岩に帰属する石器が出土していないが、剥片の形態的な属性は11～14に等しく、特に15に関しては、やはり削器や掻器の刃部調整剥片の可能性が高い。15はガラス質黒色安山岩、16は珧質頁岩製である。

その他、第1号石器集中からは、風化により遺存状態が悪いため図示していないが、B-7表土・括の削器の刃部調整剥片と考えられる剥片も1点出土している (SS1-3)。

17は透明感の強い黒曜石製の小型縦長剥片で上半部を欠損している。試掘坑6の中央やや南東から出土している (第72図)。

第78図18はチャート製の石核である。板状の転石

を素材としており、平坦面を打面とし、礫の一端を割り取るように作業面を作出している。打面は上面と底面に設定されており、180度の打面転位が行われ、作業面の長軸いっぱいやや幅広な剥片を剥離している。第1号石器集中から出土している。

19は磨石で、細粒の砂岩を用いている。やや扁平な円礫のほぼすべてが研磨され、平滑な状態となっている。特に擦痕などは観察できない。第1号石器集中部から出土している。

このように、本遺跡からは削器、掻器といった加工具および、石核が検出されているが、石器製作の痕跡は見られない。その他、製品類と同じ石材の刃部の調整剥片と考えられる小型の剥片が検出されていることから、刃部の再生は行われていたことがわかる。出土した石器の帰属時期に関しては、Ⅲ層から出土していること、両側縁が並行するような縦長剥片を素材とし、全周に剥離をめぐるせたものなど、多様な大型の削器を主体とすることなどから、旧石器時代の最終末期から縄文時代草創期に編年上位置づけることが妥当と考える。

第31表 旧石器時代石器計測表

出土地点	取上げNo	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	検出番号
SS1	1	石核	Ch	53.0	103.0	118.0	1096.9		78図-18
SS1	2	剥片	SSh	13.0	25.0	3.0	0.6	SS1-14の調整剥片?	77図-14
SS1	3	剥片	GAn	(10.2)	(18.0)	2.0	0.2	B-7G表土・括の調整剥片?	
SS1	4	剥片	Ch	21.2	(16.0)	7.0	2.4		
SS1	5	磨石	Sa	120.2	96.0	66.0	1082.2		78図-19
SS1	6	剥片	GAn	12.0	(16.0)	3.0	0.3	SS1-8の調整剥片?	77図-13
SS1	7	剥片	SSh	51.2	48.5	9.0	16.3		
SS1	8	掻・削器	GAn	58.5	26.0	12.0	15.7		76図-6
SS1	9	石核	SSh	70.1	92.5	72.0	636.4		77図-10
SS1	10	削器	GAn	106.0	30.0	18.0	41.2		76図-4
SS1	11	剥片	GAn	(6.0)	4.2	1.3	0.0未満	SS1-8の調整剥片?	77図-12
SS1	12	剥片	SSh	64.5	27.5	12.0	11.9		76図-9
SS1	13	剥片	GAn	10.0	8.0	2.0	0.2	SS1-10の調整剥片? 風化著しい	77図-11
SS1	14	削器	SSh	(53.5)	(41.0)	(15.0)	32.9		76図-7
SS1	15	礫片	Sa				6.2		
SS1	16	剥片	GAn	10.0	14.0	2.3	0.3	調整剥片?	77図-15
SS1	17	剥片	Ch	13.0	32.0	9.5	6.5		
SS1	18	Uフレック	SSh	65.0	26.0	8.0	12.2		76図-8
SS1	19	礫片	Ch				9.0		
SS1	20	剥片	SSh	17.5	16.5	5.0	0.7		77図-16
SS1 (D-6G)	1	剥片	Sa	59.0	83.0	12.0	65.6		
SS1 (D-6G)	2	Rフレック	SSh	76.0	32.0	19.0	34.5		76図-5
SS1 (D-7G)	1	削器	GAn	124.5	34.5	13.0	60.0		75図-3
C-7G		一括	削器	129.0	58.0	7.0	122.6		75図-1
B-7G	表土一括	削器	GAn	110.5	31.0	22.0	50.9		75図-2
TP6	1	剥片	Ob	(24.5)	(12.8)	5.8	1.3		77図-17

() は残存値を示す

2. 住居跡

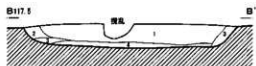
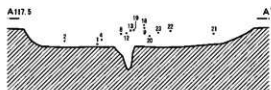
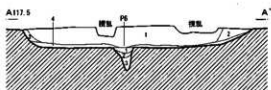
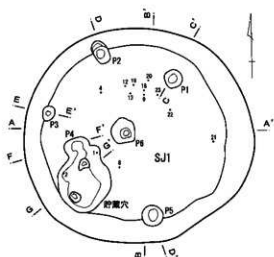
第1号住居跡 (第79図)

B-6グリッドで検出した。平面の形態は円形で、直径3.5mと小型の竪穴住居跡である。深さは、0.35mであった。

床面は概ね平坦で、一部硬化した部分が認められ

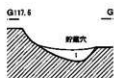
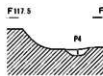
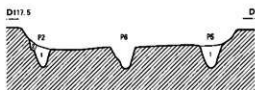
た。壁面は垂直に立ち上がらず、緩やかであった。

床面には、壁際に柱穴と思われるピットを5基検出した(P1~5)。また、中央部でピットを検出したが(P6)、最上層の覆土は、他のピットより多くの焼土・炭化物を含んでおり、炉跡の可能性がある。

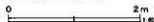


第1号住居跡

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を少量含む、炭化粒を微量含む。
- 2 褐色土 焼土粒・黒色土粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を少量含む、焼土粒を微量含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む、炭化粒を微量含む。



- P1 黒褐色土 ロームブロック(φ1cm程度)を含む。
- P2 暗褐色土 ローム粒・黒色土粒を多量含む。
2 黒褐色土 ロームブロック(φ1.5cm程度)・ローム粒を多量含む。
焼土粒を微量含む。
- P3 黒褐色土 ローム粒を多量含む。
- P4 黒褐色土 ローム粒を多量含む、黒色土粒・ロームブロック(φ2cm程度)を少量含む。
- P5 暗褐色土 ローム粒を多量含む、ロームブロック(φ1cm程度)を少量含む、焼土粒を微量含む。
- P6 1 黒色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒・炭化物(φ1cm程度)を少量含む。
2 褐色土 ロームブロック(φ1.5cm程度)を多量含む。
3 暗褐色土 ローム粒を多量含む、ローム粒(φ0.5cm程度)を少量含む。
- 貯蔵穴 1 黒褐色土 ローム粒を多量含む、焼土粒・炭化粒・ロームブロック(φ2cm程度)を少量含む、黒色土粒を微量含む。



第79図 第1号住居跡

南西部床面からは、貯蔵穴と思われる長径1.0m、単軸0.8m、深さ0.2mの土壇を検出した。P4と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

第1号住居跡出土遺物 (第80図)

1・2は角押文の土器である。1は補修孔が穿たれた口縁部である。口縁直下に2条の角押列がめぐり、角押文による鋸歯状のモチーフが充填される。

3は口縁部の破片で、ペン先状工具による三角押文がみられる。口唇断面はやや肥厚して内削ぎ状を呈する。口縁部の文様帯は隆帯と角押文・三角押文によって三角形の区画を形成するものと思われる。

4は大きく外反する胴部破片である。長時間にわたって激しい高熱にさらされつづけたものと思われる。表面が溶解・発泡して海綿状となり、また、青灰色の還元状態を示している。破片状態で炉の底面に敷かれるなどの特殊な使い方をされたものであろうか。表面の風化ははなはだしく、器形についても本来の状態から変形している可能性がある。器面は

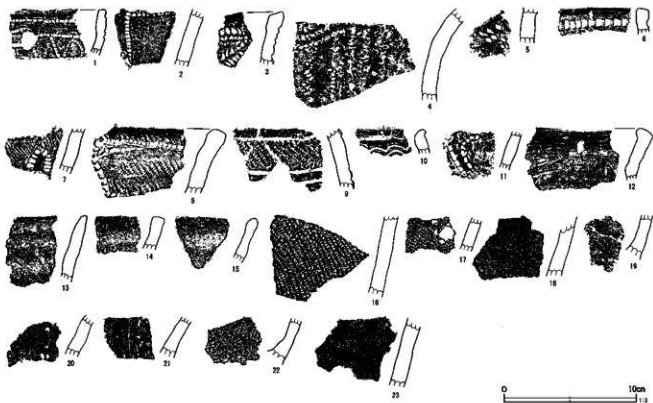
隆帯によって縦位に分割され、内部に角押文・三角押文が充填される。

6は口唇直下に角押文が巡る口縁部である。7・8は地文縄文上に角押文がみられる土器である。7は末端丸みを帯びた隆帯に沿って角押文が施文される。8は口縁部で、口縁直下に単列の角押によって区画が形成される。

9は胴張りの小型深鉢で、直上にくびれを持って口縁外反するものと考えられる。地文縄文で、横位の隆帯+沈線によって器面が分帯される。

10・11は阿玉台式である。10は半截竹管によるコンパス文が巡る口縁部、11は隆帯+角押文による斜位の区画がみられる。

12~15は無文の口縁部である。16・17は縄文のみ施文される胴部破片である。18以下には無文の破片を一括した。胴下半部に属する可能性が高く、22は底部直上の破片である。



第80図 第1号住居跡出土土器

第2号住居跡 (第81図)

C・D-8グリッドで検出した。平面の形態は方形で、規模は長軸3.8m、単軸3.46m、深さ0.2mで、主軸方位はN-101°-Eであった。

床面は概ね平坦であったが、貼床は検出できなかった。カマド周辺がやや硬化していたものの、全体的に軟質の床面であった。

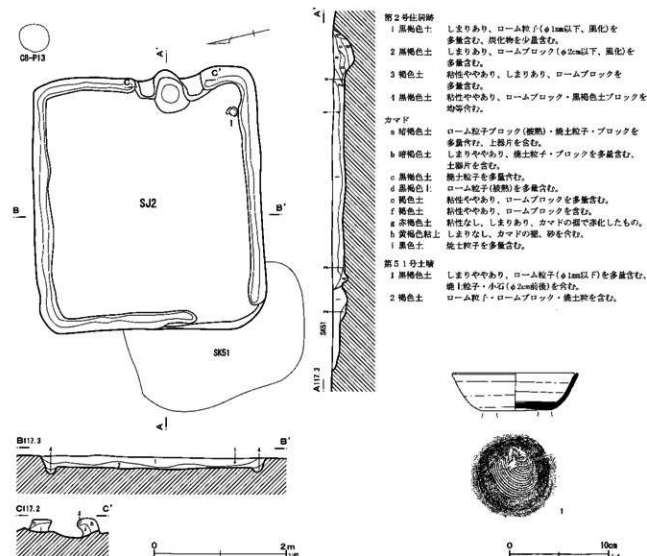
カマドは、東壁に設けられていた。先端部は住居の外側に僅かに張り出していた。底面は床面より深く掘り込まれていた。袖は、両袖とも僅かに残存していた。断面の観察では、黒色土と、砂を含む黄褐色粘土が貼り付けられていた。

色粘土が貼り付けられていた。

壁溝は、南西角が切れている以外は、全周していた。角部が入り口であった可能性がある。

遺物は、覆土及びカマドから土師器・須恵器片が出土したが、図示可能な遺物は須恵器環1点のみであった。1は須恵器環で、床面からやや浮いた状態で出土した。底部の調整は糸切後、周辺部を手持ちヘラケズリしていた。内面底部に爪先の痕跡がある。

胎土は、小粒の石英・チャート等を僅かに含む。焼成は良好だが、軟質である。胎土及び器形の特徴から、8世紀後半の東金子産と考えられる。



第81図 第2号住居跡

第32表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	12.6	3.8	6.9	石英・チャート	良	灰	70%	糸切後周辺手持ちヘラケズリ 前内出?

3. 土壌

第1号土壌 (第82図)

A・B-1グリッドで検出した。平面の形状は長楕円形で、長軸4.28m、短軸1.23m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-35°-Wであった。

遺構は、SK8と重複し、SK8を壊していた。

遺物は、縄文後期と思われる土器片が数点出土したが、図示可能な遺物は第87図1のみであった。

第2号土壌 (第82図)

B・C-1グリッドで検出した。平面の形状は不整形で、長軸1.58m、短軸0.73m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-84°-Wであった。

遺物は、出土しなかったが、覆土の状態から、縄文時代に属していたと考えられる。

第3号土壌 (第82図)

A-1グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸2.03m、短軸1.27m、深さ0.77mであった。主軸方位はN-12°-Eであった。

断面の形状は箱型で底面は平坦であった。底面中央部と壁際に径0.15m前後、深さ0.28m前後の小穴を検出した。特に底面中央部は4基の小穴が等間隔で並んでいた。

SK3は、その形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。遺物は、出土しなかった。

第4号土壌 (第82図)

B-2グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸0.78m、短軸0.72m、深さ0.3mであった。

遺物は出土しなかったが、覆土の状態から、縄文時代に属していたと考えられる。

第5号土壌 (第82図)

A・B-2グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.2m、短軸1.04m、深さ0.35mであった。

遺物は、出土しなかったが、覆土の状態から、縄文時代に属していたと考えられる。

第6号土壌 (第82図)

C-2グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸0.92m、短軸0.84m、深さ0.21mであった。

遺物は出土しなかったが、覆土の状態から、縄文時代に属していたと考えられる。

第7号土壌 (第82図)

A-2グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.03m、短軸0.78m、深さ0.41mであった。

遺物は出土しなかったが、覆土の状態から、縄文時代に属していたと考えられる。

第8号土壌 (第82図)

B-1グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸0.78m、短軸0.72m、深さ0.3mであった。主軸方位はN-90°-Eであった。

遺構は、SK1と重複し、SK1に壊されていた。

遺物は出土しなかったが、覆土と遺構の重複関係から、縄文時代に属していたと考えられる。

第9号土壌 (第82・88図)

C-2グリッドで検出した。平面の形状は楕円形と考えられるが、遺構の南側は、調査区外へ延びていたため、全体の規模は明らかにできなかった。長軸1.43mが確認でき、短軸1.47m、深さ0.34mであった。主軸方位はN-5°-Wであった。

遺物は、覆土から石鏝が1点出土した。

遺構は、縄文時代に属していたと考えられる。

第10号土壌 (第82図)

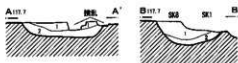
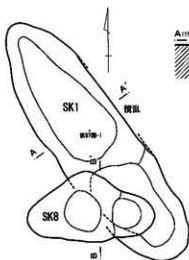
B・C-2グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸3.42m、短軸1.61m、深さ0.34mであった。主軸方位はN-86°-Eであった。

遺物は、奈良・平安時代の土器器壘片が数点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第11号土壌 (第83図)

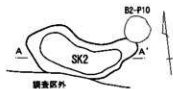
B-3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸2.89m、短軸1.6m、深さ1.20mであった。主軸方位はN-0°-Eであった。

横断面の形状はV字型に近いが、底部は幅0.4m前後の平坦面となっていた。底面中央部には、長さ0.75m、幅0.35mの浅い土壇状の落ち込みを検出した。また、底面中央部の西壁側に、小穴を検出した。箱型

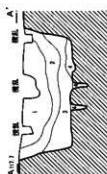
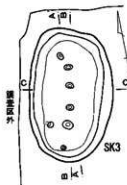


- 第1号土塚
 1 黒色土 ローム粒を少量含む、焼土粒を微量含む。
 2 黒褐色土 ローム粒を多量含む、黒色土粒子・ロームブロック(φ1cm程)を少量含む。

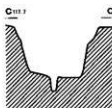
- 第8号土塚
 1 黒褐色土 ローム粒を多量含む、ロームブロック(φ1cm程)・黒色土粒子を少量含む。
 2 褐色土 ロームブロック(φ2cm程)を多量含む。



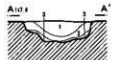
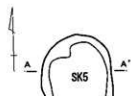
- 第2号土塚
 1 黒色土 ローム粒・焼土粒を微量含む。
 2 黒褐色土 ロームブロック(φ2cm程)を多量含む。



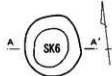
- 第3号土塚
 1 黒色土 ローム粒を少量含む、焼土粒を微量含む。
 2 黒色土 ローム粒を多量含む、焼土粒を微量含む。
 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ3cm程)を多量含む。
 4 黒色土 しまりやや強い、ローム粒を少量含む。



- 第4号土塚
 1 黒褐色土 ローム粒・ローム粒を少量含む。
 2 褐色土 黒色土ブロック(φ2cm程)を少量含む。

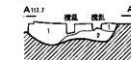
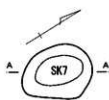


- 第5号土塚
 1 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を少量含む。
 2 黒褐色土 焼土粒を微量含む。
 3 黒褐色土 ロームブロック(φ2cm程)を多量含む。



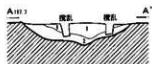
- 第6号土塚
 1 黒褐色土 ローム粒・炭化粒・ロームブロック(φ0.5cm程)を少量含む、焼土粒を微量含む。
 2 褐色土 しまりやや強い、黒色土ブロック(φ2cm程)を少量含む。

- 第7号土塚
 1 黒色土 焼土粒・ローム粒を少量含む。
 2 黒褐色土 ローム粒を多量含む。
 3 褐色土 黒色土ブロック(φ1.5cm程)を少量含む。

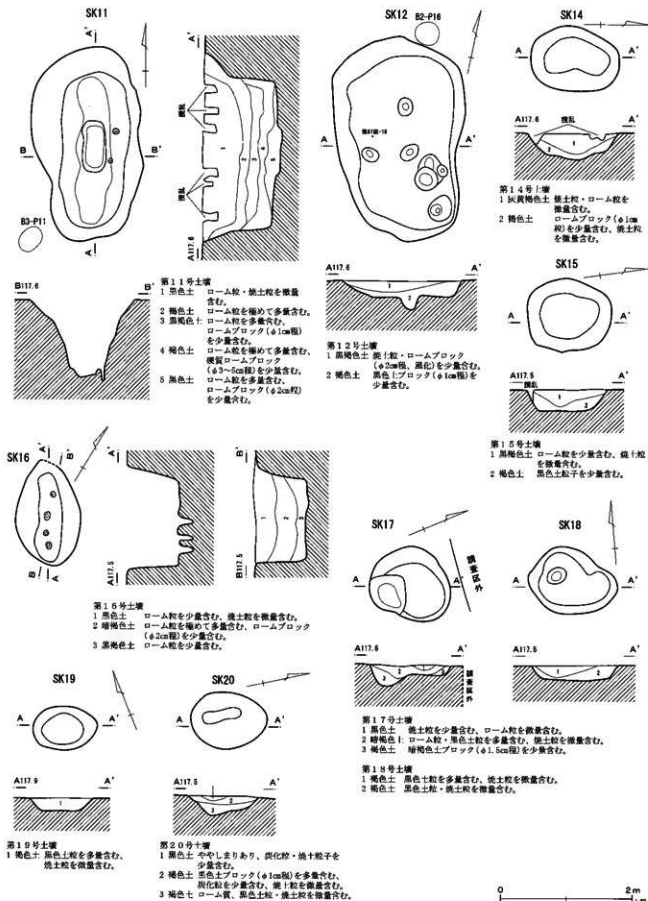


- 第9号土塚
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、焼土粒を微量含む。
 2 褐色土 黒色土ブロック(φ1cm程)を少量含む。

- 第10号土塚
 1 黒色土 焼土粒を少量含む、ローム粒を微量含む。
 2 褐色土 黒色土ブロック(φ2cm程)・黒色土を少量含む。



第82図 土塚 (1)



第83図 土壌 (2)

で底面は平坦であった。

SK3は、その形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。遺物は出土しなかった。

第12号土壌 (第83・88図)

C-2・3グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸3.07m、短軸1.98m、深さ0.43mであった。主軸方位はN-10°-Wであった。

底面は概ね平坦であった。7基の小穴を検出した。断面の観察では、小穴覆土は、SK12覆土2層がそのまま堆積していたことから、遺構に伴っていたと考えられる。小穴の配列には規則性は認められず、重複も認められることから、全てが同時に存在していたとは考えにくい。

遺物は、打製石斧が1点出土した。

第14号土壌 (第83図)

C-4グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.32m、短軸0.97m、深さ0.4mであった。主軸方位はN-0°-Eであった。

覆土は、焼土粒・ローム粒子を含む灰黄褐色土で、他の縄文時代に属すると考えられる、黒色土・黒褐色土を主体とする土壌とは覆土の状態が異なっていた。しかし、遺物が出土せず、遺構の時期については明らかにできなかった。

第15号土壌 (第83図)

C-4グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.27m、短軸1.10m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-8°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第16号土壌 (第83図)

B-4グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.55m、短軸0.97m、深さ0.82mであった。主軸方位はN-33°-Wであった。

断面の形状は箱型で底面は平坦であった。底面中央部に径0.15m前後、深さ0.22m前後の小穴を4基検出した。

SK16は、その形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。遺物は出土しなかった。

第17号土壌 (第83図)

A-4グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.21m、短軸1.12m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-20°-Eであった。

南側底面に土壌状の落ち込みを検出した。断面の観察では、層序に断絶はなかった。

第18号土壌 (第83図)

B-3・4グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.32m、短軸1.00m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-84°-Wであった。

底面は平坦で、西側に小穴を検出した。

遺物は出土しなかった。

第19号土壌 (第83図)

B-3・4グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸0.98m、短軸0.67m、深さ0.20mであった。主軸方位はN-70°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第20号土壌 (第83図)

C-5グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.16m、短軸0.86m、深さ0.29mであった。主軸方位はN-15°-Eであった。

第21号土壌 (第84図)

C-4グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.32m、短軸0.92m、深さ0.35mであった。主軸方位はN-33°-Eであった。

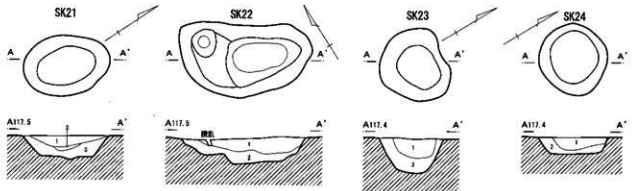
第22号土壌 (第84・87図)

C-5グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.89m、短軸1.11m、深さ0.37mであった。主軸方位はN-58°-Wであった。東側約1/3はテラス状となっていた。

遺物は、縄文土器片が数点出土したが、図示可能な遺物は、第87図2の深鉢片1点のみであった。

第23号土壌 (第84図)

B・C-5グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.13m、短軸1.00m、深さ0.52mであった。遺物は出土しなかった。

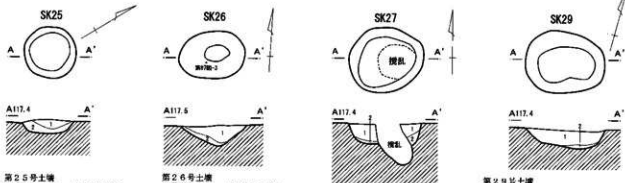


第21号土坑
 1 黒褐色土 ローム粒を多量含む、
 焼土粒を少量含む。
 2 黒色土 ローム粒を少量含む
 3 褐色土 硬質ロームブロック
 (φ3cm程)を多量含む。

第22号土坑
 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
 2 褐色土 ローム質、黒色土ブロック
 (φ1.5cm程)を少量含む。

第23号土坑
 1 黒色土 ローム粒を多量含む。
 焼土粒を微量含む。
 2 褐色土 ローム粒を多量含む、
 炭化粒を少量含む、
 炭化粒を微量含む。

第24号土坑
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、黒色
 土粒を微量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒を多量含む、ロ
 ムブロック(φ3cm程)を少
 量含む。(自然堆積か?)

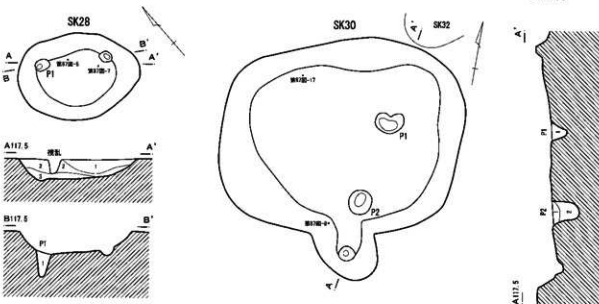


第25号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒を多量含む。
 2 褐色土 ローム質、黒色土粒を
 少量含む。

第26号土坑
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、
 焼土粒を微量含む。
 2 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程)
 ・黒色土粒を少量含む。

第27号土坑
 1 黒褐色土 ローム粒を多量含む、
 黒色土粒を少量含む。
 2 褐色土 黒色土粒を少量含む。

第29号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒・黒色土粒を少量
 含む、焼土粒を微量含む。
 2 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程)
 を多量含む、ローム粒を
 少量含む。



第28号土坑
 1 黒色土 焼土粒を多量含む、ローム粒を
 少量含む。
 2 黒褐色土 ローム粒、黒色土粒を少量含む、
 焼土粒を微量含む。
 3 褐色土 焼土粒を微量含む。
 P1
 1 黒色土 ローム粒を多量含む、ローム
 ブロック(φ1cm程)を少量含む。

第30号土坑
 P1
 1 褐色土 黒色土粒・硬質ロームブロック(φ3cm程)を少量含む。
 P2
 1 褐色土 黒色土粒を多量含む、硬質ロームブロック(φ1cm程)を少量含む。
 2 褐色土 黒色土粒・硬質ロームブロック(φ2cm程)を少量含む。



第84図 土坑 (3)

第24号土壌 (第84図)

B-5グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.11m、短軸1.02m、深さ0.23mであった。

遺物は、縄文土器片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第25号土壌 (第84図)

B-5グリッドで検出した。平面の形状は円形で、直径0.78m、深さ0.21mであった。

遺物は出土しなかった。

第26号土壌 (第84・87図)

C-5グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.00m、短軸0.72m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-90°-Eであった。

断面の形状は、摺鉢状であった。

遺物は、縄文土器片が数点出土したが、図示可能な遺物は、第87図3の加曾利EⅢ式の深鉢口縁部片1点のみであった。

第27号土壌 (第84・87図)

B-5グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.12m、短軸0.98m、深さ0.31mであった。遺構中央部は、木の根により攪乱されていた。

遺物は、覆土中から、縄文土器片が出土したが、図示可能な遺物は、第87図4の五領ヶ台式土器の深鉢片1点である。

第28号土壌 (第84・87図)

C-5グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.85m、短軸1.31m、深さ0.35mであった。主軸方位はN-50°-Wであった。

底面は概ね平坦で、底面北側に小穴を2基検出した。小穴は、径0.15~0.20m、深さ0.35mで、陥し穴底面の小穴と形状が似ていた。

遺物は、縄文土器片が数点出土したが、図示可能な遺物は、第87図5~7の加曾利E式の深鉢片3点のみであった。

第29号土壌 (第84図)

B-5グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.19m、短軸0.95m、深さ0.26mであった。

遺物は出土しなかった。

第30号土壌 (第84・87図)

C-5・6グリッドで検出した。平面の形状は丸みを持った方で、長軸3.64m、短軸3.62m、深さ0.52mであった。主軸方位はN-10°-Wであった。

南壁中央部に、最大幅0.9mの張り出しを有する。一見すると、柄鏡型住居跡を想定させる形状だが、底面は北から南に傾斜し、炉も検出できなかったことから、土壌とした。底面にピットを2基検出したが、配列に規則性はなく、柱穴とは考えにくい。

遺物は、縄文土器片が数点出土した。図示可能な遺物は、第87図8の深鉢底部片と、第87図17の石鏃1点のみであった。

第31号土壌 (第85図)

C-6グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸3.18m、短軸1.80m、深さ0.48mであった。主軸方位はN-0°-Eであった。

底面は北側やや低く窪んでいた。

遺物は出土しなかったが、覆土の状態から、縄文時代に属していたと考えられる。

第32号土壌 (第85・87図)

B・C-6グリッドで検出した。SK30北側に接して検出したが、重複関係は明らかにできなかった。平面の形状は円形で、規模は長軸1.15m、短軸1.06m、深さ0.35mであった。

遺物は、第87図9の深鉢片が出土した。

第33号土壌 (第85図)

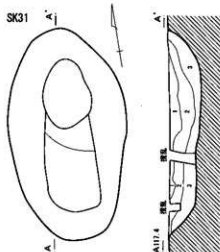
B-6グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸2.58m、短軸1.80m、深さ0.17mであった。主軸方位はN-10°-Wであった。

遺物は、縄文土器片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

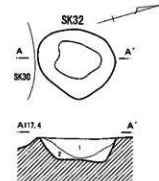
第34号土壌 (第85図)

C-7グリッドで検出した。SK35と重複し、断面の観察では、SK35を壊していた。

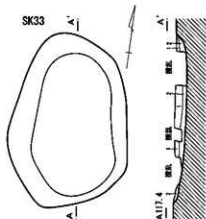
平面の形状は楕円形で、長軸1.24m、短軸1.06m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-60°-Eであっ



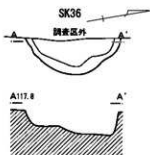
- 第31号土壇
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、焼土粒を微量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒を多量含む、黒色土粒・ロームブロック(φ1cm程度)を少量含む、焼土粒を微量含む。
 3 褐色土 黒色土粒を少量含む、焼土粒を微量含む。



- 第32号土壇
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、焼土粒・黒色土粒を微量含む。
 2 褐色土 黒色粒・ロームブロック(φ1.5cm程度)を少量含む。

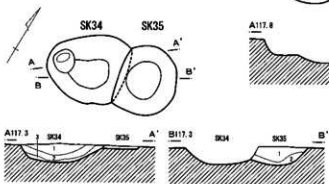


- 第33号土壇
 1 黒褐色土 ローム粒・軟質ロームブロック(φ2cm程度)を少量含む、しまり強い、褐色粒・硬質ロームブロック(φ1cm程度)を少量含む。



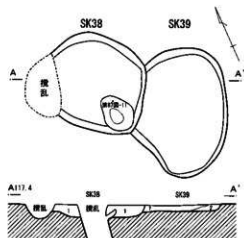
調査区外

A117.4



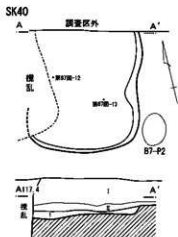
- 第34号土壇
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、焼土粒を微量含む。
 2 黒褐色土 しまりや強い、ローム粒・ロームブロック(φ1.5cm程度)を多量含む。
 3 褐色土 ローム粒・黒色土粒を多量含む。

- 第35号土壇
 1 暗褐色土 ローム粒・黒色土粒を多量含む。
 2 褐色土 ローム粒・黒色土粒・ロームブロック(φ1.5cm程度)を多量含む。

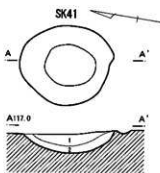


- 第38号土壇
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、炭化粒・焼土粒を微量含む。

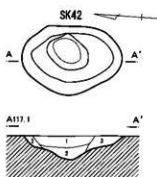
- 第39号土壇
 1 暗褐色土 ロームブロック(φ1.5cm程度)を多量含む、ローム粒を少量含む、焼土粒を微量含む。
 2 褐色土 黒色ブロック(φ0.5cm程度)を多量含む、黒色土粒を少量含む、ローム粒を微量含む。



- 第40号土壇
 1 褐色土 しまりや強い、黒色土粒を少量含む。



- 第41号土壇
 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む、黒色土粒を微量含む。
 2 褐色土 ローム粒を多量含む、ロームブロック(φ2cm程度)を少量含む、黒色土粒を微量含む。



- 第42号土壇
 1 黒褐色土 しまり強い、ローム粒を少量含む、黒色土粒・焼土粒を微量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒を多量含む、ロームブロック(φ1cm程度)を少量含む。
 3 褐色土 ローム粒・黒色土粒を少量含む。

0 2m

第85図 土壇 (4)

た。

第35号土壌 (第85図)

C-7グリッドで検出した。SK34と重複し、SK34に壊されていた。平面の形状は円形で、長軸1.07m、短軸0.88m、深さ0.30mであった。

遺物は出土しなかった。

第36号土壌 (第85図)

B-1グリッドで検出した。平面の形状は円形と思われるが、西半分が調査区外へ伸びていたため、全体の形状を明らかにできなかった。規模は径1.40m、深さ0.35mであった。

遺物は出土しなかった。

第38号土壌 (第85・87図)

B-6グリッドで検出した。SK39と重複し、SK39を壊していた。平面の形状は楕円形で、長軸1.82m、短軸1.46m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-65°-Wであった。

遺物は、覆土中から深鉢片2点が出土した(第87図10・11)。

第39号土壌 (第85図)

B-6グリッドで検出した。SK38と重複し、SK38に壊されていた。平面の形状は楕円形で、長軸1.96m、短軸1.18m、深さ0.10mであった。主軸方位はN-20°-Eであった。

遺物は、縄文土器片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第40号土壌 (第85・87図)

B-7グリッドで検出した。平面の形状は長方形と考えられるが、北側が調査区外へ延び、西側は後世の攪乱によって壊されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は長軸1.80m、短軸1.60mが残存し、深さは0.13mであった。主軸方位はN-15°-Eであった。当初、竪穴住居跡を想定したが、遺構が極めて浅く、炉も検出できなかったため、判断できなかった。

遺物は、縄文土器片が数点出土したが、図示可能な遺物は、第87図12~14の中期の深鉢片3点のみで

あった。

第41号土壌 (第85図)

D-9グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.40m、短軸1.20m、深さ0.30mであった。

遺物は出土しなかった。

第42号土壌 (第85図)

D-9グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.50m、短軸1.05m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-5°-Wであった。

遺物は出土しなかった。

第43号土壌 (第86図)

D-10グリッドで検出した。SK44と重複し、SK44を壊していた。平面の形状は円形で、長軸0.84m、短軸0.62m、深さ0.34mであった。

遺物は出土しなかった。

第44号土壌 (第86図)

D-10グリッドで検出した。SK43と重複し、SK43に壊されていた。平面の形状は円形で、径0.72m、深さ0.20mであった。

遺物は出土しなかった。

第45号土壌 (第86図)

E-9グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸0.80m、短軸0.67m、深さ0.36mであった。

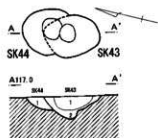
遺物は、縄文土器の小片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第46号土壌 (第86・87図)

D-9グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸0.63m、短軸0.53m、深さ0.20mであった。

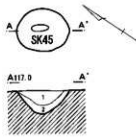
土壌中央部に深鉢が正位で埋設されていた(第87図15)。土器の周囲には、ロームブロック・ローム粒子を多量に含む褐色土が充填されていた(2層)。深鉢内部はローム粒子・炭化物を少量含む黒褐色土が流入していた(1層)。遺物は、この深鉢の他には出土しなかった。

SK46は、土器の出土状況から埋設遺構と考えられる。しかし、周辺に、関連する遺構の存在が認められないことから、単独埋設と判断した。



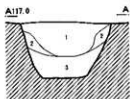
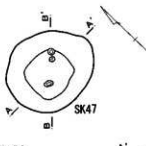
第43号土壇
1 黒色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
2 暗褐色土 ロームブロック(φ10cm程度)
・ローム粒を少量含む。

第44号土壇
1 暗褐色土 炭化の多いロームブロック(φ1.5cm程度)を多量含む。

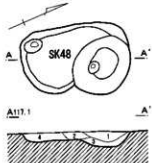


第45号土壇
1 黒色土 ローム粒・ロームブロック(φ1cm程度)を少量含む。
・焼土粒・黒色土粒を微量含む。

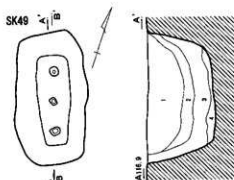
2 褐色土 炭化土粒を少量含む。
・硬質ロームブロック(φ1.5cm程度)を微量含む。



第47号土壇
1 黒色土 しまりや強い、ローム粒・焼土粒を微量含む。焼土ブロック(φ0.5cm程度)を極めて微量含む。
2 黒褐色土 しまりやや強い、ローム粒・焼土粒を少量含む。炭化粒を微量含む。
3 暗褐色土 ローム粒を極めて多量含む。ロームブロック(φ2cm程度)を少量含む。焼土粒を微量含む。



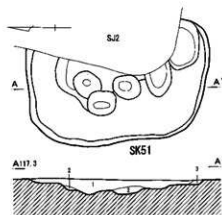
第48号土壇
1 黒色土 ローム粒を少量含む。焼土粒を微量含む。
2 暗褐色土 ロームブロック(φ2cm程度)を多量含む。
3 暗褐色土 しまりやや強い、ローム粒を少量含む。
4 褐色土 ローム粒を多量含む。焼土粒・炭化粒を微量含む。



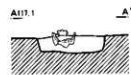
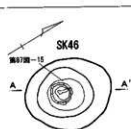
第49号土壇
1 黒色土 しまりやや強い、ローム粒・焼土粒を微量含む。
2 暗褐色土 ローム粒を多量含む。ロームブロック(φ1.5cm程度)を少量含む。焼土粒を微量含む。
3 暗褐色土 ローム粒を極めて多量含む。ロームブロック(φ3cm程度)を少量含む。
4 褐色土 ローム粒を少量含む。ロームブロック(φ1cm程度)を微量含む。



第50号土壇
1 黒褐色土 ローム粒を少量含む。焼土粒・炭化粒を微量含む。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2cm程度)を多量含む。焼土粒を微量含む。



第51号土壇
1 黒褐色土 しまりやや強い、ローム粒(φ1mm以下)を多量含む。
・焼土粒・小石(φ2cm程度)を含む。
2 褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒を含む。
3 褐色土 粗性やや強い、ローム粒・ロームブロックを多量含む。



第46号土壇
1 暗褐色土 ローム粒・炭化粒を少量含む。
2 褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1cm程度)を多量含む。炭化粒を少量含む。黒色土ブロック(φ0.5cm程度)を微量含む。



第86図 土壇 (5)

第47号土壌 (第86図)

D-9グリッドで検出した。平面の形状は円形で、長軸1.36m、短軸1.19m、深さ0.83mであった。

断面の形状は箱型で、底面は平坦であった。底面中央部に径0.10m前後、深さ0.26m前後の小穴を検出した。

SK47は、その形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第48号土壌 (第86図)

D-9グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸1.64m、短軸1.10m、深さ0.23mであった。主軸方位はN-23°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第49号土壌 (第86図)

D-10グリッドで検出した。平面の形状は長方形で、長軸1.99m、短軸1.08m、深さ1.03mであった。主軸方位はN-20°-Wであった。

断面の形状は箱型で、底面は、外側がやや高くなっていて、概ね平坦な面を有していた。

底面には、径0.10m~0.13m前後、深さ0.28m前後の小穴3基が長軸方向に等間隔に並んでいた。

SK49は、その形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第50号土壌 (第86図)

D-11グリッドで検出した。平面の形状は楕円形で、長軸0.78m、短軸0.49m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-0°-Eであった。

遺物は出土しなかった。

第51号土壌 (第86図)

C・D-8グリッドで検出した。遺構の北東部分は、SJ2によって壊されていた。

平面の形状は長方形で、長軸2.63m、短軸1.68m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-0°-Eであった。

底面は凹凸があるものの概ね平坦であった。底面に径0.3m~0.4m前後の小穴が連続して検出されたが、覆土は、SK51から連続して堆積しており、重複

とは考えにくい。

遺物は、縄文土器片が数点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

土壌出土遺物

縄文土器 (第87図)

1は第1号土壌から出土した。無文の胴部で、後期の可能性がある。

2は第22号土壌から出土したもので、地文縄文上に両側になぞりを加えた扁平な隆帯が垂下する。中期中葉~後葉のものと考えられる。

3は第26号土壌から出土したもので、加曾利EⅢ式の波状口縁深鉢口縁部である。4は第27号土壌から出土したもので、中期初頭の五領ヶ台式土器である。

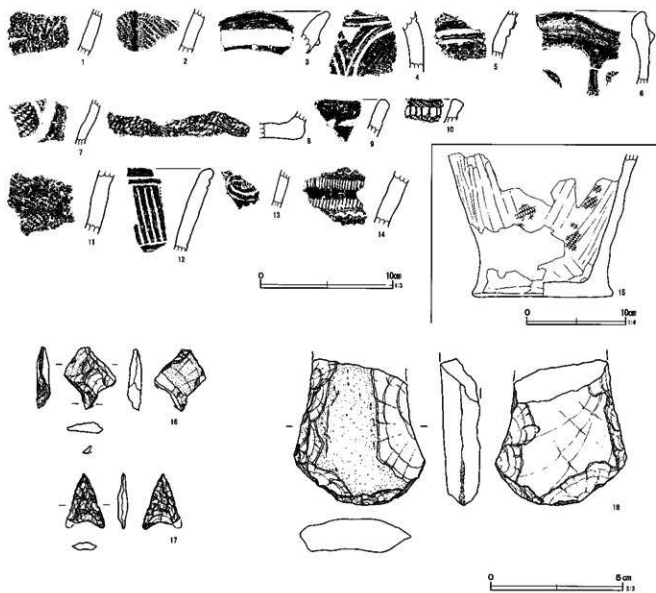
5~7は第28号土壌から出土したもので、頸部と胴部を区画する横位の隆帯であり、加曾利E式のキャリパー形深鉢と考えられる。6は3と同様の加曾利EⅢ式である。7は加曾利EⅢ~EⅣ式である。微隆起線によるU字型の区画が描かれ、縄文が充填される。

8は第30号土壌から出土した。縄文のみ施文される底部で、勝坂式ないし加曾利E式前半の土器である。

9・10・11は第32号・40号土壌から出土した。9は地文縄文上に角押文の巡る口縁部、10は縄文のみ施文される胴部破片である。

12~14は第40号土壌から出土したものである。12は口縁下に平行沈線による幅広の区画を描き、縦位の集合沈線を充填する。13は半截竹管状工具による楕円形の区画がみられる。14は横位のキャクピラ文がみられる。

15は第46号土壌からの出土で、唯一図化し得た個体である。裾張りの底部から胴下半部にかけて残存する。全面に縦位のなで調整が徹底され、ごく部分的に地文縄文が残されている。



第87図 土壌出土遺物

石器 (第87図)

16は、第9号土壌の覆土から出土した。石錐で黒曜石製である。右側縁下半部を欠損しており、機能部の右半部も欠損している。しかし、残存する左半部の加工の形態などから、錐状の尖端部を作出したものと判断した。残存する大きさは、19.0mm×23.0mm×5.0mm、1.6gである。

17は、第30号土壌の、北壁立ち上がり付近の覆土から出土した。チャート製の石鎌で、凹基であるが、左の脚部を欠損している。加工は表裏全面に施されているがやや粗く、側縁部は細かな鋸歯状を呈している。20.5mm×14.5mm×4.0mm、0.7g。

18は、第12号土壌の西壁立ち上がり付近の覆土から出土した。打製石斧で砂岩製である。上半部を欠損しているが、側縁部は緩やかに湾曲しており、ややいびつながら、楔形を呈すものと考えられる。加工はあまり丁寧にはどこきされては無く、表面には大きく自然面を残している。刃部の右半部には潰れ痕が観察できる。残存する大きさは、55.0mm×50.2mm×15.5mm、50.2gである。

4. 集石土壌

旭原遺跡では、縄文時代のもと考えられる集石土壌が2基検出されている。2基は調査区の東半部に東西に30mほど離れて位置している。土壌の中からは被熱の痕跡がある礫が検出されており、第2号土壌からは縄文時代後期の土器片が出土している。以下、第1号・第2号集石土壌として報告する。

第1号集石土壌（第88図、第33表）

D-8グリッドで検出された。土壌の大きさは、長軸1.19m、短軸1.0m、深さ0.27mで、長楕円形の摺鉢状を呈する。主軸方向はN-40°Eである。

土壌の確認面はローム層のⅢ層であるが、礫の検出面は若干上層であり、掘り込み面はやや上位にあると考えられる。土壌内の堆積層は1層～3層に分けられ、下位にいくにしたがって色調が明るくなる。いずれの層からも微量な炭化粒子が確認できる。

土壌内からは165点、3967.3gの礫が検出されたが、それらはすべて1層の黒褐色土層から出土している。土壌内にある程度の土層が堆積した後に礫が充填されたことになる。礫は土壌の西半部にやや偏り、薄い摺鉢状に出土している。

検出された礫に関しては、使用石材はチャートが94%と圧倒的に多い。その他には安山岩が4%、砂岩が2%含まれている。石材による大きさの差はあまりない。

1点を除き礫は破損している。特にチャートでは細かく破損している個体も多いため、平均重量が軽くなっている。接合を試みたが、5例の接合資料を得たのみで、それらも完形まで復元できなかった。

2点を除き、被熱によると考えられる赤化が認められる。ただし、被熱の度合いがあまり顕著ではないものも、そのうち28%ほど含まれる。また、破損面にも赤化状態が認められる礫も多い。

表面に煤やタール状の付着物が観察できるものは10点、6%である。

縄文土器が2点、礫に混在し出土しているが、時

期を決定するには至らなかった。

第2号集石土壌（第89図、第33表）

D-11グリッドで検出された。土壌の大きさは長軸1.93m、短軸1.74m、深さ0.49mで不整形を呈する。底面に凹内のある摺鉢状で、下位にピット状の落ち込みがある。土壌の確認面はローム層のⅢ層であるが、礫の検出面は若干上層であり、第1号集石土壌同様、掘り込み面はやや上位にあると考えられる。土壌内の堆積層は5層に分けられる。ピット状の落ち込みの中に流れ込むように土層が堆積し、同様に礫も検出できることから、一時期に形成された遺構と認識した。いずれの層にも焼土粒、炭化粒が含まれるが、特に1層には焼土粒が多量に含まれている。また、3層からは多量の炭化粒と共に1辺10cm程の炭化物が出土した。

土壌内からは361点、17529.7gの礫が検出された。多くは1層の黒褐色土から検出されているが、落ち込み部分を含む下位の層にも、やや散漫とはなるものの礫が存在し、上位層の礫と接合するものもある。

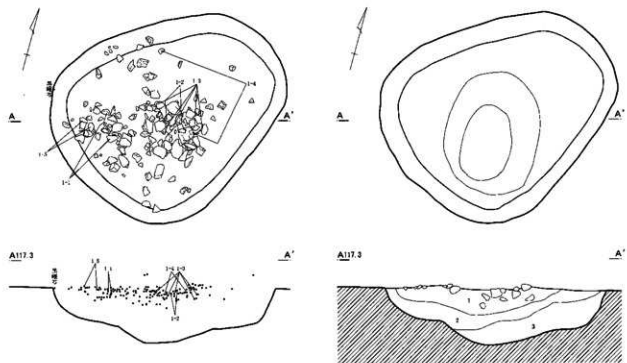
検出された礫は、使用石材はチャートが96%と圧倒的に多い。その他に安山岩が0.5%、砂岩が3.5%含まれ、砂岩がやや他の石材に比べて大きい。

第1号集石土壌に比べると、大きな礫が多く、完形礫も9点ある。しかし、全体的には細かく破損しているものが多くあり、接合を試みたが、やはり、4例の接合資料を得たのみで、それらも完形まで復元できなかった。

構成礫の96%には被熱によると考えられる赤化が認められる。ただし、その度合いがあまり顕著ではないものもそのうち20%ほど含まれる。また、破損面にも赤化状態が認められる礫も多い。

表面に煤やタール状の付着物が観察できるものは28点、8%である。

縄文時代の土器片が2点、礫に混在し、出土しており、そのうち1点は後期の所産と考えられる。



第1号集石土壌

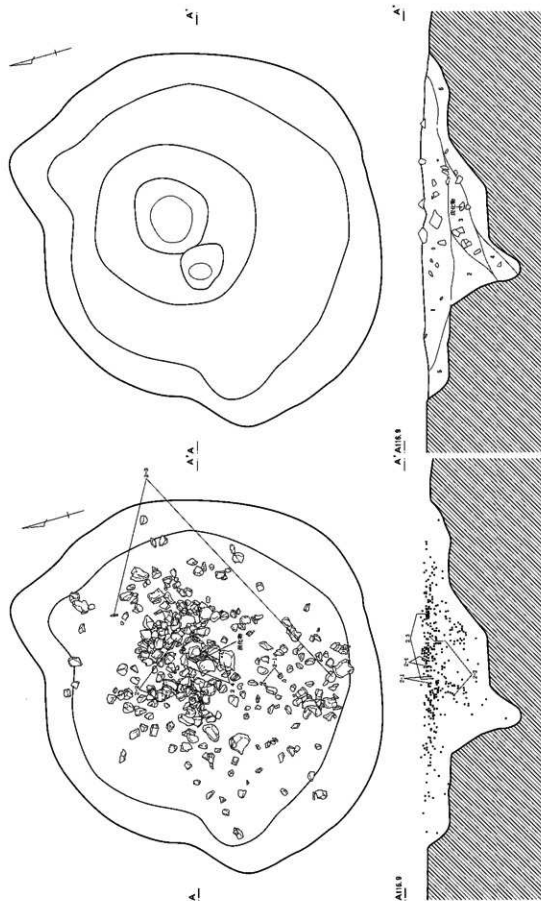
- 1 黒褐色土：しまりややあり、ローム粒(φ1mm以下)・炭化物を微量含む。
 2 暗褐色土：粘性・しまりややあり、ロームブロックを多量含む、炭化物を微量含む。
 3 褐色土：しまりややあり、ローム粒を少量含む、黒色土ブロック(φ1mm)・炭化粒子を微量含む。

0 50cm
1:25

第88図 第1号集石土壌

第33表 第1・2号集石土壌構成疎属性表

集石土壌	遺存		赤化			付着物		全体			
	完形	破損	有	有(弱)	無	有	無	数量	重量	平均重量	
第1号集石	数量	1点	164点	118点	45点	2点	10点	155点	165点	3967.3g	24.0g
	重量	10.7g	3956.6g	3048.3g	902.6g	16.4g	301.2g	3666.1g	—	—	—
	最重量	10.7g	183.4g	183.4g	91.0g	11.4g	63.6g	183.4g	—	183.4g	—
	最軽重量	10.7g	0.8g	1.5g	0.8g	5.0g	8.1g	0.8g	—	0.8g	—
	平均重量	10.7g	24.1g	25.8g	20.1g	8.2g	30.1g	23.7g	—	—	—
	チャート	1点	154点	110点	43点	2点	10点	145点	155点	3547.4g	22.9g
	安山岩	0点	6点	6点	0点	0点	0点	6点	6点	305.3g	50.9g
砂岩	0点	4点	2点	2点	0点	0点	4点	4点	114.0g	28.7g	
第2号集石	数量	9点	352点	276点	71点	14点	28点	333点	361点	17529.7g	48.6g
	重量	1359.9g	16169.8g	13193.3g	4008.2g	328.2g	2183.8g	15345.9g	—	—	—
	最重量	358.8g	703.2g	522.6g	703.2g	48.0g	358.8g	703.2g	—	703.2g	—
	最軽重量	6.9g	2.5g	2.5g	3.2g	4.4g	4.6g	2.5g	—	2.5g	—
	平均重量	151.1g	45.9g	47.8g	56.5g	23.4g	78.0g	46.1g	—	48.6g	—
	チャート	339点	8点	266点	68点	13点	26点	321点	347点	16442.2g	47.4g
	安山岩	0点	2点	1点	1点	0点	0点	2点	2点	76.3g	38.2g
砂岩	1点	11点	9点	2点	1点	2点	10点	12点	1011.2g	84.3g	



第89図 第2号集石土墳

1 埋石土 埋石を多量含む、灰化層を多量含む、埋石を多量含む、10-15cm程度の灰化層が出土。
 2 埋石土 埋石を少量含む、灰化層を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む。
 3 埋石土 埋石を少量含む、灰化層を少量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む。
 4 埋石土 埋石を少量含む、灰化層を少量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む。
 5 埋石土 埋石を少量含む、灰化層を少量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む、埋石を多量含む。

5. その他の遺構と遺物

ピット (第90図～92図)

旭原遺跡からは、その他の遺構として、多数のピットが検出された。検出総数は274基であった。

ピットの調査については、各グリッド別に、検出した順に1から番号を付し、例えばB1-P1(グリッド番号-ピット番号)というように呼称し、調査を行った。

調査中は、竪穴住居跡の柱穴、あるいは掘立柱建物跡・権列等を想定して調査を行った。しかし、検出したピットには、分布に規則性のあるものは抽出できなかった。

また、ピットからは遺物が出土しなかったため、遺構の帰属時期を明らかにできなかったものもなかった。ただし、遺構覆土については、ローム粒子・焼土粒子を含む黒色土あるいは黒褐色土を基本とする単層が殆どであったが、観察の結果、縄文時代の竪穴住居跡、土壇の覆土と共通していたことから、概ね縄文時代に属していたものと考えられる。

ピットは、概ね調査区全域にわたって検出したが、概ね次の4箇所に分布する傾向が見られた。

- ① B・C-2・3グリッド付近
- ② B・C-7・8グリッド付近
- ③ C・D-9グリッド付近
- ④ D・E-10・11グリッド付近

これらは、他の縄文時代の遺構の分布が希薄な箇所でもあり、竪穴住居跡・土壇等との関連が想定される。

また、C7グリッドのC7-P10～12・14・17・18・22・24では、ピットが円形に分布するようにも見え、竪穴住居跡の柱穴の可能性も考えられるが、炉跡・周溝等の竪穴住居跡に付属する施設が検出できなかったため、判断できなかった。

なお、各ピットの計測値は、第34表・35表のピット計測表に示した。

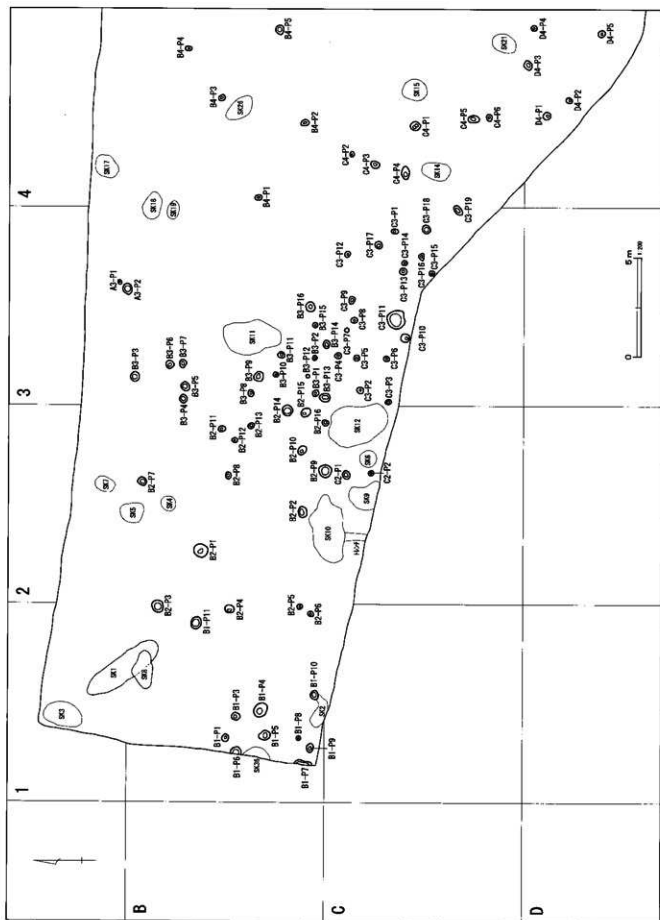
第34表 ピット計測表 (1)

番号	形態	長軸	短軸	深さ
B1 P1	円	0.47	0.42	0.21
B1 P3	円	0.44	0.41	0.21
B1 P4	円	0.65	0.65	0.31
B1 P5	楕円	0.54	0.47	0.27
B1 P6	円	0.49	0.37	0.14
B1 P7	楕円	0.86	0.23	0.12
B1 P8	円	0.23	0.20	0.06
B1 P9	楕円	0.50	0.38	0.06
B1 P10	円	0.41	0.38	0.17
B1 P11	円	0.57	0.55	0.15
B2 P1	円	0.71	0.66	0.33
B2 P2	円	0.52	0.47	0.24
B2 P3	円	0.54	0.53	0.10
B2 P4	円	0.42	0.35	0.27
B2 P5	円	0.30	0.28	0.14
B2 P6	円	0.31	0.28	0.14
B2 P7	円	0.45	0.39	0.16
B2 P8	円	0.36	0.35	0.09
B2 P9	円	0.67	0.66	0.14
B2 P10	円	0.47	0.40	0.26
B2 P11	円	0.32	0.31	0.05
B2 P12	円	0.35	0.33	0.40
B2 P13	円	0.39	0.38	0.11
B2 P14	円	0.55	0.54	0.07
B2 P15	円	0.44	0.43	0.44
B2 P16	円	0.35	0.34	0.19
C2 P1	円	0.42	0.42	0.07
C2 P2	円	0.28	0.26	0.20
A3 P1	円	0.28	0.28	0.30
A3 P2	円	0.52	0.50	0.15
B3 P1	円	0.35	0.35	0.45
B3 P2	円	0.24	0.23	0.36
B3 P3	円	0.44	0.42	0.18
B3 P4	円	0.52	0.47	0.19
B3 P5	円	0.50	0.48	0.09
B3 P6	円	0.46	0.40	0.21
B3 P7	楕円	0.42	0.34	0.06
B3 P8	楕円	0.36	0.28	0.26
B3 P9	円	0.46	0.42	0.13
B3 P10	円	0.30	0.28	0.13
B3 P11	楕円	0.39	0.29	0.08
B3 P12	円	0.18	0.18	0.30
B3 P13	楕円	0.51	0.42	0.13
B3 P14	円	0.42	0.38	0.09
B3 P15	円	0.26	0.24	0.24
B3 P16	円	0.47	0.43	0.26
C3 P1	楕円	0.32	0.25	0.35
C3 P2	円	0.30	0.30	0.31
C3 P3	円	0.30	0.27	0.08
C3 P4	円	0.38	0.35	0.09
C3 P5	円	0.29	0.28	0.17
C3 P6	円	0.34	0.29	0.11
C3 P7	楕円	0.31	0.21	0.04
C3 P8	円	0.34	0.30	0.17
C3 P9	円	0.36	0.34	0.32
C3 P10	円	0.47	0.45	0.48
C3 P11	円	0.91	0.88	0.26
C3 P12	円	0.27	0.27	0.05
C3 P13	円	0.40	0.38	0.14
C3 P14	円	0.26	0.26	0.05
C3 P15	円	0.28	0.27	0.11
C3 P16	楕円	0.36	0.30	0.07
C3 P17	円	0.34	0.34	0.07
C3 P18	円	0.45	0.44	0.07
C3 P19	楕円	0.52	0.37	0.06
B4 P1	楕円	0.34	0.26	0.18
B4 P2	楕円	0.41	0.30	0.45
B4 P3	円	0.35	0.33	0.36
B4 P4	楕円	0.33	0.26	0.36
B4 P5	円	0.48	0.47	0.27

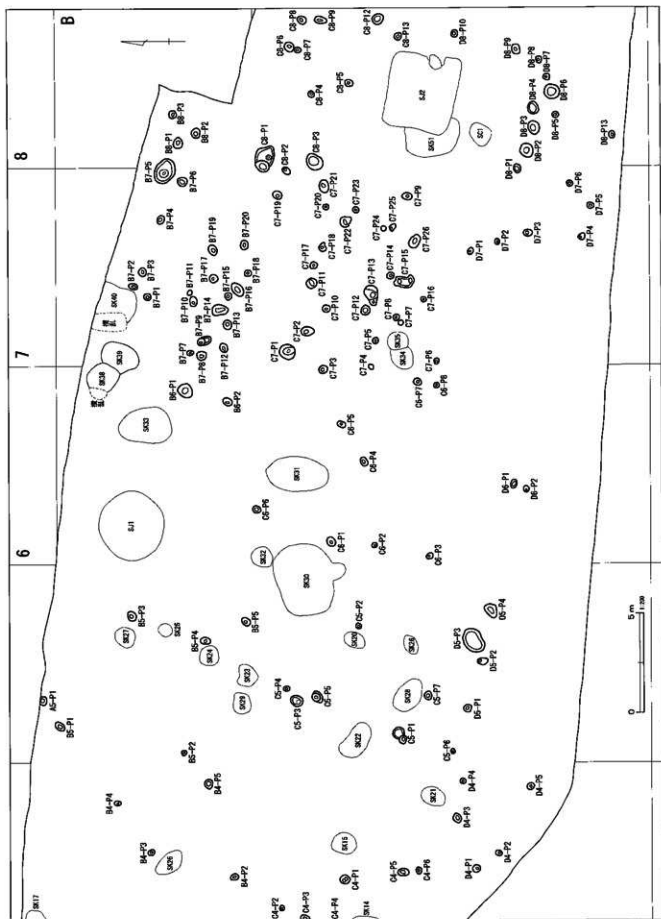
第35表 ビット計測表(2)

番号	形態	長軸	短軸	深さ	番号	形態	長軸	短軸	深さ	番号	形態	長軸	短軸	深さ
C4 P1	円	0.48	0.45	1.35	C7 P11	円	0.55	0.52	0.17	D9 P2	楕円	0.75	0.50	0.18
C4 P2	円	0.28	0.24	0.10	C7 P12	円	0.48	0.48	0.21	D9 P3	楕円	0.62	0.40	0.14
C4 P3	楕円	0.45	0.35	0.30	C7 P13	楕円	1.05	0.57	0.51	D9 P4	楕円	1.00	0.59	0.19
C4 P4	楕円	0.60	0.42	0.24	C7 P14	円	0.39	0.33	0.29	D9 P5	円	0.55	0.50	0.23
C4 P5	楕円	0.52	0.42	0.47	C7 P15	楕円	1.09	0.47	0.16	D9 P6	円	0.39	0.34	0.27
C4 P6	楕円	0.40	0.30	0.26	C7 P16	円	0.34	0.28	0.52	D9 P7	円	0.36	0.35	0.54
D4 P1	円	0.40	0.37	0.37	C7 P17	円	0.31	0.29	0.36	D9 P8	円	0.36	0.32	0.35
D4 P2	楕円	0.42	0.30	0.24	C7 P18	不整	0.41	0.39	0.36	D9 P9	円	0.30	0.28	0.33
D4 P3	円	0.42	0.38	0.42	C7 P19	円	0.44	0.39	0.55	D9 P10	円	0.31	0.26	0.52
D4 P4	円	0.34	0.34	0.40	C7 P20	円	0.36	0.32	0.32	D9 P11	円	0.30	0.26	0.22
D4 P5	円	0.40	0.36	0.41	C7 P21	円	0.60	0.54	0.24	D9 P12	円	0.33	0.29	0.28
A5 P1	楕円	0.44	0.47	0.30	C7 P22	円	0.52	0.44	0.33	E9 P1	円	0.42	0.37	0.44
B5 P1	楕円	0.52	0.36	0.26	C7 P23	円	0.30	0.30	0.14	E9 P2	円	0.26	0.24	0.22
B5 P2	円	0.38	0.37	0.26	C7 P24	円	0.30	0.30	0.31	C10 P1	円	0.35	0.33	0.29
B5 P3	楕円	0.56	0.48	0.44	C7 P25	円	0.37	0.30	0.31	C10 P2	円	0.42	0.40	0.20
B5 P4	楕円	0.47	0.40	0.32	C7 P26	楕円	0.67	0.49	0.25	C10 P3	楕円	0.70	0.48	0.40
B5 P5	楕円	0.50	0.37	0.22	D7 P1	円	0.28	0.27	0.34	C10 P4	円	0.31	0.25	0.44
C5 P1	楕円	0.84	0.64	0.38	D7 P2	円	0.33	0.26	0.43	C10 P5	円	0.47	0.40	0.17
C5 P2	円	0.39	0.33	0.42	D7 P3	円	0.40	0.37	0.33	C10 P6	不整	1.12	0.43	0.25
C5 P3	楕円	0.77	0.56	0.20	D7 P4	円	0.36	0.30	0.55	C10 P7	円	0.32	0.27	0.23
C5 P4	円	0.32	0.30	0.16	D7 P5	円	0.41	0.34	0.38	D10 P1	円	0.31	0.29	0.25
C5 P5	円	0.63	0.59	0.22	D7 P6	円	0.37	0.36	0.33	D10 P2	円	0.30	0.28	0.13
C5 P6	円	0.28	0.28	0.27	B8 P1	円	0.55	0.48	0.27	D10 P3	円	0.22	0.22	0.25
C5 P7	円	0.39	0.39	0.22	B8 P2	円	0.47	0.47	0.19	D10 P4	円	0.31	0.29	0.37
D5 P1	円	0.43	0.40	0.22	B8 P3	円	0.42	0.35	0.15	D10 P5	円	0.29	0.22	0.27
D5 P2	楕円	0.60	0.44	0.43	C8 P1	楕円	1.48	0.90	1.10	D10 P6	円	0.32	0.29	0.33
D5 P3	楕円	1.31	0.94	0.14	C8 P2	楕円	0.42	0.32	0.39	D10 P7	円	0.28	0.25	0.55
D5 P4	楕円	0.74	0.52	0.23	C8 P3	楕円	0.95	0.80	1.12	D10 P8	円	0.26	0.23	0.23
B6 P1	円	0.78	0.69	0.25	C8 P4	円	0.36	0.33	0.49	D10 P9	円	0.27	0.27	0.30
B6 P2	楕円	0.53	0.42	0.38	C8 P5	円	0.42	0.39	0.58	D10 P10	円	0.32	0.28	0.34
C6 P1	円	0.44	0.40	0.45	C8 P6	円	0.52	0.48	0.21	D10 P11	楕円	0.37	0.28	0.33
C6 P2	円	0.29	0.25	0.47	C8 P7	円	0.35	0.33	0.43	D10 P12	円	0.31	0.29	0.40
C6 P3	円	0.34	0.34	0.35	C8 P8	楕円	0.53	0.41	0.22	D10 P13	円	0.37	0.37	0.28
C6 P4	楕円	0.57	0.40	0.44	C8 P9	楕円	0.60	0.39	0.21	D10 P14	円	0.35	0.33	0.13
C6 P5	円	0.42	0.36	0.46	C8 P10	円	0.42	0.40	1.12	D10 P15	円	0.28	0.27	0.43
C6 P6	円	0.36	0.36	0.09	C8 P11	円	0.46	0.42	0.28	D10 P16	円	0.39	0.38	0.11
C6 P7	円	0.38	0.32	0.16	C8 P12	円	0.60	0.60	0.30	D10 P17	円	0.45	0.40	0.18
C6 P8	円	0.34	0.31	0.28	C8 P13	円	0.47	0.43	0.17	D10 P18	楕円	0.40	0.30	0.16
D6 P1	円	0.43	0.36	0.45	D8 P1	円	0.40	0.36	0.05	D10 P19	円	0.44	0.43	0.23
D6 P2	円	0.32	0.30	0.44	D8 P2	円	0.78	0.72	0.22	D10 P20	円	0.33	0.31	0.49
B7 P1	円	0.42	0.42	0.22	D8 P3	円	0.67	0.62	0.34	D10 P21	円	0.37	0.37	0.44
B7 P2	楕円	0.48	0.36	0.18	D8 P4	円	0.60	0.53	0.15	D10 P22	円	0.37	0.30	0.37
B7 P3	円	0.47	0.43	0.18	D8 P5	円	0.35	0.34	0.29	D10 P23	円	0.30	0.26	0.36
B7 P4	楕円	0.49	0.39	0.22	D8 P6	円	0.83	0.79	0.22	D10 P24	円	0.36	0.32	0.64
B7 P5	楕円	1.27	1.05	0.39	D8 P7	円	0.40	0.40	0.23	D10 P25	楕円	0.54	0.40	0.57
B7 P6	円	0.43	0.41	0.51	D8 P8	楕円	0.37	0.26	0.30	D10 P26	円	0.42	0.41	0.30
B7 P7	円	0.40	0.34	0.33	D8 P9	円	0.47	0.45	0.21	E10 P1	円	0.33	0.30	0.42
B7 P8	円	0.51	0.44	0.23	D8 P10	円	0.45	0.42	0.24	E10 P2	円	0.32	0.32	0.73
B7 P9	楕円	0.59	0.44	0.38	D8 P11	楕円	0.62	0.44	0.34	E10 P3	楕円	0.48	0.38	0.17
B7 P10	楕円	0.51	0.40	0.25	D8 P12	円	0.34	0.34	0.22	E10 P4	円	0.30	0.29	0.50
B7 P11	円	0.37	0.31	0.25	D8 P13	円	0.35	0.30	0.13	E10 P5	円	0.28	0.27	0.40
B7 P12	楕円	0.53	0.41	0.53	C9 P1	円	0.34	0.29	0.45	E10 P6	円	0.24	0.24	0.34
B7 P13	円	0.45	0.44	0.21	C9 P2	楕円	0.40	0.32	0.49	E10 P7	楕円	0.47	0.31	0.16
B7 P14	楕円	0.92	0.58	0.23	C9 P3	円	0.30	0.25	0.17	E10 P8	楕円	0.49	0.38	0.66
B7 P15	円	0.37	0.33	0.33	C9 P4	円	0.38	0.32	0.24	E10 P9	円	0.38	0.33	0.69
B7 P16	楕円	0.71	0.47	0.13	C9 P5	円	0.67	0.62	0.19	E10 P10	円	0.34	0.31	0.54
B7 P17	円	0.46	0.42	0.30	C9 P6	円	0.72	0.68	0.13	E10 P11	楕円	0.47	0.34	0.27
B7 P18	円	0.40	0.38	0.18	C9 P7	円	0.39	0.33	0.22	E10 P12	円	0.41	0.38	0.38
B7 P19	楕円	0.55	0.42	0.19	C9 P8	円	0.39	0.37	0.18	E10 P13	円	0.27	0.24	0.35
B7 P20	円	0.52	0.48	0.26	C9 P9	円	0.89	0.84	0.26	E10 P14	円	0.47	0.39	0.46
C7 P1	円	0.80	0.80	0.76	C9 P10	楕円	0.58	0.49	0.12	C11 P1	円	0.30	0.27	0.39
C7 P2	楕円	0.65	0.46	0.19	C9 P11	円	0.32	0.28	0.39	C11 P2	円	0.53	0.52	0.19
C7 P3	円	0.43	0.35	0.24	C9 P12	円	0.62	0.75	0.28	D11 P1	円	0.32	0.32	0.14
C7 P4	円	0.27	0.27	0.19	C9 P13	円	0.85	0.80	0.30	D11 P2	円	0.55	0.51	0.22
C7 P5	円	0.33	0.30	0.39	C9 P14	円	0.46	0.38	0.17					
C7 P6	円	0.30	0.28	0.30	C9 P15	円	0.29	0.25	0.23					
C7 P7	円	0.26	0.25	0.30	C9 P16	楕円	0.72	0.53	0.35					
C7 P8	円	0.35	0.34	0.36	C9 P17	円	0.37	0.34	0.23					
C7 P9	楕円	0.49	0.38	0.36	C9 P18	円	0.40	0.34	0.23					
C7 P10	円	0.39	0.37	0.52	D9 P1	円	0.70	0.63	0.26					

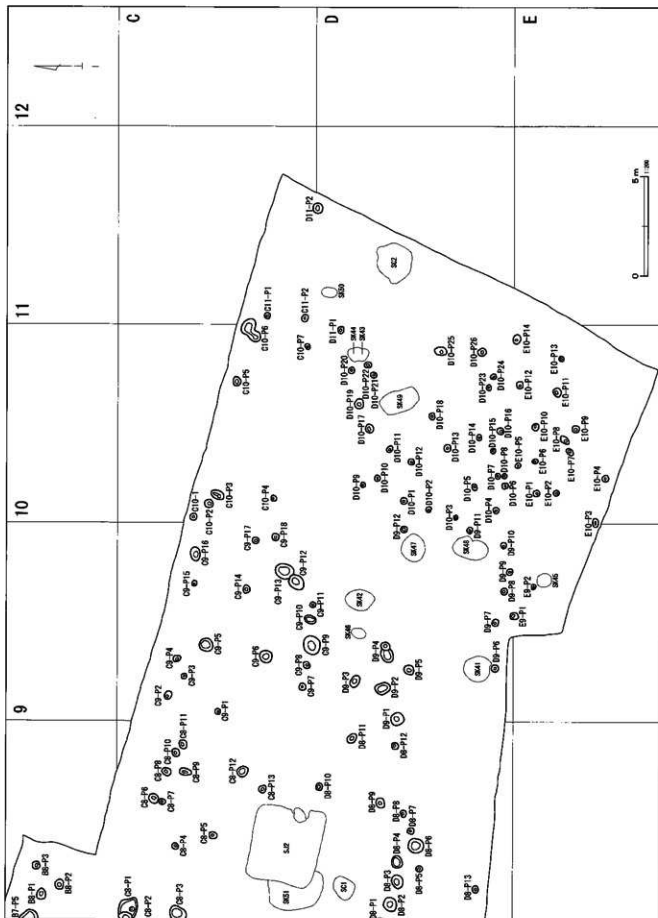
計測値の単位はm



第90図 グリッドピット (1)



第91図 グリッドピット (2)



第92図 グリッドピット (3)

グリッド出土遺物

縄文土器 (第93図)

1～8は勝坂式である。

1は水平口縁、2は、三角陰刻を伴う山形の突起が付される波状口縁である。口縁部文様帯は上下を隆帯とキャタピラ文によって区画し、内部に蛇行沈線や角押文が充填される。

3～6は胴部で、隆帯と角押文により器面が分割される。7は無文で口端内屈する口縁部で、勝坂式後半期の円筒形深鉢に伴うものであろう。8は隆帯＋キャタピラ文によって横楕円形の区画が構成される。

10・11は加曾利B式である。口縁部文様帯下端を区切る横位の隆帯がみられる。10では口縁部区画内を埋める集合沈線と半截竹管による蛇行懸垂文がみられる。

9・12は曾利系の土器である。9は1本隆帯の蛇行懸垂文の左右に矢羽根状の集合沈線文が描かれる深鉢胴下半部、12は小波状の隆帯が巡る深鉢頸部である。

13・14は扁平な隆帯のみられる胴部で、13は隆帯上にも縄文が施文される。15～18は縄文のみ施文される破片で、地文はすべてLR単節縦位回転である。

19・20は無文の底部である。20はやや強い裾張りの器形で、後期前葉以降の可能性がある。

石器 (第93図)

21～23は石鏃である。21は、ホルンフェルス製で風化がやや著しい。加工は精緻だが、裏面中央部には素材面が一部残っている。平基で裏面基部にやや階

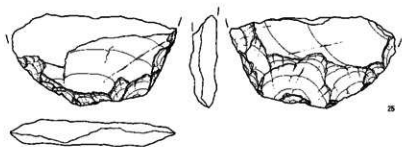
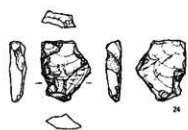
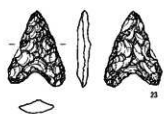
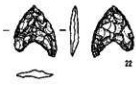
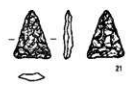
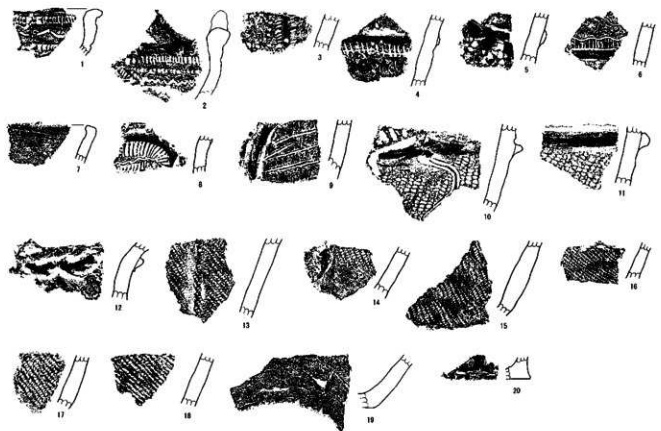
段状の段差が残る。B-5グリッドから出土した。19.0mm×14.0mm×3.5mm、0.7g。

22は、チャート製で、抉りの深い凹基である。側面は緩やかな弧状をなし、先端部は鋭い。左脚部は欠損後に再加工されているため、やや短くなっている。D-4グリッドから出土した。19.5mm×16.0mm×3.0mm、0.8g。

23は、やはりチャート製で、V字状の凹基で幅広い脚部を有する石鏃である。他の石鏃に比べて大型で、加工が細かく表面の中央には両側縁からの加工により稜がたっている。左側縁部に小さな抉り状の欠損部がある。C-10グリッドから出土した。28.0mm×21.2mm×5.0mm、2.3g。

24は、二次加工を有する剥片で、チャート製である。小型の板状の剥片を素材としており、左右両側縁に不定形な剥離が施されている。左側縁部では表裏から施された二次加工で抉り状の刃部が作出されている。さらに、下半部では、両側縁の加工が末端で収束するように施されており、錐状の機能部を作出していた可能性もあるが、先鋭な部分は認められない。D-10グリッドから出土した。23.0mm×19.5mm×6.0mm、3.3g。

25は、打製石斧で、斑レイ岩製である。刃部のみ残存しており、全体形状は定かではない。刃部の作出は表裏両面への剥離によりなされているが、特に裏面は粗く、刃部形状は直線をなさない。表上表採品である。残存する大きさは、35.0mm×63.0mm×10.0mm、26.2gである。



第93図 グリッド出土遺物

VI 結語

1. 上町東遺跡

上町東遺跡からは、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡6軒、陥し穴2基、中・近世の竪穴状遺構8基、掘立柱建物跡1棟、土壇56基、井戸跡2基、溝跡4条が検出された。

縄文時代の竪穴住居跡のうち、2軒は柄鏡形住居の可能性があり、張り出し部に敷石が残されていた。

また、第1号竪穴住居跡の石囲炉内からは、破片となった深鉢が出土し、炉の廃絶に関わる儀礼の存在が想定される。この深鉢は、称名寺土器の最古段階に近い土器と考えられ、4単位の山形波状口縁のキャリパー形となる。当期の住居跡からの出土例は、県内では類例が少なく、貴重な検出例となった。

中・近世の遺構は、出土遺物から殆どが近世に属すると考えられる。第1号掘立柱建物跡は、竪穴状遺構に壊されており、中・近世の遺構の中では最も古い時期のものと考えられるが、遺物が出土せず、詳細な時期は明らかにできなかった。

竪穴状遺構は、長方形の平面形を有し、底面は貼床が施され、床面中央部付近に炉が検出された。柱穴が検出された竪穴状遺構もあり、上屋構造を有する建物遺構であったと考えられる。床面から寛永通寶(銅銭)が出土した遺構もある。

また、2号井戸跡からは、井戸廃絶後に廃棄された近世の陶磁器類と、鍛冶関連遺物が多量に出土した。この中に江戸時代後半～明治時代の僅かな期間

2. 旭原遺跡

旭原遺跡からは、今回の調査で、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出された。

旧石器時代の調査では、立川ルームⅢ層相当層から、石器集中が1箇所検出された。調査区の南端で検出したため、さらに南側に石器集中が広がっていた可能性も考えられる。旧石器時代の遺物については後述する。

に生産された、飯能焼の製品が含まれていた。

飯能焼は、「緑褐色透明釉」と「イチッン模様」を特徴とする在地産の陶器で、極めて短期間に操業されたためか、これまで、伝世品や古文書等にその存在が認められる程度で、実態が明らかとなっていなかった。生産遺跡である原窯跡を除くと、市内の遺跡からの出土は極めて稀である。

出土器種は、行平鍋、徳利が最も多く、ほかに土瓶、片口鉢、薬味入れ、餌猪口(えちよく)等が出土した。

原窯出土資料の中では、ある程度の比率を占める皿・鉢類・碗類が、本遺跡では少なく、これを補うように瀬戸美濃系・肥前系・益子系の陶磁器が出土した。

第2号井戸跡からは、他に羽口・鉄滓類等の鍛冶関連遺物が出土した。第70図に図示したものは、羽口と椀形滓である。井戸跡廃絶時に他の陶磁器とともに一括廃棄されたものと考えられ、上町東遺跡に住した人々の中に、製鉄(鍛冶)関係者がいたことを示唆するものとして注目される。

また、2号井戸跡は、掘立柱建物跡、竪穴状遺構が集中する地点からは約25mとやや離れた位置で単独で検出されたが、この距離は、同じ居住圏内としても問題なく、掘立柱建物跡・竪穴状遺構を使用していた人々が井戸跡に廃棄した可能性はある。

縄文時代の竪穴住居跡は、やや小型の円形で、遺物は少ないが、中期の破片が出土した。

陥し穴は、東西に伸びる尾根上の台地に点在するが、概ね主軸方向が一定で、ほぼ等間隔に並ぶところもあることから、陥し穴を結ぶ、獣道の存在が想定できる。

集石土壇は、ほぼ円形の土壇に直径5cm前後の破

砕礫が充填され、礫の多くは火を受けていた。

土城は、殆どが性格不明のものであるが、のうち1基から、縄文時代中期の深鉢が埋設されたものが検出された。上半部分を欠損するが、正位に埋設され、周辺に柱穴等が検出できなかったため、堅穴住居跡ではなく、屋外の埋裏であった可能性がある。

奈良時代の堅穴住居跡は、調査区東側で検出した。

調査では、奈良時代の遺構は住居1軒のみであったが、過去の飯能市教育委員会の調査によって、旭原遺跡は、奈良・平安時代を中心とした集落遺跡であったことが明らかとなっており、今回の調査地点は、分布のやや西寄りに位置している。

今回の調査では、特に、旧石器時代の出土遺物と石器集中が特筆されるため、旧石器時代について簡単にまとめた。

出土した旧石器時代の遺物は、厚手の剥片を素材とした削器、掻器類を特徴としている。石器の出土層位は立川ロームⅢ層相当層であるが、ローム層の堆積はあまり良好ではなく、それだけで石器群の編年的な位置づけを行うことは困難であるため、石器の製作技術や形態的な特徴から考えてみたい。

まず、製品類の素材は縦長剥片を主としている。単打面を残し、両側縁がほぼ平行しながら先細りとなる形態で、厚みは様々であるが、やや湾曲するものが多い。背面の剥離構成を見る限り、打面を固定した「石刃技法」を用いているのではないことがわかる。例えば、1点出土している掻・削器は、同様の属性をもつ縦長剥片を素材とし、掻器の刃部が縦長剥片の末端に作出され、両側縁に削器の刃部が作出されている。一方、組成する2点の石核は立方形の転石を利用し、自然面を打面として矩形の剥片を

剥離しているものであるが、それに対応するような剥片は出土していない。

二次加工は、素材の厚みに応じ種々使い分けているが、体部の奥深くまで入るような面的加工は認められない。加工部位は両側縁に施されているものが多いが、一方が他方に比して連続性、統一性の低いものもある。大型の削器をみても、外形は木葉形に近く、尖頭状を呈するが、二次加工は左右側縁で異なり、特に右側縁には大きく節理面を残している。

以上のことから、出土した石器群は旧石器時代の最終末から縄文時代草創期に位置づけることが妥当と考える。器種組成が偏っており、判断の難しいところではあるが、縄文時代では当該期の遺構や土器などが検出されていないことから、旧石器時代最終末の石器群として認識しておきたい。

削器や掻器に偏る組成は、遺跡での作業の偏りを示す。遺跡の性格付けとしては、前述のように石核は出土しているが、それに対応する剥片はなく、剥片剥離の痕跡は認められないこと。使用石材は、製品類がガラス質黒色安山岩と珪質頁岩、石核はチャートと珪質頁岩で、製品類の母岩は見かけ上それぞれ異なるように見えること。ただし、いくつかの削器や掻・削器などの製品類と母岩を同じくする刃部調整剥片と考えられる小剥片が同じ石器集中部から出土していること。これらのことから当遺跡は、削器や掻・削器といった製品類や素材となる剥片を持ち込み、それらの使用、あるいはメンテナンスを行った場所であると考えてよいだろう。今後周辺の資料の蓄積により、遺跡間の関係性も明らかになっていくだろうし、その中で石器群の編年的な位置づけも確定してくるものと考えている。

引用・参考文献

- 稻村坦元 1929 『埼玉史談』 1—1 「人間部高麗村発見の石器時代住居址」 埼玉郷土会
- 岡本健一・金子直行・赤熊浩一 1993 『谷津・二反田・下向山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131集
- 熊沢孝之 1997 『栗屋遺跡第5次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書11
- 熊沢孝之 1997 『飯能の遺跡(21)』 TV浜摩久保遺跡第25次調査。飯能市教育委員会
- 栗岡 潤・西井幸雄 1995 『西久保／金井上』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
- 高橋一夫他 1974 『前内出雲跡発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第24集 埼玉県遺跡調査会
- 黒坂禎二他 1995 『向山／上原／向原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
- 細田 勝・渡辺清志 1998 『宿東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第197集
- 坂詰秀一 1971 『武蔵新久栗跡』 雄山閣出版
- 坂詰秀一 1984 『入間市八坂前窯跡』 八坂前窯跡調査会 入間市教育委員会
- 書上元博 1996 『八木北／八木／八木前／上広瀬北／森坂北／森坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
- 小泉 功 1979 『芦刈場遺跡』 飯能市教育委員会
- 小泉 功他 1988 『龍川遺跡』 埼玉県入間市埋蔵文化財調査報告第8集 埼玉県入間市教育委員会
- 城近憲市他 1972 『宮地遺跡』 狭山市文化財調査報告Ⅰ 狭山市教育委員会
- 西井幸雄他 1996 『丸山／青梅道南／十文字原／東武蔵野／西武蔵野』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第164集
- 西井幸雄 1996 『栗屋／屋調／中台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第171集
- 曾根原裕明・富元久美子 1991 『飯能の遺跡(11)』 「芋久保遺跡第1・2次調査」 飯能市教育委員会
- 曾根原裕明・柳戸信吾 1985 飯能市内遺跡発掘調査報告書2 『飯能の遺跡(2)』 「加能里遺跡5次、池ノ東遺跡3次、張摩久保遺跡3・6次」 飯能市教育委員会
- 曾根原裕明・柳戸信吾 1986 飯能市内遺跡発掘調査報告書3 『飯能の遺跡(3)』 「堂前遺跡2・3次調査」 飯能市教育委員会
- 曾根原裕明・柳戸信吾 1987 飯能市内遺跡発掘調査報告書4 『飯能の遺跡(6)』 「堂前遺跡4次調査」 飯能市教育委員会
- 曾根原裕明他 1993 『堂ノ根遺跡第1次調査』 飯能市遺跡調査会
- 村上達哉・熊沢孝之・富元久美子 2001 『落合上ノ台遺跡第1次調査』 飯能市遺跡調査会
- 村上達哉 2004 『飯能の遺跡(32)』 「滝ノ下遺跡1次、原郷遺跡1次、茶内遺跡2次、ヨマキ遺跡1次、旭原遺跡2・3次調査」 飯能市教育委員会
- 村上達哉 2004 『飯能市郷土館研究紀要第3号』 「河原毛久保窯跡で焼かれた平安時代の須恵器坏について」 飯能市郷土館
- 谷井 彪 1973 『坂東山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集 埼玉県教育委員会
- 中平 薫他 1988 『宮ノ後・宿東—第4・5次調査—』 日高市埋蔵文化財調査報告第13集
- 中平 薫他 1994 『宿東—第7次調査—』 日高市埋蔵文化財調査報告第24集
- 中平 薫他 1995 『宿東—第9・10次調査—』 日高市埋蔵文化財調査報告第25集
- 富元久美子 1993 『飯能の遺跡(15)』 「株木遺跡(第1次)・旭原遺跡(第1次)発掘調査」 飯能市教育委員会
- 富元久美子 1994 『飯能の遺跡(17)』 「加能里遺跡第1次調査」 飯能市教育委員会
- 富元久美子 1995 『飯能の遺跡(19)』 「加能里遺跡第10次調査」 飯能市教育委員会
- 富元久美子 1998 『飯能の遺跡(25)』 「加能里遺跡第16・20・21次調査」 飯能市教育委員会
- 富元久美子 1999 『飯能の遺跡(27)』 「飯能焼原窯跡第1・2次調査」 飯能市教育委員会
- 富元久美子他 1991 『栗屋遺跡第4次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書5
- 富元久美子他 1992 『栗屋遺跡第3次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書6
- 富元久美子他 1993 『堂ノ根遺跡第1次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書8
- 富元久美子他 1994 『加能里遺跡第6次調査』 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書10
- 柳戸信吾・村上達哉 1999 『大日向遺跡・八王子遺跡』 飯能市遺跡調査会
- 齋藤祐司 1989 『八坂前窯跡』 (第3次調査) 入間市八坂前窯跡(3)遺跡調査会 入間市教育委員会
- 齋藤祐司 2001 『谷久保窯跡第2次調査』 入間市遺跡調査会埋蔵文化財報告書第21集 入間市遺跡調査会
- 齋藤祐司他 1992 『坂東山遺跡』 (第3次調査) 入間市遺跡調査会
- 齋藤祐司他 1992 『坂東山遺跡』 (第1・2次調査) 入間市遺跡調査会

写真図版



上町東・旭原遺跡遠景（東から）



上町東・旭原遺跡遠景（西から）



上町東遺跡全景（東から）



上町東遺跡全景（西から）



第1号住居跡全景



第1号住居跡敷石出土状況



第1号住居跡炉跡



第2号住居跡全景



第2号住居跡埋壙出土状況



第2号住居跡埋壙断面



第3号住居跡全景



第3号住居跡敷石出土状況



第4号住居跡全景



第5号住居跡全景



第6号住居跡全景



第6号住居跡炉跡



第1号竖穴状遺構全景



第2号竖穴状遺構全景



第3号竖穴状遺構全景



第4号竖穴状遺構全景



第5号竖穴状遺構全景



第6号竖穴状遺構全景



第7号竖穴状遺構全景



第8号竖穴状遺構全景



第1号掘立柱建物跡全景



第1・2号溝跡全景



第3号溝跡全景



第2号井戸跡全景



第1号住居跡出土土器 第11図1



第2号住居跡出土土器 第17図1



第6号住居跡出土土器 第28図1



第6号住居跡出土土器 第28図2



近世～近代の陶磁器 第63図1



近世～近代の陶磁器 第63図3



近世～近代の陶磁器 第63図6



近世～近代の陶磁器 第63図7



近世～近代の陶磁器 第63図8



近世～近代の陶磁器 第63図10



近世～近代の陶磁器 第64図14



近世～近代の陶磁器 第64図16



近世～近代の陶磁器 第64図23



近世～近代の陶磁器 第64図24



近世～近代の陶磁器 第64図27



近世～近代の陶磁器 第64図28



近世～近代の陶磁器 第64図29



近世～近代の陶磁器 第65図30



近世～近代の陶磁器 第65図31



近世～近代の陶磁器 第65図32



近世～近代の陶磁器 第65図35



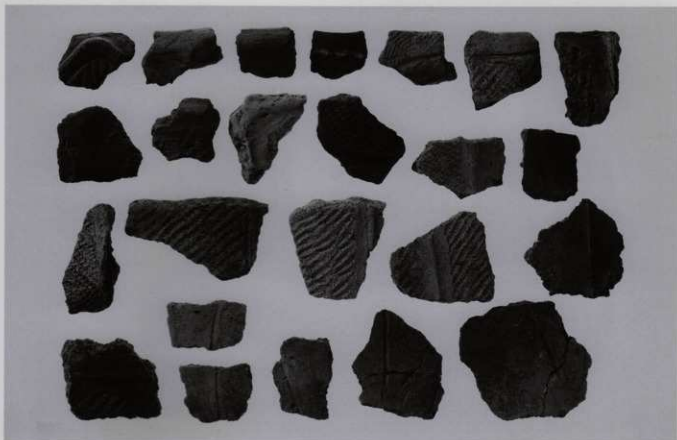
近世～近代の陶磁器 第68図68



近世～近代の陶磁器 第68図69



近世～近代の陶磁器 第68図71



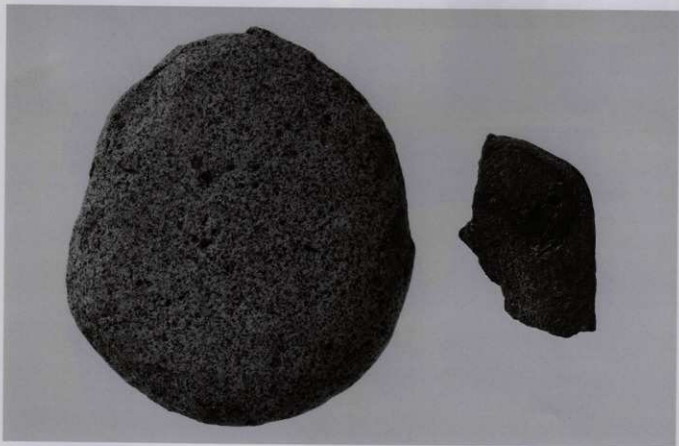
第1号住居跡出土土器 第12図2~25



第1号住居跡出土土器 第12図26~47



第1号住居跡出土土器 第12図48~51



第1号住居跡出土土器 第13図52・53



第2号住居跡出土土器 第18图5~18



第3~5号住居跡出土土器 第24图1~14



第6号住居跡出土土器 第29图3~9



第6号住居跡出土土器 第29图10~15



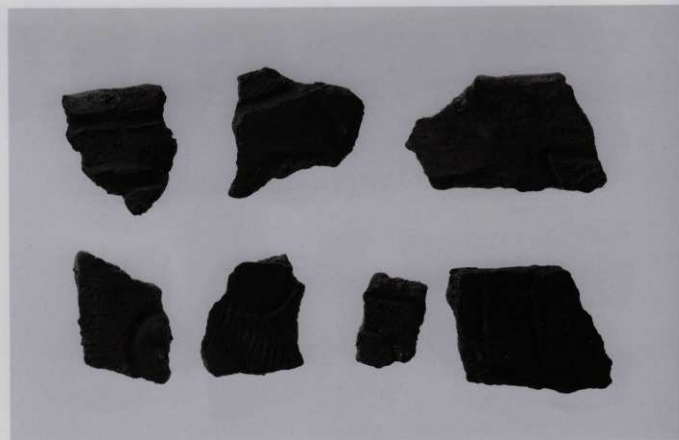
土壙出土土器 第54図1～12



グリッド出土土器 第60図3～24



グリッド出土土器 第60図25~41



グリッド出土土器 第60図42~48



グリッド出土石器 第61図49～57



グリッド出土石器 第62図58～60



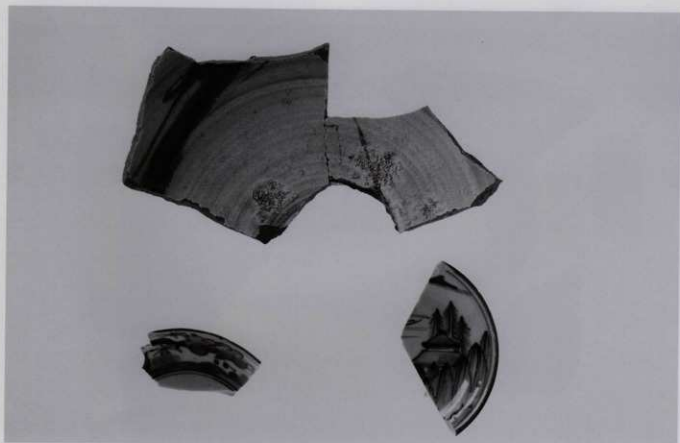
近世～近代の陶磁器 第64図17・18・20・21



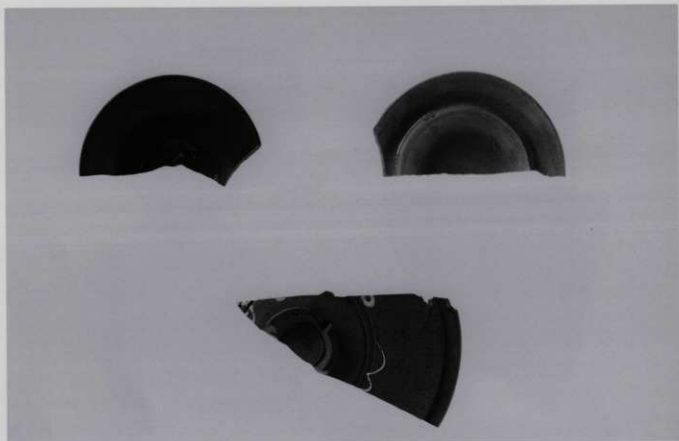
近世～近代の陶磁器 第65図33・34・36～38



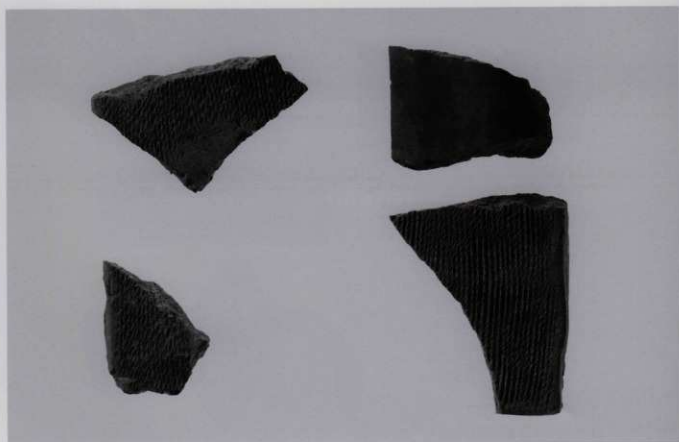
近世～近代の陶磁器 第66図43・50 第67図54・55



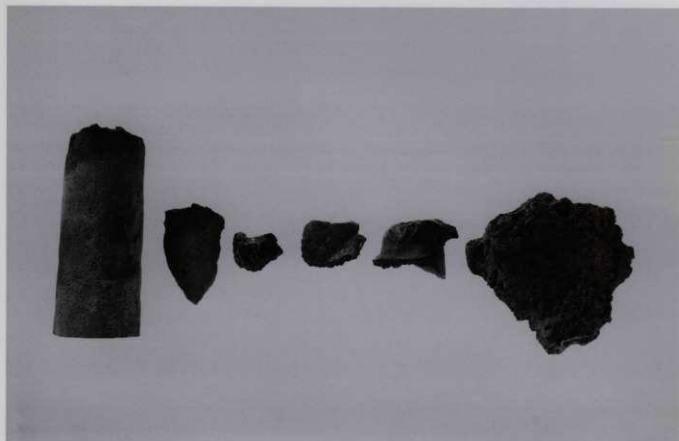
近世～近代の陶磁器 第66図53 第67図57 第68図65



近世～近代の陶磁器 第68図66・67・70



瓦 第69図1～4



彌羽口・鉄滓 第70図1～6



金属製品・古銭・石製品 第70図7～12



旭原遺跡全景



旭原遺跡全景（東から）



第1号住居跡全景



第1号住居跡土層断面



第2号住居跡全景



第2号住居跡遺物出土状況



第3号土壇



第3号土壇



第11号土塊



第16号土塊



第47号土塊



第49号土塊



第46号土塊遺物出土狀況



第46号土塊完掘狀況



第1号集石土壤



第1号集石土壤完掘状况



第2号集石土壤



第2号集石土壤完掘状况



第1号石器集中遺物出土状况



口一ム層断面 (TP3)



旧石器時代の石器 第75図 第76図4 (表)



旧石器時代の石器 第75図 第76図4 (裏)



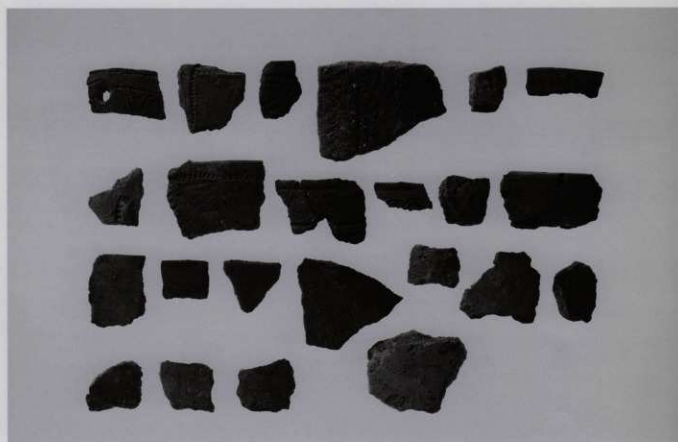
旧石器時代の石器 第76図5～9 第77図11～17 (表)



旧石器時代の石器 第76図5～9 第77図11～17 (裏)



旧石器時代の石器 第77図10 第78図



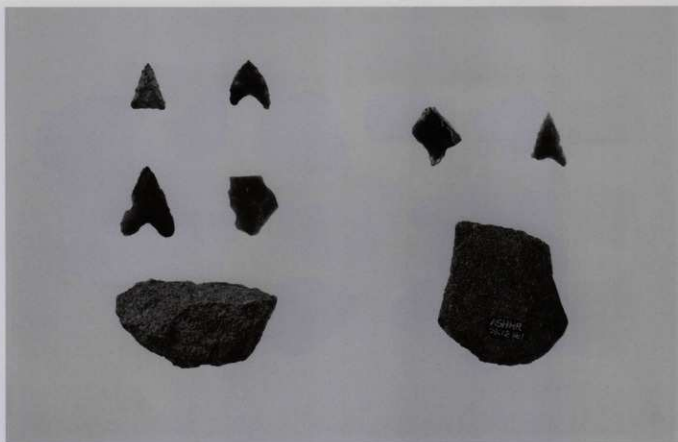
第1号住居跡出土石器 第80図



土壇出土土器 第87図



グリッド出土土器 第93図



縄文時代の石器 第87・93図



第46号土壙出土遺物 第87図



第2号住居跡出土土器 第81図

報告書抄録

ふりがな	かみちようひがし/あきひはら							
書名	上町東/旭原							
副書名	一般国道299号(飯能狭山バイパス)建設事業関係埋蔵文化財調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第324集							
編著者名	栗岡潤・渡辺清志・宮井英一							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4-4-1				TEL 0493-39-3955			
発行年月日	西暦2006(平成18)年3月24日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上町東遺跡	埼玉県飯能市中 山字上町531-1他	11209	116	35° 51' 28"	139° 19' 20"	20010501~ 20010831	2,500	道路建設
旭原遺跡	埼玉県飯能市中 山356他	11209	108	35° 58' 45"	139° 19' 29"	20030619~ 20030930	3,000	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上町東遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	6軒	縄文土器・石器			
		近世以降	竪穴状遺構	2	陶磁器・瓦	井戸跡から飯能焼製品が出土		
旭原遺跡	集落跡	旧石器時代	石器集中	1箇所	石器			
		縄文時代	竪穴住居跡	1軒	縄文土器・石器			
		奈良時代	竪穴住居跡	1軒	土師器・須恵器			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第324集

飯 能 市

上町東／旭原

一般国道299号（飯能狭山バイパス）建設事業関係埋蔵文化財調査報告

平成18年3月14日 印刷

平成18年3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷／朝日印刷工業株式会社